506
181

露光量違いの為重複撮影

TROU DE
L'ENFER

露光量違いの為重複撮影

506-18/

TRAU DE L'ENFERE

PAR

ALEXANDRE DUMAS

地獄谷

アレクサンドル・デユマ作
福岡雄川譯

1922

大正
11.7.19
内交

地獄谷目次

一　嵐と歌……一
二　幻影か？……二
三　五月の朝……三
四　惜しき時……三
五　幻影の正體……四
六　左様なら……四
七　ハイデルベルヒの古城址……五
八　重大な依頼……五
九　湧き來る思ひ……六
一〇　サミエルの生い立ち……六
一一　彼等は誰を選んだか……七
一二　ロロット……八

一三　葡萄酒合戰……八八
一四　決　闘!!……九一
一五　天使の祈、妖女の守護……九六
一六　愛　の　道……一〇二
一七　森　の　隱　者……一〇八
一八　地　獄　谷……一一七
一九　草木は何を語つたか……一二七
二〇　傷いた牝鹿……一三七
二一　敵對のはじめ……一四六
二二　ツーゲンブンド……一五四
二三　牧　師　の　家……一六六
二四　驚　異!!……一七七
二五　幸福の叫び……一八四
二六　暗　き　蔭　影……一八九

二七　要塞內の敵……一九五
二八　醫者としてのサミエル……二〇〇
二九　建築に潛む祕密……二〇五
三〇　跪　計……二一二
三一　愛　と　義　務……二一一
三二　二つの希望……二一六
三三　二重の城樓……二二三
三四　獅　子　宿……二三八
三五　媚　藥……二四四
三六　トライシター……二四八
三七　洋服屋の店先……二五六
三八　獄舍の襲擊……二六一
三九　軍　隊　出　動……二六九
四〇　奇異なる行列……二七三

四一 甘い悲哀……二九六
四二 熱い接吻……二八三
四三 恐怖!!……二九一
四四 一行の到着……二九五
四五 ランデツク村長……三〇三
四六 森の祝宴……三〇八
四七 樂しき野外……三一三
四八 男爵の來訪……三一八
四九 呪はれたる運命……三二九
五〇 アメリカより……三三八
五一 アメリカへ……三四三
五二 ベルの音……三五〇
五三 喉頭炎……三六三
五四 母性美の誘惑……三六八

五五 災厄と復讐……三七七
五六 生か死か?……三八五
五七 ナポレオンと獨逸……三九三
五八 祕密! 祕密!……三九八
五九 請願書捧呈……四〇三
六〇 毒……四〇七
六一 サミエルの失脚……四一四
六二 嬰兒の泣聲……四一八
六三 巴里へ!!……四二三
六四 地獄の穴……四二七

地獄谷

アレクサンドル・デユマ作
福岡雄川譯

一、嵐と歌

千八百十年、五月十八日の夜のことであつた。二人の旅人が、オーデンワルトの險しい峽谷を旅してゐた。空は暗く、重々しい雲が垂れこめて、あたりはまるで墨を塗り潰したやう、殆んど一歩先きを見分けることも出來ない位であつた。

何物をも眼にすることの出來ない深い、濃い闇の中に、彼等の姿は溶けこんでしまつてゐた。時々物怖ぢしたやうに彼等を乘せた馬の嘶く聲が、縱の梢のざわめきに混つて聞え、また用心深く運び出す馬の蹄の岩角に觸れて鳴る響きが聞えなかつたならば、如何して今頃、かうした阻道を旅してゐる人のあることが知れよう。

嵐は刻々と迫り近づいて來てゐた。渦卷き來る砂塵は彼等とその乘馬を眼潰して、樹木を捻ぢ曲げ投げつけるやうにあたりに激し、谷底から猛烈な勢で駛せ登つて來ては、峰を越えて次の谷へと轉げ

落ちて行く轟が物凄く、岩といふあらゆる岩は鳴り響き、反響し合ひ、全山が瞬く間に裂け崩れさうにさへ思はれた。百年の老木は枝をむしり取られ、幹を裂かれて谷底に吹き落されて行く。

闇黒の只中に於けるこれらの破壊の叫び!! それにも増して恐るべきものがまたとあらうか。數限りのない危險の想像に、人は立ちすくんでしまふであらう。

突然、風は止んだ。騒ぎは靜まつた。猛獸の唸りのやうな、遠くの谷の響が——然しそれも遠のいて行く。恐ろしき沈默!! 大自然の瞬時の呼吸!! すべては凝つとしてゐる。然しそれは更に新に、倍加された力で吹き來る嵐の前觸れだ。

この沈默の底に人聲が聞こえて來た。それは旅人の聲だ。

「……飛んだ目に遇ふもんだな。サミエル」

と彼は云ひ出した。「云はんこつちやなかつたんだ。もう少し様子を見てれやよかつた。フランクフールトを出てからこんな酷い目は始めてだよ。君が何と云つても聞かないもんだから……こんなぢや却つて嵐に遇ひにわざ〳〵出だしたやうなもんぢやないか。……でもまあ、かうなつちやつたものは致方がない。チョッ。」と彼は、前肢を折りさうになつた馬の反動でびつくりしながら言葉を切つたが

「致方がない、今に止むだらう。ハイデルベルヒ大學の名によつてもさうならなくちやならん筈だ。

太陽の光り、愛すべきもの〻笑顔よ。早く二十日になつて呉れ、死か、生か? 僕はそのことばかりに氣を揉んでゐるのだ。……だが、おい、まさかこのま〻世界が引つくり返つてしまふのではあるまいな。」

「心配しないで俺に任して置けばい〻んだよ。」

とサミエルはいくらか皮肉な調子を交へて答へた。

「そんなことより、おい、氣を付けないとこ〻に縦の木が仆れてゐるぜ。」

「ほうら。ほうら。」と云ひながらサミエルは、躊躇する馬を促して倒木を乘り越え、友の方を振り向いて、

「大丈夫か、ジュリアス。」

「大丈夫。」とジュリアスは答へて、樹木を乘り越え、「實際、君の頑固にも弱らされるよ。こんな險しい道を通らないでも、マムリング河に添うて眞直ぐに行けば何んのことは無かつたのに……君は道を知つてるやうな振りをしてゐて少しも知らないんだ。わざとこんな道を選んだわけもあるまいからね。實際云ふと、僕の方がまだよく知つてゐるよ。これから僕が案内しようよ。」

「君が案内する? 何を? 馬鹿な——俺に任して置けばい〻んだよ。」

「さうだ。正にさうかも知れない。君に任して置くとこんな山の中に連れこまれたり、北も南も無い國へ迷つて行つたり、何處をどう歩いてゐるのか、進んでゐるのか、後戻りしてゐるのか分らないやうな旅をすることになるからね。……おゝ、何といふことだ。雨までやつて來やがつた。こんな風でもいゝのかね。おい。——君は笑つてゐるね。泣笑ひですか。それは。」

「おい、冗談ぢやないぜ。笑はせるぢやないか。それがハイデルベルヒの大學生、二十歳の大坊ちやんの泣言なんだからな。我輩は却つてこの嵐が痛快なんだ。面白くて致方がないんだ。どうだ。唄でもやらないか。先づ我輩が歌ふよ。いゝか……。」

かう云つたと思ふと、青年は深く息を吸ひこんで、響きのある聲で歌ひ出した。恐らく突嗟の間に思ひついたのか、それともどこか遠い片田舎にはそんな唄もあるのかと思はれるやうな奇怪な唄を。

雨はをかしや
天の水漢
人間の苦しみの涙と違つて
素敵に甘い。

折りから黒雲を劈いて紫電一閃!! 地平の果から果まで、ぱつと輝いて、その不快な輝きは暫し消

えなかつた。光りの中に二人の旅人は活動畫のやうに映し出された。

彼等は二十歳か二十一歳位の青年達であつた。一人はやさしいおとなしさうな顔付の、きやしやな身體つきをした、空色の眼の持主であつた。云ふまでもなくジュリアスで、若きファウストにも譬へたい青年である。

ジュリアスが若きファウストなら、サミエルはまさにメフイストフレエスである。彼は背が高く頑丈さうで、きら〳〵した灰色の眼を持ち、眉は濃く、髪の毛は黒く、鼻が隆く、額が廣い。

二人とも、短い、黒い乘馬服を着て、皮帶でしつかりと腰を卷き、靴も帽子も細い鎖で止められてある。

先程の言葉の端々からも察することの出來るやうに、彼等は學生である。

電光の閃きに驚いて、ジュリアスは身をふるはすと、同時に眼を閉ぢてしまつた。それに反して、サミエルはさも痛快さうにあたりを見廻し、亢然として眼を放つた。

天地は再びもとの暗黒に返つた。電光が消えると振動するやうな雷鳴が雲から雲を傳はり響いて、やがて唸り出した風が谷底の方から岩を鳴らしながら吹き上げて來るのが聞こえて來た。

「ねえ、サミエル。」

と、其の時ジュリアスは少し顫ひ聲で云つた。

「ね、おい。少しの間この邊で休んでゐようよ。進むのは危險だよ。雷にでも打たれようものなら、片なしになつちまうぢやねえか。僕達の生命も、それに勿論――」

云ひ終らないうちにサミエルは呵々と笑ひ出した。そして拍車を當てたと思ふと、馬の駈け出す勢に自分も躍り上つて歌ひ出した。

稲妻は可笑しや
啓示の光り
恐れに祈る人を
見てはゐられぬ。

百歩あまりも駈出すと、サミエルは再び駈け戻つて來た。

「何んで君はそんなことをするんだい。」とジュリアスは嘆願するやうに云つた。「そんなことをしつて誰も君を偉いと云つて讃めはしないよ。唄なんか何だい。こんな場合に、いくら怒鳴りちらしつて誰も相手になつて呉れ手は無いぢやないか。」

第二の雷鳴が、最初より一層激しく、近く、二人の頭上に爆發した。

「相手になつて呉れ手が無いどころぢや無いよ。それ。」とサミエルは笑ひながら、「どうだ。この雷鳴と俺の咽喉と、どつちが響くか聞いて居てくれ。」

第三の雷鳴が、第二の雷鳴の反響がまだ雲から雲を傳つて響いてゐるうちに、更にはげしく鳴り出した。サミエルは聲張り上げて、

風は可笑しや
眞夏の風邪ひき
荒々しい戀の吐息と
比較にならぬ。

その時、雷鳴は雲から雲へと傳はつて消えて行つた。

「如何だ。雷鳴!!」とサミエルは空を仰ぎ見ながら呶鳴つた。「俺の咽喉には勝つ見込はあるまい。」

だが地平に消えた雷の轟きは、雨でサミエルに復讐して來た。大粒の雨は叩きつけるように落ちて來た。最早や雷鳴も嵐の音も、雨に搔き消されて姿を隱したのではないかとさへ思はれた。ジュリアスは何か口の中で呟きながら、この自然の怒りの中に、爲す術もなく立ちすくんでしまつた。

然し、サミエルの眼は、見る〳〵野性的の歡喜に輝き出した。瀧と灑ぐ雨中に立つて、彼は滴り落

つる雨滴を拂ひながら、笑ひ、歌ひ、そして叫んだ。

「さつき、君は何とか云つてたね。」とサミエルは叫びを止めて友の方へ振り向いた。恰もこの大自然の叫喚にそゝられたかのやうに彼は言葉を發した。「出發しないで宿にゐた方がよかつたとか、何とかを置くことを避けたかつたのかね。僕は今夜を享樂しまいと願つてゐたのかね。この大自然の動亂の中に身——君はこの偉大にして光榮ある今夜を豫期してゐたのだ。かうなることを願つてゐたのだ。そしてわざ〳〵君を引つ張り出して來たわけなのだ。この嵐を豫期し、雨を欲しなかつたなら、君の云ふやうにあの河に添うて行けばよかつたのだ。然し僕は、僕はこの險しい山路で、この叫喚を聞きたかつたのだ。あゝ、何といふ偉觀だらう。この大自然の動亂!! オーケストラ!! 眞に君、こんな時こそ千載一遇といふものだ。吾々は若いんだ。いゝか、若いんだよ。吾々には燃ゆる情熱の外何物もないのだ。死、恐怖、それが何だ。そんなものは惡魔にでもやつちまへ。吾々は若いんだ。胸の底を浚つて歌はんならん時だ。歌へ、歌へ!! 胸の血を傾け盡して歌へ。リヤ王は嵐を「吾が娘よ」と呼んでゐるではないか。僕は「吾が妹よ」と呼ぶのだ。吾が妹よ、嵐よ……そして稲妻よ……僕は稲妻を笑つた。然しそれは愛してるからだ。嵐は僕の兄妹だ。友達だ。人はともすると嵐や雷鳴を恐れ憎むが、何といふ馬鹿なこつた。嵐は何物をも害しない。僕は嵐的人間なんだ。天性嵐が好きなんだ。」

「君はさうかも知れないが、然し……」

「否、想像しても見たまへ。」とサミエルは尙もつゞけて、「僕達は自然の胸奥に突進してその祕密をあばかにやならん。僕はそのために、敢て惡魔にもなれば、メフイストテレスのやうに黑猫にもなり小犬にもなる。おつと、と、こりや何んだ。」

サミエルは急に馬の突然な動作で言葉を切つた。馬はかすかに恐怖の叫びを發して後退りした。たゞならぬ危險が道を遮つてゐたのだ。サミエルははつとして馬上から注意深い眼を投げて前方を見やつた。折りしも閃電は、天の一方から起つてあたりを明々と染め出した。

見ると徑は、大きく口を開いた深淵によつて消えてゐて、一方の切り斷つた懸崖が、物凄く二人の眼に映つて消えた。

「やあ、これやいかん。」とサミエルは馬を留めて云つた。

「君、氣を付け給へ。もつとこつちへ馬をよこしたまへ。」

「まあ、待て。何も恐ろしいことはない。ちよつとした谷だらう。よく見てみよう。」

サミエルは懸崖の方へ馬を近づけた。が、ふと思ひ返してひらりと馬から飛び下り、馬をジーリアスの手に殘して置いて、注意深く、深淵に近より、そして覗きにかゝつた。

然し暗黑は彼の眼に何物をも識別させなかつた。サミエルは石を一つ取つて、それを力任せに投げこんで見た。

そして彼はじいつと聞耳を立てた。

が、何んにも聞こえては來なかつた。

「うむ。」と彼はうなづいた。「音がしない。して見ると石は柔かい地面へ落ちたに相違ない。よし。」

言ひ終らぬうち、深い〳〵遙かの深みから大きな反響が聞こえて來た。

「やあ、それどこの騒ぎぢやない。」と彼は云ひ換へた。「飛んだところへ來てしまつた。一體この深淵は何なんだらう。」

「地獄谷。」

と、何處とも知れない、遠いやうな、或は近くでしたやうな、爽やかな、やさしい聲で、さう答へるものがあつた。

「えッ、然し何處から來た答にしろ、恐るゝに足りない。影も形もありやしないものを……。」

再び來た稻光りの中に、その大きな坑の反對側にあたつて、妖艶な風姿をした一人の女の立つてゐるのが、判然と見えた。

二、幻影か？

若い、不思議な女は眞直に立つてゐた。髪はふさ〳〵と肩に垂れかゝり、手や足は露き出しのまゝ短かいスカアトを穿き、角の生えた獸を革紐でつないで持ち、じつとして立つてゐた。地獄谷の向ふ側に現れた、この不可思議な、野性的な美を持つた一人の妖女!! それは人魅しの幻影か？ それは果して實體であらうか？

電光は消え、妖艶な姿も見えなくなつた。

「見たか、サミエル。」

信じ難いといつたやうな調子でジュリアスは訊ねた。

「うむッ。見た。そして確かに聞いた。」

「妖女の實在が肯定されるものとすれば、僕達は今見たものを容易く信じなければならないね。」

「いや、そんな理屈張つたことは如何でもいゝ。何といふ奇麗な、美しい奴だつたらう。ねえ、おい。」

彼は叫んだ、尙も彼女の聲を聞き、姿を見ようとするものゝやうに眼を見張つて。然し、もう何んの言葉も聞こえなかつた。姿も見えなかつた。

「地獄谷！　可矣！！　何が地獄谷だ。」

さう云ってサミエルは、ある決心に動かされたかの如く、友の手から馬を受け取ると、ひらりと飛び乘って、見當づけて置いた方向に馬の首を向け、ジュリアスが心配のあまり止めるのも聞かずに、懸崖の緣を廻って、妖女の現れたところへと跳び進んで行った。

だが、そこには何物も居なかった。無益にあたりを見廻しながら、サミエルは探し求めた。妖女を、幻影を、動物を――然し妖女も、その片腕も、持ってゐた山羊の影さへも無かった。

サミエルは、然し、それでは滿足出來なかった。彼は更にあたりの灌木の繁みや、崖下や、岩の間を隈なく探しはじめた。あとから來たジュリアスが、そんなことをしても無益だといって止めさせようとしても、聽かうとはしなかった。

電光は更に彼等に坑の光景を見せた。おゝ、何といふ壯觀！　そして恐怖すべき光景であらう。双金を引き伸したやうに、一條の流れはきら〳〵と光って、深谷のどん底に横って居、暗い懸崖はかすかにそれと分る位にまで深く〳〵落ちこんでゐる。

恐れに眼眩んでゐたジュリアスは、やがてすっかり改った。然し驚異の叫びを上げた。

「あれは何だらう？」

さう云って電光に照らし出された一つの廢塔を指さした。

「なに、塔が？」

「さうだ。確かに塔だ。早く行って見よう。あそこへ行けばきっと雨をよける位の場所はあるに定ってゐる。嵐の止むまで、あそこで休んで待ってゐようぢやないか。」

「さうだな。君の着物も僕のも勿論、すっかり濡れちやつたし……まあ、とにかく行って見ようか。」

すぐに廢墟の下へ着くことが出來たが、さう容易く內部へ入ることは出來さうにも見えない。永年の間、人に住み棄てられた崩れ落ちた建物は、蔓草にからみつかれて、窓と云はず戸口と云はず、茨や蔦で蔽はれてゐるのであった。

サミエルは馬をすゝめて、更に他の側に廻って行った。ジュリアスがそれにつゞいた。と、何時の間にかどこからともなく二人は、壞れた建物の中に自分達が入ってゐることを見出して驚いた。

「おや〳〵。」とサミエルはあたりを見廻しながら云った。「いつのまにかこんなところへ來てしまってやがる。何んのこった。屋根も部屋も廊下も、何が何だか分りやしない。これでも昔は家だったのかな。」

昔は家だったに相違ない。壁も、床も、部屋の形狀を偲ばせるには充分であった。だが三百年も、そ

れ以上も過つたかと思はれるこの建物の床は、馬の蹄で穴があき、蔓草の根で漸く支へられてゐるやうな壁は、觸りでもすれば、一とたまりもなく崩れてしまひさうであつた。

比較的丈夫さうな壁は、突き當つて來る烈風を受けて唸り、壁際に避難しようとするらしい怪しい鳥の群は、異様な叫びを上げて、そこらを飛び廻つてゐる。その叫びは嵐の轟きの中に、斷末魔の苦しみを唸つてゐるかのやうに聞かれた。

サミエルは馬上から好奇心に驅られてあたりをと見かう見して、何をか考へてゐる風だつたが、

「では、君は。」とジュリアスの方へ振向いて云ひ出した。「君は、では明日の朝までこの壁の後方でゞも休んでゐるかね。君がさうしようと思ふなら、それもよからう。敢て反對はしないよ。……何といふ猛烈な風だ。まるで大砲の筒先きにゐるやうなものだね。この哮聲——どうだ。僕はこんなところが大好きなんだ。どれ、では君はこゝにゐたまへ。僕はその邊を一と廻り駈けめぐつて來るから……。」

さう云ひながら、サミエルは拍車をあてゝ馬を進めた。

だが十歩とは進み得なかつた。用心深く煉瓦の碎片や蔓草などを踏んで行つた彼の馬は、急に立ち止つて、鼻を吹き鳴らし出した。と、殆んどそれと同時に、

「お止りなさい!!」

何者とも分らない聲に、サミエルはあたりを見廻した。

彼は絶壁の突端に、一歩踏みはづしたが最後、何千仞の谷底に眞倒さまに轉落しなければならないかも知れない崩れかゝつた壁の上に立つてゐたのだ。馬は前肢を危くその深淵に踏み込まうとして、力一ぱい後肢で全身を支へてゐるのであつた。

住み棄てられたこの城塞は、僅かに懸崖の傾斜面に、人工的に花崗石を積み上げて、その上に築かれたものであつたのだ。深淵に臨んで危く脚を張つた石崖は、そのまゝ殘つて蔓草に蔽はれてゐたのだ。

嵐の一吹きは、馬諸共サミエルを谷底に吹きころがしてしまふかと怪しまれた。

馬は泡沫(あわ)を食み出しながら、恐怖の鼻息荒く、全力をこめて後に下がらうとあせつてゐた。サミエルは然し落ち付いてゐた。恰も自分が今、どんな危地にゐるのかといふことも辨別してゐないかのやうに……危險といふものが、それ自身で、彼の前から姿を隱くし、消え去つて行くのを信じ、見守つてゞもゐるかのやうに……。

「危いわ。」

と先きと同じ聲が再び聞こえて來た。

サミエルはその聲が、「地獄谷」と云つた、彼の娘の聲であることを知つた。

「おゝ、今度こそ。」彼は叫んだ。「此度こそ妖怪の正體を突きとめてやるぞ!!」

彼は馬を返して、聲のした方へ行つて見た。然し矢張り無益であつた。彼は何物をも探し當てることが出來ず、誰の姿を見とめることも出來なかつた。閃く電光は物凄い谷と廢墟とを照らし出してはまた暗黑の中に葬り去つた。

「おい、君、サミエル。」とその時、ジュリアスが呼んだ。「こんなところ早く出ようよ。駄目だ。雨や風を除ける場所なんて藥にしたくもありやしないよ。飛んだところへ迷ひ込んだものだ。早く出て道を見付けなきや、こんなところでどうにもならないよ。君。」

サミエルは尙ほ何等かの期待を持つて、廢墟を乘り歩いてゐたが、やがてジュリアスの言に從つて友と一しよに道を探した。

道はあつた。ぽツとしてジュリアスは返つて馬に跨つた。二人は歩き出した。サミエルは快活さうに叫んだり歌つたりしながら先に立つた。

ジュリアスは急に元氣を回復して來た。それはこの道を行けば、いつか山を下ることが出來、そし

て村か宿屋かゞあるであらうといふ希望を懷き出したからであつた。宿屋の灯の瞬きや、村のこんもりとしたなつかしい木立が、今にも、思ひかけず、自分達の前に展けてくるであらう。溫い暖爐、樂々と腰を下ろすことの出來る長椅子、そんなものを彼はどんなに思い描いたであらう。

だが、いくら歩いても歩いても、彼の待ち望んでゐるやうなものは見えて來なかつた。三十分、一時間——依然として道は險しく、空は暗く、嵐は狂めいてゐた。

雨は更にはげしく降りそゝいで來た。二人は全身濡れ鼠となり、馬は飢のために喘いでゐた。ジュリアスは、ともすれば昏倒しさうになつた。サミエルさへ、いつの間にか元氣を失ひかけて來た。

「畜生!!」と彼は叫んだ。「こりやいかんぞ。かうなつちや實際かなはん。雷鳴も電光も何處へか行つてしまつて、雨ばかり厭に降りやがるぢやないか。天、我等に幸せず哉。」

ジュリアスは物を云ふ元氣もなく、默つて馬の背にかぢりついてゐた。

「ほんとに、祈らなけりや居られんといふのはこんな時の氣持を云ふのかな。」

彼は振り絞るやうな聲を一層高く張り上げて云ひ出した。

「地獄谷を出現せる妖女よ。吾等が親しき友よ。山羊よ。どうかもう一度現れてくれ。そして道を敎へてくれ。こゝをどう行つたなら人間の住家に着くことが出來るのか。幻影の少女よ。その手に携へ

し山羊の精よ。妖女よ。」
「道にお迷ひなすつたの、あなた方。」と、その時、眞暗闇の、どことも知れないところから、爽やかな鈴を振るやうな聲がした。
「そんなら、わたしが教へて上げませう。あなた方はこの道で間違つては居ないのよ。これでいゝのよ。この道をものゝ十分間とも歩かないうちに菩提樹の蔭にあなた方は一軒の家を見付けることが出來るでせう。わたし其所であなた方をお待ちしてますわ。」
サミエルは聲がしたと覺しい暗黑の中に眼を放つた。と、影のやうなものが、する〳〵と動いて、彼の十歩位先きを去るやうに横切つて失くなるのを認めた。
「お待ち下さい。お待ち下さい。」
とサミエルは追ひかけるやうに叫んだ。
「お待ち下さい。もう少しお尋ねしたいことがあるのですから……」
「何ですの——」と影は再び現れて答へた。見ると先程「地獄谷」で見たと寸分違はない妖女が、岩角の上に立つてこちらを見つめてゐるのであつた。
サミエルはそれを認めるや否や、閃くやうに一つの想が起つて來て、輝く眼を据ゑ、聲を振り立て

た。
彼は友の方へ振返つて云つた。
「ねえ、君、ジュリアス、親愛なるジュリアス、僕は先程、吾々若き人々に無くてはならないものとして、嵐、急流、雷鳴、電光などを算へ立てた。ところがもう一つあることを僕は忘れてゐたんだ。いゝかね、もう一つだ。それは愛といふことだ。愛だ。愛なくして何の青春ぞやだ。愛こそ吾々の青春を飾る花冠なんだ。本當の嵐なんだ。」
云つたかと思ふと、サミエルは拍車をあてゝ、一跳びに岩角に立つてゐる妖女の方へ近づいて行つた。
「僕はあなたを愛します。」と彼は叫んで妖女に近寄つた。「可愛い魔女さん。僕があなたを愛してゐるやうに、あなたも僕を愛すると云つて下さい。そして僕達は結婚しませう。ねえ、すぐに式をあげませう。可愛い魔女さん。僕達の結婚式には雨と雷鳴と電光と嵐がお祝ひの樂を奏してくれますよ。雷はごろ〳〵、雨はぢやぶ〳〵、稻妻はぴか〳〵、嵐はごう〳〵、おゝ、何といふ結構な祝辭で、そして僕達は何といふ似合の夫婦でせう。——僕は僕の眞心を捧げます。あなたは僕にその妖艶な美のすべてを捧げて下さい。」

「あなたは不信神者で、そしてわたしに對しては忘恩者ですわ。」
美しい少女はさう云つたと思ふと、姿を消してしまつた。
サミエルは尙もそのあとを追はうとして馬をすゝめた。けれども彼女の立つてゐた岩角を境として底知れぬ谷が口をあいてゐるので、それ以上如何することも出來なかつた。
「行かうぢやないか、君。」
とジュリアスが呼んだ。
「何故――？」とサミエルは不機嫌さうに云つて歩かうともしなかつた。
「何故つて――宿屋があるからつて彼女が教へてくれたぢやないか。」
「莫迦!!　君はあれを本當にするのかい。」とサミエルは云ひ返した。「たとへばだね、もし君の云ふやうに、いや彼女の云ふやうに、そんなところがあつたにしろ、それは碌なところぢや無いよ。先きの廢墟のやうなものか、それとも道に迷つた旅人を締め殺して持物をふんだくるところか、何れそんなことにきまつてゐるよ。」
「君は彼女が何と君に云つたのか知つちやゐないんだ。」
「知つてゐようとゐまいと、そんなことはどうでもいゝぢやないか。ぢやまあ、君がさう云ふんなら、

とにかく行つて見るとしよう。若しものことがあつたつて僕は知らないよ。」
……
「どうだ。この不信神者!!」
まさしく十分の後、ジュリアスはかう叫んで友の肩を叩き、そして先程妖女が教へてくれたと寸分違はない菩提樹の蔭を指差して見せた。――なつかしい灯火が、明るい灯火が、そこにはちら〳〵と輝いて、溫い部屋を持つた人の住居のあることを明示してゐた。
二人は門の前に馬をとめた。
ジュリアスは手を伸してベルの綱を引いた。
「君は化物屋敷のベルを鳴らしたね。」
サミエルは笑ひながら云つた。
ジュリアスは答へなかつた。そして尙も綱を引いた。
「おい、ジュアリス賭をしよう。」とサミエルは友の腕を捉へながら、「あの、山羊を持つてゐた妖女が僕達に戸をあけてくれるか如何か、賭をしよう。」
その時、家の戸のあく音がして、やがて一人の若者が燈火を手にしてこちらへ近づいて來た。

「あいてる部屋はありますまいか。僕達はこの雨の中を山越えして、やう〳〵こゝまでやつて來たものですが。」

ジュリアスは近づいて來る男(と彼は思つた)に向つて說明した。

「お入りなさい。」

親しげな聲がそれに答へて來た。その聲は、まがふ方もない、地獄谷で彼等に答へ、更に先程途中で答へてくれた若い娘の聲に相違なかつた。

「おや。……うむ。」とサミエルは考へるやうな表情をした。

「此の家は何なのですか。」とさすがにジュリアスも躊躇して訊ねて行つた。

「さア、お入り下さいな。」

燈火を持つた娘は、ジュリアスには答へないで、門をあけながら叮嚀に云つた。

「よし、入らう。」とサミエルは友を促して、「地獄へでも天國へでも何處でもかまはないから入つて見よう。この若い美しい少女が這入れといふ以上は……。」

三、五月の朝

次の朝、ジュリアスは眠を覺して、溫い、心持のよい寢床の中にゐる自分を見出すまで、何も分らずに眠つてしまつてゐた。

彼は眼を覺した。窓から射し入る日光は部屋をぱツと明るくし、すべ〳〵した床の上に戲れるやうに這つてゐた。囀る小鳥の聲が、如何にも輝かしい、靜かな五月の朝であることを語つて聞かせてゐた。

彼は寢床から跳ね起きた。手早く着物を纏ひ、スリツパを突かけると、窓際に行つて見た。

窓は美しい庭園を見晴らしてゐた。小鳥が數限りもなく歌つてゐた。いろ〳〵の花が咲き亂れてゐた。庭園の向ふは一條の川の流れを點出した谷峽で、高い低い山々が地平線を劃つてゐるのであつた。

何といふ輝かしい朝であらう。太陽はもう高くなつて春酣な地上を照らしてゐた。あらゆる生命が春の惠みに浴して嬉々として躍つてゐるやうである。

嵐はもう跡方もなく、空は名殘なく晴れ亘つてゐた。

ジュリアスはすが〳〵しい氣分になつて、昨夜の雨に洗ひ出された庭を見、遠くの山々を眺めてゐた。蝶が飛んでゐた。花から花へ。昨夜の嵐に何として生命を保護することが出來たのであらう。庭木の枝といふ枝には、まだ乾き切らない雨滴がきら〳〵と光り、小鳥の羽根にふれてはは〳〵と地

上に落ちるのであつた。

すると、突然、ジュリアスには、小鳥の歌も、山々も、蝶も、何もかも見えなくなつて、たゞやさしい聲のみが彼の耳に聞こえて來た。

見ると忍冬の蔭で——何といふ可憐な光景を彼は見出したことであらう。——十五歳位の少女が五歳か六歳の子供に何か讀むことを切りに敎へてゐるのであつた。

想像することも出來ない位、少女は愛らしく、無邪氣な樣子をしてゐた。眼は悧巧さうに輝き、ふさふさした金髮は肩に垂れかゝり、お伽噺に出て來る小娘そつくりであつた。ジエリアスは何と形容してよいかも分らないやうな美と感激の情に打ちふるへながら見守つてゐた。無邪氣と眞實との光りがその少女の身のまはりから湧き上つて來るかのやうにも思はれた。五日の朝の爽やかな、輝かしい光りが、形狀をなしてその少女に乘り移つてゐるのではあるまいかとさへまで思はれた。

少女は獨逸風の服裝をしてゐた。眞白い上衣、きちんとしたスカート、見るから輕々しい樣子であつた。

捲毛の子供は少女の膝の上に乘つて、餘念もなく本を見つめてゐた。彼はＡＢＣを覺束ない調子で云つてゐた。小さい指で、本に書いてある大きな字を一つ〳〵指差しながら——さうして一つ字を

讀むと、彼は今自分の讀んだのが間違つてゐやしないかと訝るかのやうに少女の顏を見るのであつた。

少女は子供の讀んだのが間違つてゐれば、もう一度叮嚀に敎へてやつた。間違つてゐなければにつこりと微笑んで、次を敎へて行くのであつた。

ジュリアスはこの繪のやうな光景から眼を放すことが出來なかつた。子供の覺束ない聲、少女の爽やかな細い聲、それは小鳥の囀りにも增して彼の心の底まで泌み透らねば止まなかつた。彼は昨夜の恐ろしい光景と、眼前の繪とを比較して、無量の感慨に沈まなくてはゐられなかつた。夢のやうな網が彼の眼の前にも手足にも全身にも張り渡されて行くやうであつた。彼は眠りに誘はれるものゝやうに凝つとして眺めつくしてゐた。

何だか肩のあたりに觸れるものゝあることに氣付いて、ジュリアスは我に返つた。それはサミエルであつた。友達が何をそんなにも深く注意して眺めてゐるのかと、爪先立ちで歩いて來たサミエルであつた。

ジュリアスは身振りで「靜かに」といふ合圖をした。彼は飽くまでもこの光景に醉つてゐたかつたので。

けれどもサミエルは、友の合圖に注意しなかつた。窓側にからんでゐる葡萄蔓に觸れて、俄かに音

を立てゝしまつた。

少女は驚いたやうに顔を上げた。子供も眼を上げてこちらを見た。窓に凭つて見知らぬ二人の青年が自分達のことを見てゐたことを知ると、少女はうら羞恥しさうに眼を伏せてしまつた。本を伏せて彼女を立ち上つた。そして、子供を連れて、二人の青年の挨拶にちよつと答へてから、姿を消してしまつた。

「君が驚かしたりするからよ。」とジュリアスは怒つたやうな、なぢるやうな調子で云ひ出した。「何の必要あつてあんなことをしたんだい。」

「別に何といふことは無いさ。あんなもの如何だつていゝぢやないか。それとも君はあの小娘つちよに氣があつたとでも云ふのかい。はゝゝ。」サミエルは持前の快活な笑聲を出して、「それはさうと昨夜はよく寢首を搔かれずに濟んだといふものだね。こゝは君、どうしたつて化物屋敷としか思はれないよ。でも、今見ると、君の部屋は僕のより一等級上だつたね、うまくやつたといふものだ、まあどうでもいゝことだが……。」

「僕は夢でも見てゐるやうな氣がしてゐて致方ないんだ。」とジュアリスは云ひ出した。「昨夜のことだつてさうぢやないかね。門を開いてくれたのは確かにあの山羊を連れてゐた娘に相違ない。娘は僕達

に廐を教へてくれ、それから二階へ案内してくれた。そこにはお誂へ通りにランプの灯つた二つの部屋が相隣りしてあつた。と、そこまではいゝが、彼女は始終默々としてゐて一言も口をきいてはくれないんだからね。部屋をあけてくれると、そのまゝ何處へか消えて失くなつてしまつたんだからね。君は相變らずの調子で彼女のあとを追つて行つて見ようとしたね。僕が止めなかつたら、それこそ事だつたかも知れなかつたと今でも僕は思つてゐるよ、何しろ僕にはすべてがまだ分らないね。」

「分つたも分らないも無いぢやないか。」とサミエルは答へた。「そんなことは如何でもいゝんだ。寢首を搔かれなかつたゞけが幸ひなんだ。いや〳〵君はこの道をとつたことに反對したが、どうかね、今になつて見ると、反對に君は僕に感謝しなくちやならんよ。こんな天國に連れて來て貰つてゐるんだから、こゝは君、お伽噺にしか無い國なんだよ、雷鳴と電光と嵐と吾々の若さと、それから愛と——ね、そんなものが創り出してくれた天國なんだよ。そしてあの妖女だ。僕は彼女の出現をもう一度願つてゐるのだよ。」

「おい、もうあんな惡魔的行爲は止せよ。云はれたぢやないか、あの……」

サミエルは何か云はうとして、友の言葉の終るのを待つたが、その時、言葉半ばに戸があいて年老つた下婢が入つて來た。下婢は乾かした二人の着物を持ち、お茶と朝飯とを運んで來たのであつた。

ジュリアスはお禮を述べた。そして此處はどんなところで、誰の家であるかを尋ねて見た。と老婢は、此處は牧師シライベル氏の住宅であるといふことを告げた。テーブルの上に朝飯を並べながら彼女は尙も附加へてしやべつた。

牧師の妻といふ人は十五年前に亡くなつた。クリスティヌと名づけられた女の兒を産むと同時にこの世を去つてしまつた。そればかりでなく、牧師は妻を失ふ三年前に、既に長女のマルグリットを失つてゐた。そして今は、娘のクリスティヌと、長女の忘れ形見である孫のロザリオと一しよに暮してゐる。

老婢は尙も附加へて、牧師は今村の教會にお勤のために行つてゐるが、正午にはご飯に歸つて來られる筈になつてゐる。そしてあなた方にもお目にかゝるためにと云つた。

「だが――」とサミエルは口を挾んで尋ねた。

「昨夜僕達をこゝへ連れて來てくれた方は何誰なんですか。」

「あゝ。」と老婢は答へた。「あれですか。あれはグレッチヘンでございます。」

「グレッチヘンつて？」

「山羊飼ひの娘でございますよ。」

「山羊飼ひの娘さん。――そして今こゝに居るのかね。」

「あれは山へ歸つて行きましたよ。冬中と、それから夏場になつてよく荒れのある時分には、こゝに寢泊りしてゐるのでございますが、現に私の隣りに寢床もありますよ。でない限りは何時も山の小舍にゐるのでございますよ。奇妙な子でしてね。こんな部屋に休んでゐるのは息苦しいと云ふのでございますよ。獸物見たいに野山がいゝと申します。」

「ぢや、どうして僕達をこゝへ案内してくれたのでせう。」

ジュリアスは尙も訊ねた。

「そりや、何んですよ、別のことでもございますまいが、こゝの牧師さんは常々さう云つてあの娘に云ひ聞かせてゐるのでございますよ。道を間違つた旅のお方や、夜遲くなつた方々には、親切に道をお教へしてやれつて。……そして尙お分りにならないやうだつたら染内してお連れ申して來なければならないつて。この近所には宿屋なんて一軒もございませんし、それに道も隨分險しうございますからね。そして牧師さんは申すのでございますよ。牧師の家は神樣のお家だつて、神樣のお家は取りも直さず萬人のお家だつて……。」

老婢は去つた。

二人の青年は朝飯を了へて、着物を着かへ、そして庭に下り、

「君、そこらを散歩して來ようか。」

とサミエルは友を促し立てた。

「いや。僕は疲れてるよ。」

ジュリアスは云つた。そして彼は忍冬の蔭へ腰を下ろしてしまつた。

「疲れてゐる？」

サミエルは笑顔で、皮肉さうに友を見て、「疲れてるもないもんだ。今の今、ベッドから這ひ出して來たばかりぢやないか。」

さう云つて彼はから〳〵と笑つた。

「あゝ、さうか〳〵、分つた。分つた。」と彼は笑ひながら附加へた。「そのベンチはクリステイヌの坐つてゐたところなんだね、奴さん、もう參つちまつてやがる。」

ジュリアスは赤くなつて起ち上つた。そしてどぎまぎしながら、

「馬鹿なことを云へ。そんなことを云ふんなら散歩でも何でもしよう。たゞ、こゝは、ちよつと坐り工合がよささうだから坐つて見たゞけなんだ。ぢやあ歩かう。庭でも見よう。」

彼は咲き亂れてゐる花について語りはじめた。サミエルによつて引き出された會話の方へ返ることを恐れるやうに、ベンチのことや、クリステイヌのことに觸れるのを恐れるかのやうに、彼は自分でも分らない感情のために混亂してゐた。クリステイヌの名を、サミエルの遠慮のない露き出しの表現で話されるのが辛らかつた。

庭園の端れは果樹園になつてゐた。だが、今の時候では、果樹園も庭園も變りはなかつた。林檎や桃の花は今が滿開であつた。

「おい、何を考へてゐるのだ。」とサミエルは暫らく歩いてゐた後、ジュリアスがいつか默りこんでしまつて、夢でも見てゐるような眼付をしてゐるのを發見すると、突然に訊ねた。

だがジュリアスはサミエルの豫期に反してかう答へた。

「僕、お父さんのことを……明日は息子を失ふかも知れない父親のことを……」

それはしんみりとした返答であつた。

「どうしてそんなことを考へ出したんだ。」

「どうしてつて？　だつて明日の今頃ぢやないか……例の決鬪は？」

「うむ、勿論。然しそんなこと、今から考へてゐたつて始らんことだ。」サミエルは然し眞面目に返つ

て云つた。「明日!! そりや僕達のためには多くの危險が待ち設けてゐるには違ひない。然しまだ時は十分ある。今から考へて默りこんでゐる必要はありやしない。」

「おい、おい。」とサミエルは調子を改めて、「來たぜ、歸つて來たぜ、僕の眼にして誤りなくんば、あれは確かに牧師先生とその娘さんだ。明日なんか考へるのは止せよ。おい、君!」

「うるさい人だね、君は、實に。」

とジュリアスは眉をひそめた。

サミエルの眼は誤らなかつた。牧師と、クリステイヌとはこちらへやつて來た。然し途中で、クリステイヌは家の方へ曲つてしまつた。牧師だけが近づいて來た。

四、惜しき時

シライベル牧師は世馴れた、眞正直さうな外見を持つてゐた。四十五歳にしてはそれとは見えない位若々しいところを持つてゐた。終始にこ〳〵してゐるやうに見える顏は、やさしさうでどこか悲しみの調子を帶びてゐた。それもその筈、長女を失ひ、妻を失つた無常の世の思ひは、彼を傷けないわけには行かなかつた。けれども彼は、クリストに、神に献げた身であることの故を以つて、元の快活

な樂天的思想を失はないのであつた。

牧師は近づいて、青年達の手を握り、慇懃に自分の家を頼つて來てくれたことに對してお禮を云つた。

その時、食事を知らせる鐘が鳴つた。

「さあ、あちらへ行きませう、あなた方。」

と牧師は云つた。そして附加へて、

「娘もあちらですから。」

彼等は打ちつれて食堂に入つて行つた。そこにはもうクリステイヌとロザリオが見えてゐた。

牧師を間にしてジュリアスとサミエルとはテーブルについた。クリステイヌは反對側にロザリオと坐つた。

食事は沈默のうちに始つた。ジュリアスはクリステイヌと殆んど向ひ合せの位置にあるので、どぎまぎして落付がなかつた。クリステイヌは、子供の外、何物にも氣を取られないかのやうに見えた。母のやうに、彼女を「姉さん」と呼ぶところの子供に向つて、何やかやと面倒を見てやるのであつた。

會話は大方、牧師とサミエルとの間にばかり取り交されてゐた。牧師はかうして若い學生達をテー

ブルに坐らせ、話を交すことをその上もなく喜んでゐるやうに見えた。
「俺もこれ、もとは所謂書生さんでしたが、いや、實際書生時代といふものは樂しいものですね。」
と彼は云つた。
「いや、僕なんか一向駄目な方ですが、でもこの數日間は、ちとドラマチツクでしたよ。」
サミエルはジユリアスを顧みながら笑つて答へた。
「今から思ひ返しますと、何んですな、やはりあの時代、あなた方の時代が一生涯一番樂しく愉快でしたな。それからずつと此方、そりやいろんなことにも出遇しましたが、心からかう樂しく、何んにも屈托なしに振舞へたあの時代に比較すると、どうもかういけないところがありましてな。もうこの年になりましては何ですよ、もう二度とあの時代も來るわけはないし、まあ、せめてクリステイヌの幸先を見屆けるまで……」
クリステイヌは自分のことについて何を云はれるかと不安な眼付をしながら、
「お父さま、お父さま……」と父の言葉を遮つた。
「うむ、分つたよ、いゝよ。」と牧師は娘の心を讀んで、「何に別のことをお話しするからいゝよ。——えゝと、昨夜の嵐は酷うございましたな。お蔭さまで俺の草木類はめつちや〳〵の有樣ですよ。」

牧師は頭を撫でた。
「では、あなたは植物學者——いや、植物の方もおやりになつてらつしやるのですか。」
サミエルは尋ねた。
「何アにあなた、ほんの道樂さ。」と牧師は、でも誇らしげに、「あなた方もひどい目にお遇ひなすつたでせうな。」
「お暇の時には……いゝですね。」とサミエルは一人で何か考へてゐたが、さう答へて、何を自分が云つたのかといふやうに顏を上げた。
その間にジユリアズとクリステイヌとは、默つて二人の話をきいてゐた。話をきいてゐたといふよりは、何か別のことを考へてゐたのかも知れなかつた。最初あつた、どこかこそばゆいやうなものが何時の間にかなくなつて、二人の間が少しづゝ近づき溶けて行くかのやうに思はれるのであつた。
子供はこんな時調法なものである。子供に話しかけるか、何かしてやるかのやうな風をしながら、二人の男女は、何かを話し會ふことが出來る。いや、無音のうちに眼や身振から了解し會ふ何物かを持つことが出來る。そればかりでなく、ロザリオは、とう〳〵彼等の間にあるつながりを作つてくれた。子供はクリステイヌに問ひを發し、ジユリアスにも問ひを發して來た。クリステイヌも答へた。

ジュリアスも答へた。その答は期せずして二人の心を結合する力となつた。

食事が終りて近づいた時は、もう彼等三人はいゝお友達になつてゐた。

かくてテーブルから立ち上ると、彼等一同はコーヒーを飲みに庭へ出た。牧師はわざ〳〵行つて秘藏のブランデーをさへ持つて來るといふ歡待振りであつた。

ジュリアスはとう〳〵クリステイヌに對してかう話しかけた。

「今朝ほどは失禮しましたね、お許し下さい。あなたの課業をお妨げしましてすみませんでした。」

「いゝえ。」とクリステイヌは答へた。「もうお仕舞ひのところでしたの。」

「僕は何んだか不思議な、それこそ夢の國へでも來たやうな氣持でゐたんです。昨夜はあんな嵐に遇つて、あんな恐ろしい谷峽で山羊を連れた若い娘さんに案内されて、こんな思ひもかけない、あなたのお宅へ泊るやうなことになつた矢先でせう。一晩中不思議な思ひをしながら過ごして、朝になつてふと窓をあけると如何でせう。山羊は小さい子供さんに變り、娘さんはあなたに若返つてゐるんでせう、てつきりこりや魔女さんだと思ひましたよ。」

「まあ、魔女ですつて？」

クリステイヌは快活に笑つて答へた。そしてジュリアスの方へ眼を上げて、

「そしてあなたは、あの、現在もまだ私を魔女だとお思ひになつてらして？」

「え。」とジュリアスは眞面目で答へた。

「現在もさう思つてますよ、だつて、あなたのお美しいことはとてもこの世のものと判斷することは出來ませんもの……」

クリステイヌは、ジュリアスの言葉に對して意味ありげに笑つたサミエルの聲を耳にすると、自分も笑つたが、ほどなく間の悪い混亂に陷つてしまつた。

ジュリアスもどぎまぎして、サミエルの方をちらと見たが、

「ロザリオちやん、どうです、僕と一しよに大學校へ行きませうか。」

と云つて心をまぎらさうとした。

「大學校？　大學校つて何？　姉さん。」

子供は訊ねてクリステイヌを見た。

「そりや、何だよ、つまり、どんなむづかしいことでも何んでもお前に教へてくれる學校だよ。」

牧師はにこ〳〵しながら口を出した。

子供はそれをきくとジュリアスの方へ振向いて答へた。

「そんなら僕、そんなところへ行かないや。姉さんは大學校だもの、姉さんは僕に何んでも教へてくれるんだもの、フランス語でも、イタリー語でも、お習字でも、讀み方でも……」

「さうだとも、そんなとこへ行く必要は無いやね坊ちやん。叔父さん達だけ行つて、そしてまた來るよ、ね。」

「なア、ジュリアス。」と云つて、サミエルは子供に答へてから友を見た。

「何んですか、あなた方は今日お出發になるんですかい。」

牧師はサミエルの眼を讀み知ると、遮るものゝやうに云つて青年達を見た。

「せめて夕食でも上つてからにしてくれないと……」彼は附け加へて云つた。

「有り難うございますけれど。」とサミエルは答へた。「どうしても晩方までにはハイデルベルヒに着かなくてはならん用事があるものですから……。」

「まあどんな御用事が有りなさるのか分りませんが、何んですよ、ハイデルベルヒまではこゝから、此のランデツクからは八哩しかごわせんですよ。四時にお出發なされば充分です。えゝ、それで大丈夫夕方には着けますよ。」

「さあ、四時――とゝ だが、ジュリアス、どうかね、矢張りお暇した方がよかないかね。」

「まあ、さうなの……」と云つて、クリステイヌは、サミエルの言葉にうなづきさうにしてゐるジュリアスの顔に、空色の鄙かしいすゞしい眼を向けて囁くやうに云ふのであつた。

ジュリアスは如何していゝのか途方にくれてしまつた。が決心したやうに、

「それもさうだが、然し御主人の御好意を無にするのも何んですから、……では、かうしようぢやないか、きつちり四時になつたらお暇すると……」

サミエルはジュリアスとクリステイヌの顔を等分に見て微笑んだ。

「ぢや、君のいゝやうにすることにしよう。」

「ぢや、それでは四時きつちりとして。」と牧師は滿足さうに、「では一つ。順序を作りませうかな。えと――三時までかゝつて、俺の蒐集物を御覽に入れる。それから昨夜あなた方がお困りなすつたあの山道まで登つて行つてランデツクの風景を御覽に入れる。いや〳〵風景はともかく、あそこにはあなた方がてつきり妖女だと思ひなすつた娘がゐますから――面白い、無邪氣な娘ですよ。」

「そりや素敵々々!!」とサミエルは叫び出した。「もう一度、妖女の姿を見ることが出來るとは思ひもかけませんでした。では早速その御蒐集なすつたものから拜見にかゝりませう。」

彼はもう立ち上つた。

牧師の顏には誇らはしげな表情が浮んで來た。彼はサミエルを連れて永年の研究から得た智識と、書籍によつて得た理論とをつき交ぜた說明を加へながら、標本室の方へと歩いて行つた。

ジュリアスとクリステイヌと子供とは、自然的に庭園に殘されることゝなつた。ジュリアスは最初はまだおづ〳〵と話した。けれども子供によつて柔げられ、機會を作られる二人の仲は、だん〳〵と接近しないではゐなかつた。

話題に乏しかつた。でも、沈默してゐる時でも、心は決して沈默してゐなかつた。ジュリアスは、クリステイヌの無邪氣さ、淸淨さに得も云はれず醉つてしまつてゐた。

三時がいつ打つたのか分らなかつた。牧師とサミエルとが、話しながらこちらへ來るのを見て、始めて彼等はもういつの間にか二人切りの一時間が過ぎたことを知つた。一時間！　然しそれは一分間位にしか思はれなかつた。

五、幻影の正體

人々は山の方へ連れ立つて出かけた。

ジュリアスはクリステイヌと並んで、尙も話しながら行けることゝ期待して心に喜びを禁じ得なかつた。

が、クリステイヌはさうはしなかつた。父の腕をとつて、彼女は、何をか論じつゝあるサミエルと父を間にして並んだ。ジュリアスは彼等の背後から、ロザリオを相手に隨つて行かねばならなかつた。彼はだし抜かれたやうな、つまらなさうな顏付をした。

道は森に添つて登つてゐた。午後の暖かい光線の中に樹木の蔭は濃く道に落ち、小鳥は鳴き疲れて枝に休んでゐるのも見られた。

子供も何時か、ちよこ〳〵と走つて行つて「姉さん」の腕にすがつてしまつたので、ジュリアスは〳〵悲觀しないわけには行かなかつた。

「ロザリオちやん。」と彼は呼びためして見た。「これを御覽なさい。これを——。」

ジュリアスは振向く子供に灌木にとまつてゐる蜻蛉を指差して見せた。

ロザリオは喜びの叫びを上げた。そして立ち上つてぢつと止まつてゐる赤い蜻蛉を驚ろかさないように身をすくめて眺めはじめた。

「姉ちやん。」と子供は呼んだ。「お出でよ、早く。」

クリステイヌは返事をしなかつた。聞こえないのか、聞こえてもわざと返事をしなかつたの

子供はそつと身を退くと、一と跳びにクリステイヌに飛び着いて行つて、着物の袖をつかみ、そして自分から先立つて、美しい蜻蛉を見せるために道端まで引張つて來た。

蜻蛉は逃げた。

「何も居やしないぢやないの？」とクリステイヌは云つて、不平さうにあたりを見廻した。

ロザリオもきよとんとして蜻蛉の逃げた行衛を探してゐた。

ジュリアスは然しお蔭で二言三言クリステイヌと話し會ふことが出來た。

「ご免なさいね。」と彼女は云つた。それは、ジュリアスが如何に自分と二人切りで、父やサミエルにおくれて道を歩みながら話したいと願つてゐるかを知つてゐるにも拘らず、さう出來ない今の場合を辯解するものゝやうであつた。

「だつてお父さんや、あの、あなたのお友達の方に何とか思はれますわ、ですから……また今度お一人でいらして下さいね、さうしたら父とロザリオと一しよに、こゝからずつと歩いて、地獄谷やエベルバツク城の廢墟も見物いたしませうね、そりや壯大な景色ですわ、あなたは夜しか、然も月もない暗黑の中でしか御覽にならなかつたから、今度は晝間どこからどこまでも見物いたしませうよ。」と。

……

牧師の召使の一人が、二人の青年の馬を持つて來て待つてゐる筈の十字路のところまで來た。馬はまだ來てゐなかつた。

「もう少し徒歩らうぢやどわせんか。」と牧師はあちらこちらを見廻して居たが云ひ出した。そして

「追つけグレツチヘンもその邊にゐるでせうから。」と附加へて歩き出した。

山腹にある岩間に建てられたグレツチヘンの小舍が見え出したのは、それから少し行つてからであつた。娘をめぐつて十數匹の山羊が群れてゐるのも見えた。

人々が近づくに從つて山羊の群は驚き恐れたのか、隱れようとしたり、逃げようとしたりするやうな樣子を見せた。グレツチヘンはそれを制しながら、まるで友達にでも話すやうに、山羊の群に話してゐた。

晝間見る彼女は、夜見たそれよりも、もつと〳〵美しく不可思議であつた。彼女の黑い瞳には蔭のやうなものが取り卷いてゐた。髮の毛は黑々として名も分らない野性の草花がつげられてあつた。ジプシイの娘のやうな全體の樣子が、見る人に奇異の感を與へずには措かなかつた。

牧師とクリステイヌとが近づいて行つても、彼女は其の誰であるかを見分け得ないものゝやうに見えた。

「これ、これ。」と牧師は云つた。「如何かしたのか、グレッチヘン。何時も俺が來ると挨拶に駈け下りて來るくせに、今日は如何かしてゐるね。このお客様方は、昨夜お前が道案内して連れて來て下すつた方々だよ。」

彼女は草の上に坐つたまゝ、起たうともしなかつた。そして傍の方を向きながら、

「何でもいゝわ、今日は駄目——みんな明日のこと、明日のこと——」と悲しげな聲で云つた。

サミエルは凝つと山羊飼娘を見つめはじめた。

「僕達が來ちやいけなかつたのですか。」

と彼は口を切つた。

「そりやあなた方のご勝手ですわ。」

彼女は答へた。

「ですが——」と暫らくしてから、此度は彼女はクリステイヌの方へ向いて、「ですがいけなくないこともないわ。」

「何故ですか。」

とサミエルは持ち前の無遠慮な調子で訊ねて行つた。

「クローヴアが凋んでるわ。」

何のことか分らなかつた。サミエルは、でもかうひとり呑み込みに、牧師に向つて云つた。

「あゝこの人も植物の方をお學びになつてゐるのですか。」

「え、いや、この娘は植物によつて現在や未來が占へると信じてゐるのですよ。」

「全くですわ。」とグレッチヘンは云つた。「草や樹木は人間のやうに害心といふものを持ちませんわ。自然のまゝに育ち、凋んで、そして自然の語ることをそのまゝに語つて聞かせますわ。わたしはいつも草や樹木と一しよに活きてゐますの。ですから草や樹木はその秘密を私に話してきかせてくれますの……」

彼女は何か天啓でも感じたかのやうに、更に聲高く、自分自身に向つて語るものゝやうに附け加へた。

「私は私を保護して下さるお方に、何といふ不運を持ち來してしまつたでせう、牧師は私のお母さまをお救ひ下さいました。お母さんは幼い私を背中におんぶして、どこを的ともなく國々をさ迷ひ歩いてゐたのでございました。夫もなく、お金も持たず、神様を信仰もせず——牧師は私達をお救ひ下されて、そして私達を教へ導いて下さいました。お母さんはお蔭さまでクリスト信者としてあの世の人と

なることが出來ました。おゝ、お母さま。天に在しますお母様。お許し下さいませ。私は御恩のあるお方の家に不運を案内して來てしまひましたのです。お許し下さい。私は私の遇つたお方達がどんなお方達かも知らなかつたのですもの……クローヴアは凋みました。嵐です。嵐があの方達をこちらへ寄來し、あの方達は嵐を持つてこちらへやつて來ましたのです。」

「哀れなグレツチヘン。」と牧師は云つた。

「お前は氣でも違つたのではないか。今まではこんな風では無かつたが……」

「僕達のこと——いや、何かあなたや僕達に關係したことを云つてるのでせうか。」

とジュリアスは不安げにクリスティヌに向つて云つた。

「いゝえ。ですけれども、何となく氣になることを云ひますわね。」とクリスティヌは顔を曇らせながら答へた。

サミエルは默つて、山羊飼娘を嘆賞するものゝやうに見つめてゐた。

蹄の音が近づいて來た。人々は一齊に顔を上げた。青年達の乘馬が召使に曳いて來られたのだ。

六、『左　様　な　ら』

暇を告げねばならない時が來た。「左様なら」を交換しなければならない時が來てしまつてゐた。

牧師は繰り返し〳〵名殘り惜しげに、再び訪ねて來てくれと、悃願するやうに云つてゐた。

「日曜にはお休みですわね。」とクリスティヌも云つた。そして次の日曜には是非ともいらして下さいと眼と物云はせながら。

二人の青年は馬に跨つた。

クリスティヌは微笑みながらジュリアスに手を差出して、

「きつとよ、ね、日曜には。」

「え、え、きつと——」とジュリアスは赤くなりながら答へてゐた。

それを見て、サミエルは頬笑んだ。そして何氣ない風を裝ひながら、

「ある不幸が僕達に落つこちて來ない限りは。」

とさも皮肉さうに云ふ。

低くて殆んど聞きとれない位であつたが、クリスティヌはこれを聞き遁しはしなかつた。

「何ですの、まあ、日曜までに——たつた中三日間しかないのに、どんなことがございますの！」

彼女は驚きの顏色で訊ね返した。

「どんなこともありませんよ。」
とジュリアスは、躊躇しながら、何と答へてよいのか迷つた結局にさう答へて、隠くすやうに微笑んだ。
「でもあなたが、さうお聞きになつて何かしら不安にお思ひになるならば、どうか神様にお祈り下さい。僕達の明日の安全をね——あなたは僕の天使ですもの、僕の救助をお祈り下さい。」
「明日？　救助を？」
とクリスティヌは尚も驚いて、
「お父さま、お聞きなすつて？　只今このお方のおつしやつたことを——」
「俺はいつもお客様達の安泰を祈つてゐる習慣ではないか。」
と牧師は答へた。
「御安心下さい、クリスティヌ。」とジュリアスはその時云つた。「もう、何もかも大丈夫!!」
「おい、ジュリアス、愚圖々々してると遅くなるよ。」とサミエルが促した。「人間といふものは常に死を眼の前に置いて行動せなけりや何も出來んものです。どんなことがあつたつて、死の覺悟さへあれば恐るゝに足りませんよ。」

「死ですつて、覺悟ですつて？」
とクリスティヌの聲はふるへて來た。
「ジュリアス、わたし、あなたのために祈りますわ、どんなことがおありなさるのか知れませんが、あなたが本當に死に面してらつしやるものと心に思つて、私あなたのためにお祈りしますわ。」
「ぢや、左様なら。」とサミエルはもう待ち切れなくなつて云つた。
「左様なら、をぢちやん。」とロザリオは之れに答へて高く叫んだ。
「では、このお花ををぢちやんにお上げなさいな。」とクリスティヌは、その時、心を取り直して朋に云つた。そして野生の薔薇の一枝を子供の手に渡した。
「僕にや屆かないや。」
とロザリオは、クリスティヌを顧みた。
クリスティヌは朋を抱き上げた。そしてジュリアスの馬の近くに歩みよると、ジュリアスはその花を手に受けた。
「有りがたう。では左様なら。」
と彼は深い感動の聲で云つた。

二人の青年は最後に、もう一度左様ならを叫んで、牧師親子の傍を離れた。拍車をあてると、馬は駈け出した。

四五町も駈けたと思ふ頃、ジュリアスは振り返つた。そしてクリステイヌが、尙も左様ならの手眞似をしてゐるのに答へ返して、友のあとを追つた。

二人は無言のまゝ馬を驅つた。

道は山裾の森に添うてゐた。一方には小川が流れ、草花が咲き亂れ、既に西に傾いて黄金色の光りに變らうとしてゐる太陽はあか〳〵とあたりに照つてゐた。

「何といふいゝ景色だらう。」

サミエルは沈默を破つた。

彼等は馬を小川のほとりに止めて、草の上に腰を下ろし、ビールを拔いて暫らく休息した。

かくて再び馬を驅つて、ハイデルベルヒに着いたのは、漸く日が沈んだ頃であつた。

七、ハイデルベルヒの古城趾

舊友の二三に迎へられ、料亭の一室に煙草の煙りの渦卷きや、酒盃の觸れて鳴る騷々しい響きを聞

きながら、時を過ごしたサミエルとジュリアスとは、やがて立ち上つてそこを出た。

眞夜中であつた。街は寢靜つてゐた。

サミエルは埠頭の方に向つて歩いて行つた。ハイデルベルヒの古城趾に通ずる道を曲つて、やがて彼は小山を登り越し、そして廢趾に足を踏み入れて行つた。

最初の石階を一つ登た時、突如として木蔭から一人の男が現れて、サミエルの前へ立ちはだかつた。

「何處へ行くのか。」

と男は尋ねた。

「頂上へ。」

と云つてサミエルは、定められた合圖に答へてから云つた。

「よし。」

男は云つた。

サミエルは登つて行つた。そして最後の石段をあとにして、城内に來た時、第二の番人が現れた。

「今頃、何をしようとしてこゝへ來たのですか。」番人はたづねた。

「僕は……」と云ひ出したが、サミエルはふとくす〳〵と口の中で笑つた。そして可笑しな身振をしながら、「僕が今頃何をするのか聞きたけりや聞かしてやらう。僕は散歩に來たんだ。」

番人は驚いて立ち上つた。そして何か合圖でもするらしく、持つてゐたステッキで壁をコツ〳〵と打叩いて云つた。

「お歸りなさい。家へ。それとも散歩したけりや散歩してもいゝ所へお廻りなさい。」

サミエルは肩を突き上げた。

「いや、僕は月の光りに照らされてゐるこの廢墟を散歩したいんだ。誰も僕の散歩を妨害することは出來ない筈だ。」

「吾々は命令によつてこの城趾を守つてゐるものだ。十時以後には何誰でも此所へ入ることは出來ないのです。」

「それは俗物（ヒリスタンス）（大學の課程を終まない人々、獨逸學生の常用語）に向つて作られた規定だ。僕は大學生だ。」

さう云つてサミエルは、揚々として番人の傍を通つて入らうとした。

「入るなら入つて御覽なさい。危いですぞ。」

番人はサミエルの腕をとらへて叫んだ。その時、先きの合圖によつて出て來たのか、五六人の人影が近よつて來て木蔭に立つた。

「はゝ、ご免！々々！」とサミエルは笑つて、定められた合言葉を以つて自分の來意を告げた。

番人もそれと知つて、手を解き、擬してゐたもナイフを收めた。

「もう少しでやつつけようと思つたところでしたぜ。」

と彼は云つて深く息を引いた。

「冗談ぢやない。——だが君はなか〳〵嚴しく守備の任に當つてゐるね。」

「如何いたしまして……だが、あなたは時々どうも御戯談なさるからいけませんよ。」

「いや、僕は戯談で出來てゐる男だよ。」

サミエルは言ひ棄てゝ中庭に入つて行つた。月は古城の正面を照らしてゐた。彼は急ぎ足に眞直に崩れ落ちた建物の入口に着いた。

第三の番人が現れて云つた。

「何處へ行くのですか。」

サミエルは定められた合圖で何をか答へた。

「私に隨つて來て下さい。」

サミエルは番人に隨いて、氣味惡く崩れて堆積をなしてゐる石や壁の間を分けて行つた。古への大宮殿の趾——幾多の歷史的事件の起伏した場所、王や王女等の贅澤な生活を葬つてある不思議な古城趾——案内の番人は立ち止つて、半ば壞れてしまつた戸を持ちあげて穴のやうなものを示した。

「お入り下さい。そして誰か來ますからそれまで動かないで待つてゐて下さい。」

サミエルは穴へ降りた。番人は上から蓋をした。眞暗がりになると彼はその穴の一方に、更に一つの坑道が下の方に向つて下りてゐるのを知つた。じつとしてゐると、何かしらもぞ〳〵して自分に觸れるらしいものがある。ぞつとした。が、それはすぐに分つた。

「遲いぢやないか。」

ジユリアスの聲であつた。

「奴等があそこで話し合つてゐる。靜かに——偵察してやらうぢやないか。」

二人は坑道を下りた。と、五六人の黑影が廢墟の凹みに集つて、何をかしきりにひそ〳〵と話し、手眞似をしたり、うなづいたりするのがはつきりと見えた。三人の影は右方に、もう三人の影は左方に、そして中央に一人——彼等は一樣に假面で顏を蔽うてゐるのであつた。

銀色の月の光は、隈なく晴れた空から皎々と降りそゝいで、その七人の黑影の、不可思議な、奇怪な密談を照らしてゐる。

「先づ最初にあの二人を——」と黑影の一つが云つた。たが、誰もそれに對して答へなかつた。けれども、すぐに二人の若い男が、彼等黑影の同類と見える者に連れられて入つて來た。

「サミエルとジユリアスは、大學のこの二人を見知つてゐるか知ら?」

「君の名はオツトー•ドルマーゲン?」

「さうです。」

「そして君はフランツ•リツター?」

「さうです。」

「君達はツーゲンブント(結社の名)に屬してゐるね。」

「さうです。」

「絕對的にその規約に服從してゐるね。」

「してゐます。」

「で、君達はハイデルベルヒ大學のサミエル•ジェルブとジユリアス•フォン•ヘルムリンフイルドを知

つてゐるかね。」

聞いてゐるサミエルとジュリアスとは暗闇の中で顔を見合つた。

「よく知つてゐます。」

二人の學生は答へた。

「で、君達は十分劍道を心得てゐるだらうね、決闘に勝つ位のことは朝飯前の仕事にしてもいゝだらうね。」

「勿論ですとも。」

「よし――ではこゝに僕等の頼みがある。明日君達はサミエル及びジュリアスと決戰するのだ、いゝですか、如何なことがあらうとも彼等に勝たなくてはいけませんぞ!!」

サミエルは聞いて、笑ひながらジュリアスの肩をつゝいた。

「いゝですか、解りましたか。」

と假面が念を押した。

すると二人の學生は何とも答へずに、答へを躊躇してゐるものゝやうに見えた。やがてオットーがかう答へた。

「ですが、サミエルもジュリアスも劍道は達者ですからね。」

「だからこそ君達を見込んで依頼するんぢやないか。」

黑い影が云つた。

二人の學生は何をか耳語き合つて、尙ほ尻込みしてゐるらしかつた。

「いゝか。」と、とう〳〵一つの嚴しげな聲が命令するやうに云つた。「六月一日だ。十日過ぎだ。その時になつて報酬を求めるか、懲罰を望むか、それは君達の勝手に任せる。」

「いや、誓つてやります。」

とフランツが證言した。

「確かと引受けました。」

とオットーも諾した。

「ではよろしい。しつかりやつて呉れ。」

フランツとオットーとは、先きに連れられて來た人に再び連れられてそこを出て行つた。

七人の黑影は默々としてゐた。五分間も過ぎたかと思ふ頃、學生を連れて出た男が歸つて來た。

「城外に連れ出しました。」

彼は報告した。
「では、次の二人を――」
黒影は云つた。
一人の男がサミエルとジユリアスの隠されてゐた穴に近づいた。
「お出でなさい。」
サミエルとジユリアスとは、七人の假面をつけた人々の前へ出て行つた。

八、重大な依頼

フランツとオツトーの兩人に命をふくめたと同じ七人の假面の男が、ジユリアスとサミエルとを取り圍んだ。
「君の名はジユリアス・フオン・ヘルムリンフイルドですか？」
と先と同じやうな調子で一人が訊き出した。
「さうです。」
「君はサミエル・ジェルブ？」

「さうです。」
「君達はツーゲンブント黨ですね。」
「勿論です。」
「君達は今、こゝへ來た二人の學生の名を聞き、顔を見たらうね、そして明日を約したことも知つてゐるだらうね。」
「仰せのとほりです。」
「で、君達も吾々の言ふところに從ふだらうね。」
「從ひます。」
とジユリアスが答へた。
「よし！　で、君、サミエル君、君は返事をしませんね。」
「さう、返事をしません。と云ふのは、僕達は何故決鬪なんかしなければならないのか、あなた方が僕達を戰はせるといふのは何んな目的のもとにされるのか、それが僕には判然としないのです。若きドイツ人は老いたる英國人ではない。何もツーゲンブントは、料理番の喧嘩見たいなことを好んで演じさする機關では無い。」

「その質問は今更、當を得たものとは思はれない。」と假面が答へた。「說明を要せずして分つて居ることだ。兄弟であるべき二人の人間が、吾々を裏切つた。彼等を吾々は除かなければならぬ。吾黨はその名譽ある劍を君達の手に置かうと云ふのだ。」

「彼等を除くのか、吾々を除かうといふのか。」とサミエルは云つた。「どんな證人を持つて、それが吾々でなく、彼等だといふことを證明するのか。」

「君の良心が證人だ。——吾々はかの二人の裏切者を除くのだ。それには君達が尤も適任だといふことは君達自身で知つてゐなけりやならんことではないか。」

「さあ、どうですか。却つて……」

「よく考へて見給へ。もし君達を除かうとするならば、何でかうして決鬪のお膳立を君達をして見物させるものですか。こつそりと彼等に命令を與へて君達を故意にでも侮辱させ、そして暗々裏に事を實行してしまふではないか。それを吾々は、事の十日前に豫め通知した。そして君達に對して公然と先程の光景も見せた。どこに畏があるか。考へて見なくたつて明々白々なことではないか。」

「或はさうかも知れない。然しそれらの理由が萬ほどあつても、何故に彼等二人を除くために僕達を選んだかといふ說明にはならない。」

假面は瞬間躊躇した。そして他の一人に眼くばせした。すると、その眼くばせされた假面はこちらを向いた。

「よく聞き給へ、かうなんだ。」と云つて假面は說明した。

「七ケ月前、ウインナ條約が締結されてフランスはあらゆる點に於て捷利者となつてしまつた。たゞ一つ、吾々のツーゲンブント黨が、ナポレオンの勢力と對抗して獨逸に有してゐる。オーストラリヤ內閣もプロシヤ內閣も、意久地なくも皆勝利者の前に頭を屈してゐる有樣だ。吾黨のみがこの間にあつて嚴として自分を守つて立つてゐる。その爲めには幾多の犧牲も拂つてゐる。フリードリッヒ・スタップスは彼等の劍に仆れて死んだ。吾黨の獨立の祭壇に身を献げた一人だ。彼は死んだけれどもその魂は殘つて吾々を飽くまでも守つてゐる。ナポレオンは今や眼を丸くして吾々を見張りねらつてゐる。隙がありさへすれば突込んで行かうとして待ちかまへてゐる。オットー・ドルマーゲンとフランツ・リッターの二人は何時の間にか彼のために買收されてしまつてゐるのだ。彼等は吾黨の六月一日の大會に何事か爲さうとして種々の劃策をしてゐる。——だが、彼等をこゝで殺してしまふことは吾黨のために取らない。半殺しだ。そして彼等を利用して敵狀を知らねばならない。彼等が床についてゐるうちに吾々の大會は終るだらう。それからがまた吾黨の一つ腕を振はなければならん時期なのだ。

――どうです、合點が行つたかね。彼等を殺しては不利なのだ。傷つけて置くに止めるのだ。」

「然し萬一彼等のために吾輩等が傷けられたらどうするのか。」

サミエルは尙もたづねた。

「いや、そんな心配はない。然し萬一の場合は、決鬪の規約によつて、彼等を數日間禁足する。その中に何かの口實を見けて彼等を拘禁させるやうにする。」

「分りました。――だが、どちらにしても冒險だ。ツーゲンブントに向つても……」とサミエルは默つて答へた。

說明が終ると假面の二三は「早くしろ、最後の確答を――」といふやうな身振をした。一人の假面は改つた調子でサミエルに向つて云ひ出した。

「サミエル・ジェルブ。吾々は得心のゆくように說明した。君は分つたと云つた。で、最後の確答を促す。君はエースか？　ノーか？　君に與へられた役割を受けるか受けないか？」

「勿論、拒絕するとは云はない。」サミエルは答へた。「だが、僕には矢張り、依然として何故に僕達が選み出されてこの任にあたらされるのか分らない。ツーゲンブントの命令とあらば、一言もない。けれども何かしらそこにありさうな疑惑を解くことはどうしても出來ない。僕達はまだ經驗もない者

だ。それに大學でも下級生だ。それにあなた方命令者の顏も見知らない。さうした僕等に、如何してこんな任務を托されるのか、僕には何の疑ひも持たずに首肯することは出來ない。それだけのことをあなた方のお耳に入れて置けばそれで僕はいゝ。明日のことは引受けませう。」

七人の假面は云ひ終つても暫らく何も云はなかつた。やがて一人が云つた。

「サミエル君。君の云ふことは尤もだ。然し僕達は君の人となりをよく知つてゐるのだ。君の智力と體力と、そして善良なる精神とを知つてゐるのだ。その上で君を選んだといふ以外に、何の理由もそこには無いのだ。」

「君を選んだといふのはそれだけの理由なのだ。」と他の一人も云つた。「何も吾々の詭計や個人的の感情が交つてはゐない。今度のやうな腕を要する危險には誰として當るものが無いことを僕達は知つてゐる。どうか吾黨のために努力してくれ給へ。」

サミエルは默つて、腕を固く組んだまゝ聞いてゐた。それらの假面の人々の改つた調子で話される言葉に、痛く打たれてゐるやうにも見えた。やがて彼は答へて云つた。

「あなた方は間違つてゐます。僕はあなた方の云ふやうな腕も持つてゐなければ、極くやくざな人間です。ですから明日は、僕はあなた方の軍人として働きませう。さうだ。僕はそれにしか價しないも

のなのですから。」

「……では宜しく頼む。」とその時、彼等の代表者が改つて云つた。「吾黨の名に於て、神の名に於て宜しくお願ひする。」

代表者の合圖で、先程二人を連れて來た男が出て來た。そしてサミエルとジュリアスを連れてそこを出た。

……

三十分後、サミエルとジュリアスは宿屋の一室に落付いた。

九、湧き來る思ひ

冷々とする夜氣が開け放たれた窓から入つて來た。靜かに晴れた夜空には、皎々とした月ときらきらと瞬きする幾多の星とがあつた。

サミエルもジュリアスも口を聞かなかつた。過ぎ來しいろ〳〵の思ひ出や、次から次へと湧いて來る考へに、彼等はすつかり囚はれてしまつてゐた。

ジュリアスはクリスティヌのことを考へた。それと關連して父のことも考へた。おゝ、何といふ不

可思議な、豫想外の事件が降つて來たのであらう。クリスティヌ、父、そして明日の決鬪——何が失はれ、何が殘されて行く運命に自分はあるのだらう。

サミエルは先程、自分に對してあんな依頼をされた假面の人々が、果して誰であらうかと想像して見た。ひよつとすると皇帝陛下ではなかつたか。——あゝ、もしさうだとすると、自分は何といふ口のきゝやうをしたのであらう。しかし、あれでいゝのだ。何もやましいことはある筈がない。

自分に對してあんな依頼をした、かの代表者が、もしも皇帝であるとしたならば、……そこから聯想される種々の來るべき事件は、サミエルをして果てしない空想に走らせないでは居なかつた。

彼は湧き來る思ひに居たゝまらず起ち上つた。そしてジュリアスの前に立ち止つた。兩手を額にあてゝ、深い考への中に沈み込んでしまつてゐる友の前に。

「もう君は寢るかい。」

と彼はたづねて見た。何を云つてよいのか、それとも云はない方がよいのか分らなかつた。

ジュリアスは夢からさめたやうに顏を上げた。

「いや、まだ、まだ。これから手紙を書かなけりやならないんだ。」

「誰に？　クリスティヌにか？」

「戯談ぢやない。何のわけがあつて、またどんな面目あつてそんな厚かましいことが出來るんだい。」
「何もかまはんぢやないか。」
「僕は親父に書いてやらうと思つてゐるんだよ。」
「親父なんかになら今書かなくたつて明日にでもしたまへ。」
「さうはいかない。僕はすぐ書かうとしてゐるんだよ。」
「ぢや書きたまへ。僕も書かうか知ら？　えゝと……それはそれとして、ジュリアス。」
「何んだ。」
「明日は例の如くオットーとフランツと吾々が喧嘩をおつ始める。とその場になつて如何なるのか分らんが、豫め相手をきめて置かうぢやないか。オットーの方がフランツよりはいくらか強さうだが如何だらう。」
「さあ、或は強いかも知れないね。」
「で、どうかね、吾々二人は、オットーに比してどちらが強いだらうね。」
「さあ。それが如何したんだ。」
「如何もしたわけぢや無いが、一つ僕がオットーの方を引受けてやつつけるかな。そして君にはフラ

ンツの奴をご厄介かけることゝして。」
「さあ——」
「とにかく注文が少しむづかしいからね、考へものだよ、明日の勝負は。」
「……」
「こつちから攻勢に出てやるんだね。それが第一彼等の裏を掻くことになるわけだよ。」
ジュリアスは考へてゐたが、
「フランツを君がやつて、オットーを僕に引受けさせてくれ給へ。」
「何といふ君は子供だ。」と云つてサミエルは笑つた。「では籤を引かう。」
「よし。引かうとも。」
サミエルは紙片へオットーとフランツの名を書いた。
「さあ、どれでも一つ取りたまへ。」と云ひながらサミエルは、紙片を卷いて帽子の中へ入れ、そして振りまぜながら、子供のやうに笑つた。「さあ引きたまへ。もし君がオットーの名を引いたとしたなら、君は死命を制されたと思はなけりやならんよ。いゝか、さう思つて居れ。」
ジュリアスは手を突込んで將に一つの紙片を取らうとしたが、ふと止めてしまつた。

「いや、僕はかうしよう。手紙を書き終へるまで籤は開いて見ないことにしよう。」
さう云つて彼は、サミエルの帽子の中から紙片を取ると、そのまゝ聖書の間へ挾んでしまつた。
「よし、では僕も君の例にならふことにしよう。」
彼も残つた籤をそのまゝポケツトへ入れてしまつた。
それから彼等はテーブルに向ひ合つて坐り、同じランプの光りの下でペンを走らせはじめた。
さて、茲では、最初に先づジュリアスの手紙から紹介することにする。
親愛なる父上、
私はあなたに對して、何時も〳〵深い尊敬と信愛の情を感じてゐます。それは今更申すまでもありませんけれども、特にかうして膝下をはなれて居りますと何故か改めてさう申し上げなくてはゐられないやうな氣持に私をさせるのです。神學者として全ヨーロツパに著名な父上、その光榮ある名譽が一層私をしてあなたに對する感情を深めさせるのは申すまでもありませんけれど、私の未知に終つた母上、亡き母上に代つて幼少より私をあなたお一人で母上の分までも可愛がつて下すつたといふ事實が、かくも特別に私をしてあなたを深く考へさせてくれる理由なのではあるまいかと思はれます。

サミエルと私とは、先程ハイデルベルヒに歸つたところでございます。さて父上よ。私は語るべき種々のことを持つてゐる。筆をとりながら何から先きにお知らせしてよいかも分らない位なのです。ですけれども、それらの多くのことを語る前に、先づわが友サミエル・ジェルブのことを語らして頂きませう。何時も申しますとほり、私は曾てサミエル君の如く私にとつて重要な人物をこの世に見出したことはありませんのです。それはいつも云ふことですが、ほんとに運命のよき引き合せなのです。一生涯私はかうしたよき友をもう二人と見出すことは出來ないでせう。彼は私の持つてゐない種々の私と相反した性格の持主です。力强く、意力の旺盛な、膽力のある、快活な善良そのものゝやうな——何といつて彼のすべてを形容していゝのでせう。私は彼と共にゐると、自分も彼のやうに力あり膽力ある人間のやうに感ずるのです。彼の傍をはなれると、いかにも自分の無力と弱さを感じさせられるのです。
さて今回の旅行も、彼あるがために如何に面白く愉快に、そして疲れも知らずに過ごすことが出來たでせう。私達はあれからオーデンワルトの峽谷を通つてランデツクの方へ出たのです。嵐の中を、雷鳴の中を——おゝそして私達はその途中でどんな不可思議な魅惑するやうな光景に出遇つたでせう。私は何もかも語りませう、筆の拙ないのはお許し下さい。

親愛なる父上よ。

私達は……

――だがジュリアスのペンは、そこまでどうかかうか字らしい形を書いて行つたが、そこまで行くと軌道を辷つてゐた車輪がだん〳〵緩くなつてとう〳〵停つてしまふやうに、怪しくペンののたくりを殘したまゝ、ぱたりと手から落ちてしまつた。

重い眠りが、快よい眠りが彼の頭を襲うて來たのだ。

「ジュリアス、ジュリアス。」

ペンの落ちたのに氣付いてサミエルはさう呼んで見たが、ジュリアスは何とも答へなかつた。彼は筆を止めて呟いた。

「さうだ、無理もない。昨夜から君は重過ぎる位の感謝や胸のとゞろきに遇て來てゐるのだ。どれ、君は何を書いたのだ。一つ見せたまへ。」

彼は友の手紙を取つて眼を通した。微笑みがおのづと現れた。

「然し、君はよく僕達の間を解してゐる。君は僕を要しなけりやならん人間だし、僕は君を要する人間なのだ。」

彼は自分のポケットを探つて、鉛で引いた紙片を取り出した。そこにはかう書かれてあつた。

「フランツ・リツター」

彼は微笑んだ。

「いけない〳〵。ジュリアスは惡い籤を引いた。眠つてゐる間に彼の生命を救つてやらなけりやいけない。」

サミエルは友の聖書を取つて、先程ジュリアスが挾んだ紙片と自分のとを取り換へた。

「これで大丈夫、フランツとなら勝負はうけあひだ。」

やがて彼は手紙を書き終つた。

ジュリアスは昏々として眠つてゐた。

一〇、サミエルの生い立ち

以下、サミエルの書いた手簡を讀んで見よう。明日の決鬪に、オツトーを自分から選んだ彼の心事が、少しでもそれと肯かれることが出來たら幸ひである。

……

フランクフルトの一隅に、じめ〳〵した、薄暗い、眞直ぐな通りがある。凸凹とした狹い往來は、傾きかゝつた兩側の家々のために壓しつぶされさうになつて、がらんとした人影もない店舗々々には、古鐵や碎けた瓶やパン片などが並べられてゐる。此の街は夜になるとまるで避病院か檢疫所のやうに鐵門を堅く閉ざされてしまふのである。これこそフランクフルトの猶太人街である。

太陽の光りはこの狹いじめ〳〵した往來には屆かない。太陽に見棄てられたかうした街りほど慘めなものがまたとあるであらうか。

二十年前のある日のことであつた。この街のある家の扉口の前に、何か縫物をして坐つてゐる若い愛らしい娘があつた。

そして一方に、貧しくはあるが、眞正直なドイツの學生があつた。彼は若々しく、力に滿ちて、そして智識を持つてゐる。

かゝる場合、この二人のものゝ會合から如何な結果が生れて來るであらうか。それは諸君の御想像に任せる。

そして私は間もなくこの世に生れて來た。私生兒と謂ふ名目で。

母はあとでハンガリーで正式な結婚をした。が、私の知らないうちにもうこの世の人ではなかつた

のである。

私の知つてゐるのは、たゞ祖父のサミエル・ジェルブだけである。祖父はたつた一人の娘の私生兒である私を養育してくれた。

私の父親については、私は幾度かは相會つてゐた筈である。が、彼は私が彼の兒であることを知らうとも思はなかつたし、從つて探し求め、私を腕の中に抱き、「吾が兒よ。」と耳元で囁かうとはどうして想像することが出來よう。

勿論、彼としては、彼の位階、家柄などよりして、猶太の娘と結婚し、子を生み、その兒を正子として屆出でるといふやうなことは出來なかつたのかも知れない。……

以上がジュリアスが眠つしまふまでに、サミエルの書いたノートである。彼はポケットから鍵を取り出し、ジュリアスのと取りかへてから、一瞬ぢつとして紙片を見つめてゐたが、やがてもとのやうにポケットに突込むと、再びペンを取つて書きつゞけて行つた。

かくて私は、私の父が如何なるものであるかを些しも知ることなしに殆んど十年を生きて來た。

その年、私は曾て私の母が縫物をしながら坐つてゐた彼の戸口に坐つて、ある朝、餘念もなく本に讀み耽つてゐた。と、突然顏を上げると、私は嚴めしい顏付をした一人の紳士が、私を穴のあくほど見つめてゐるのを認めた。

私は心に驚きを禁じ得なかつた。

紳士は店へ來た、そして祖父の安否を尋ねられた。

私の家は貧しかつたので、學校へ行くことも出來ないでゐた私の境遇は、その紳士の來訪によつてがらりと變つてしまつた。私は學校へ行けるやうになつた。ラテン語を學びギリシヤ語を學び、大學へまでもつゞけて通學しつゝある。

何といふ不思議な感動が、この紳士から私へ來たことであらう。けれども紳士は、私をわざとのやうに身近くへは近づけなかつた。私も敢てその紳士が誰であるかを聞かうとはしなかつた。紳士は私を教育してくれた。面倒を見てくれた。私の生涯を築いてくれた。それで十分だ。それ丈けで滿足だ。紳士も私もお互ひに了解し合つてゐる。その他に何の必要があるであらうか。

さて、私は二十一歳にならうとしてゐる。私は私の力を信じてゐる。自由を信じてゐる。祖父は亡くなつた。母も亡くなつてゐる。私は一人だ。

恩人よ!! あなたの一人息子、ジュリアスは今、死か生かの危地にある。詳細はジュリアスの手紙が書きつゞけられるであらう。私は彼の生命のかゝつてゐた一片の籤を、彼の眠りつゝある間に自分のものとして置いた。それは永年のあなたの恩義に對する私の取るに足らない眞心として納めて頂きたいのです。

ではこれにてお許しを、

サミエル・ジエルブ

サミエルは書き終つた紙を叮嚀に疊んだ。ジュリアスはふと物に驚いたものゝやうに眼をさまして友を見た。

「よく眠れたかい。」

とサミエルは笑ひながら訊ねた。

ジュリアスは眼をこすりながら、漸く明け放れて窓を染めて來た旭日の光りをまぶしさうによけながら、答へる代りに聖書を開いた。そして摘み上げた紙片を讀んだ。「フランツ・リツター」

「あゝ、君のはフランツか。では僕は僕の選んだ相手を授けられたわけだね、よかつた。だが、この

旭日!!　これが夕日となつて沈むのを見ることが出來るのか出來ないのか。」

さう云つてサミエルは、感慨深かさうに窓の外を見やつた。

一一、彼等は誰を選んだか

ジュリアスが手紙の續きを書き終つて封をした時、サミエルはパイプに火をつけた。

「で、ね。」と彼は徐ろに煙を吹きながら口を切つて、「僕等が豫め相手を選擇したやうに、彼等の方でもしたと思ふ。それは有り得べきことだからね。で僕等は何とかして、果して誰が誰を選擇したかを突きとめなくてはならない。突きとめてそしてもし僕等が選んだのと違つてゐた場合には、それを徹回をさせるやうな方法をとらなければならない。いや、それよりも寧ろその裏を掻いて、こちらからきめてしまつてやらうぢやないか。」

「……だがうまく行くか知ら。――法則が許すかしら?」

「フランツ君は未だに彼の女と關係してゐるかね。」

とサミエルはかまはず訊ねて行つた。

「あゝ、あのロロット。」

「彼女は大分君を好いてゐたね。もし僕の觀察にして誤りなくんば……こゝに一ついゝことがあるんだ。吾々は先づ彼女の家へ行つて見る。通りかゝりに、寄つたといふ風にして、――それには以て來いの朝だよ。彼女は多分、いつものやうにあの窓のところで編物してるだらう。君はしらばくれて言葉をかけて見る。そして吾々は……」

「いや。」とジュリアスは、そこまで聞くと當惑したやうな顔をして遮つた。「そんなことをするより他にいゝ方法があるよ。」

「どんな?」

「どんなつて。……だが僕は吾々の決闘に一少女の助力は求めたくないからね。」

ジュリアスはさう云つて顔を眞赤に染めた。サミエルは笑ひ出した。

「お坊ちやん!　何といふ可愛いことを云ふのだ。」

「莫迦な!!」

「まあ聞きたまへ。君はクリステイヌ嬢のことをばり考へてゐる。そして君のその純潔な思ひを、如何なる他の女を考へることによつても亂されたくはない……」

「止せよ!　君は氣でも違つたのかい。」

ジュリアスはサミエルの口から、またしてもクリステイヌのことを聞くのが、彼女を汚されるやうな、變に恥かしい腹立たしい思ひに堪へられなくて云つた。

「或はさうかも知れない。僕ではない、君の方がですよ。それは然しどちらにしても問題ぢやない。問題は君がロロットに何故言葉をかけるのが厭なのか、それだけだ。君はクリステイヌ以外の女性には話しかけるのも汚らはしいと思つてゐるのだらう。見るのさへ何かしらクリステイヌを……」

「もう充分！　よく分つたよ。君の云はうとすることは。」

ジュリアスは堪らなさうに遮つた。

「分つても分らなくても、もう云はないから安心してもいゝよ。僕はたゞオツトーと闘ふやうにしさへすればそれでいゝんだから——時に、彼奴も女も持つてたつたね。そんなことは君の口吻ぢやないが如何でもいゝことではあるが。」

彼は考へてゐたが、

「あ、さうだつた。」

さう云つて俄かに立ち上つてベルを鳴らした。

一人の給仕が現れた。

「君はあの『小狐』を知つてゐるね、ルドウイヒ・トライシュターを……」

「えゝ、存じて居ります。」

「ではすぐに行つてね、僕が今出かけて行くからつて云つて置いてくれ。」

給仕は部屋を出て行つた。

十分間過つたか過たないうち、サミエルが出かける支度をしてゐるところへ、トライシュターは息せき切つて駈け込んで來た。まだ寢てゐたのか眼が重たく眠さうであつた。

トライシュターはもう三十歳に手の屆かうとする年輩の、顋髯が胸の方まで垂れ下り、鼻髭はぴんとそり返つて、眼は切つ立ち上つて見える、一見して人を感激せしめずには措かない容貌の持主であつた。

彼は年齢と經驗とから自然に出來た重々しさを持つてゐた。大學生としての傳統をより多く持ち傳へてゐる點に於て、またその勢力に於て、大學生間にも所謂俗物間にも知れ渡つてゐた。さうした彼はどうしたわけかサミエルには一目置いてゐるのであつた。

部屋に入つて來た時、彼は手にしてゐたパイプにまだ火もつけてはゐなかつた。如何にあわたゞしくやつて來たかを察して、サミエルは云つた。

「マッチはそこにあつたよ。君はまだ朝飯前かね。」
「なに、九時頃でいゝんです。」とトライシュターは答へた。「僕はさつき例のところ(行きつけの料亭)から歸つて寢たところだつたんです。そこへ君が來るといふ使者なもんだから……」
「さうかね、そりやすまなかつた。實はちよつと君に尋ねたいことがあるんだ。オツトー君は酒をやつたつたかね。」
「やりますとも、やりますとも、彼は恐ろしく大酒家ですよ。」
「さうかね、そんなにやるかね。」
「えゝ、恐らく彼の右に出づるものは彼等の仲間には無いでせう。」
「君は? 君の右には如何かね。」
「いや、なアに。然し機會さへあれば飲み較べは辭しませんがね。」
「ぢやその機會を作らうぢやないか。かうなんだ。吾々の大學ではこの一ケ月以來、目覺しい決鬪が跡を絶つてゐる。ところが今日その埋め合せに一つあるんだ。分つたでせう。——そのために、では大いにやらうぢやないかね。」
「大いにやりませう、閣下!!」とトライシュターは得意然と云つた。「ですか、ビーアですか? それとも葡萄酒で挑戰するんですか?。」

「勿論、葡萄酒さ。ビーアなんか君、俗物の飲むもんだよ。ピストルやビーアは彼等俗物のために見棄てよだ。吾々のためには葡萄酒(ワイン)と劍とが適當してゐるんだ。」
「贊成! では早速一つ『大樽』へこれから參りませう。」
「僕とジュリアスとはきつちり九時半に行くからね、配膳は宜しく君に賴んだよ。いゝかね。」
「承知しました。」

一二、ロロット

トライシュターが出て行くと同時に、サミエルはジュリアスの方へ振向いた。
「さあ、これからの順序を定めよう、先づ最初にロロットのところへ行く。それから、講義に出席して、そして『大樽』へ行つて酒合戰をするとしよう。」
彼等は支度を整へて起ち上つた。入口のところへ差しかゝつた時、下僕が一通の書狀をサミエルの前へ差出した。
「何んだ。」

然しそれは今日の決闘に關したことではなかつた。ある化學教授からの朝食の招待狀であつた。

「お氣の毒だが、先生にさう云つてくれたまへ、先約があるので今日は御免蒙りたいからつて……明日にもお伺ひしませうからつてね。」

下僕は去つた。

「惜しいことをした。こんな事件が控えてゐなかつたら、出かけて行つて一つからかつてやるところだつたが……」

彼等はロロットの住んでゐる町へ着いた。

豫想した通りに、ロロットはある街に向つた家の開け放たれた窓に凭れて編物をしてゐた。帽子を阿彌陀に、光澤ある髪の毛を額の上に蔽ひ被せてゐた。

「さあ、何んで話しかけたらいゝんだらう。」

とジュリアスはロロットの姿を見るともうもぢ〳〵しはじめた。

「何んだつて關はんぢやないか。お早うとでも、如何ですかとでも。」

「まさか……」

ジュリアスは致方なさゝうに娘の方へ近づいて行つた。

「もうお仕事ですか、ロロット、お精が出ますね。」

とジュリアスは、羞恥んだやうな調子で話しかけた。

「昨夜は例のところに(料亭)お出でのやうでしたね。」

ロロットは顏を赤めながら立ち上つた。彼女は、ジュリアスに話しかけられたことが大變うれしさうであつた。

「え、でもダンスはしなかつたことよ。何故つて、フランツが嫉妬家なもんですから、何のかんのとケチを附けてやらさないんですもの……お早うございます。サミエルさん——」

「フランツはそんなに嫉妬家なんですか。」

「そんなにつてわけも無いけど……」

「あなた何をお編みになつてらつしやるの?」

ジュリアスは話題をかへた。

「匂囊よ。」

「綺麗ですね。誰にあげるの?」

「いゝ人に……そんなことお聞きになつて如何するの?」

「羨しいですなア。」
「何がお羨しいの？」
「あなたの『いゝ人』が……」
「勿論ですわね、ほゝゝゝ。」
「はゝ、はゝ、かなひませんね。」
「これ、いゝでせう。」
と、暫らくして笑ひ止むと、ロロットは編針ごと二人に見せた。
「それへリボンをつけるのでせう。」
サミエルは可笑しな調子でたづねた。
「……」
何か口の中で呟きながら、ジュリアスは素早くロロットの細い指を捉へて、指輪を抜き取つた。
「取りかへつこしませう。」
「あら、何をするの？」
「いゝぢやないか。」

ロロットはジュリアスから別の指輪を受取つてはめた。
「これで今日は左様なら、ね。」とジュリアスは云つた。「また來ますよ。これから講義に出席して、それからね。」
「あら、もう『左様なら』なの、氣の早い人達だこと——お手々も忘れつちまつてさ。そんなにフランツが恐いの？」
「早くしろ。」とサミエルは友の耳に囁いた。「奴等が來たから。」
實際その時三人の生徒が通りかゝつて、ジュリアスがロロットの手に接吻してるのを見た。
「左様なら。」とジュリアスは最後に云つて、サミエルと共に娘のそばをはなれた。
教場へ來た時には、講義は既に始つてゐるところであつた。
ハイデルベルヒの講義は巴里の大學と略ぼ同じである。學生の多くはノートも取らずに、たゞ傾聽してゐた。殘りの幾人かは話してゐた。極く少數のものがせつせとノートを取つてゐた。ある者はベンチに横坐りして兩足を壁に突張つて何かを考へてゐた。ある者は頤を掌で支へて、しやがみながら、靴先で調子を取り〳〵小聲で唄を歌つてゐた。かくて教授の聲は彼の前方約二三米突のところで消えてしまつて、後方へは透らない。然しながらそれで一向差支へないのである。

フランツとオットーとは、それでも注意して聽いてゐる側の學生であつた。彼等は熱心さうに今日も傾聽してゐた。

講義が終るとサミエルとジュリアスとは人々と一しよに教場を出た。九時半が丁度打つたところであつた。彼等はすぐに「大樽」に入つて行つた。醉ひどれのわい〳〵騒いでゐる中に。

學生連の一ぱいゐる別室に通ると、サミエルとジュリアスの姿の現れたことが、彼等の間に感動を湧き立たしめた。

「やあ、サミエル氏のお出だ。——おい、トライシュター君、君の『閣下』がお出でだぞ。」

だが、サミエルは、さうした喧騒の中を分けて、フランツ・リツターがこちらへ近づいて來るのを認めた。彼は白紙を見るやうに蒼ざめてゐた。

サミエルはジュリアスの肩をつゝいて、何をか彼の耳へ囁いた。

フランツはジュリアスの前へ來て突立つて云つた。

「ジュリアス、君は今朝、講義に來る途中でロロットと何か話してゐましたね。」

「いかにも話してゐた。」

「何を話したんだね。」

「僕は君の近況を聞いて見たんですよ、フランツ君。」

「戯談でせう。君は彼女の手にキスしてゐたぢやありませんか。僕はあゝされることを好まないのです。」

「だが、彼女は好まなくないとしたら……！」

「君は僕を侮辱するつもりなんですか。」

「いや、その反對だよ。」

「さうするつもりならたゞ一つの方法がある。それはカイザースタール丘に於て始めてそれと知られるだらう。」

「君のいゝやうに……」

「一時間後！」

「一時間後！」

彼等は分れた。ジュリアスはサミエルの近くへ來ると囁いた。

「定つた。」

「大出來！」

サミエルは微笑んだ。

一三、葡萄酒合戰

サミエルのことになると、何もかも呑み込んでゐるトライシタューは、もうすつかり葡萄酒合戰の準備を整へて待つてゐた。

「先方は、指令どほりオツトーとそれから相棒にフレツスワンストの奴を据ゑましたよ。あの『空色の間』で待つてゐます。」

かう云つて彼はサミエルとジユリアスの姿を認めると、報告するやうな調子で云つた。

「さうか。ご苦勞々々。早速やるとしようよ。」

當時ドイツの大學生間には、葡萄酒合戰、ビール合戰は珍らしいことではなかつた。

先づ双方の飲酒者は一定の飲量をテーブルの上に置く。それを復讐的に相手に強ひるために、いろ〳〵の侮辱したやうな言葉を投げ合ひながら飲んで行く。そして飲んで飲んでどちらか一方の倒れるまで競爭するのが普通なのである。

ジユリアスとサミエルが「空色の間へ」入つて行つた時は、會戰の準備はすつかり整つてゐた。恐るべき壜の二列がぎらりとテーブルの上に並び、更に一方の隅には數多の細口壜がごぢや〳〵とかためて置いてあつた。

二つの席がテーブルの一方に空いてゐた。勿論、サミエルとトライシニターとのために殘されてある席だ。

オツトーはフレツスワンストの傍に坐つてゐた。サミエルとトライシュターとはその反對側に並んで腰を下ろした。

サミエルはポケツトから金貨を一つ掴み出して空中に投げ上げた。

「始め！」

とオツトーが叫鳴つた。

金貨は落ちた。トライシュターから始めることになつた。最初は當らず觸らずの言葉が應酬され、なみ〳〵とついだコツプが次から次へと飲み干されて行つた。が、だん〳〵醉が廻つて來るにつれて言葉も荒々しくなり、態度も粗暴になり、一言々々相手の心に深く觸れ、喰ひ入り、侮辱が痛くなつて行つた。

だが双方とも却々醉ひ潰れもしなければ言葉に窮しもしなかつた。よくもこんなに飲み、澤山の言

葉が言葉を生み出すやうに口を突いて出て行くものかと思はせるほど、彼等は飲み且つしやべつた。

テーブルの周圍に集つた見物の學生連は、戰士を勵ますいろ〳〵の言葉や身振でやんやと騷いでゐた。

最初に呂律の廻らなくなつてしまつたのがフレッスワンストであつた。間もなくオットーの口から即き捨てならぬ言葉が洩れてしまつた。

「……僕の語彙は勿論貧弱だ。然し語彙の貧弱は直ちに思想の貧弱を意味しない。」

「然らば何を意味する。」

言葉につまつて苛々した酔つたオットーは、

「サミエル君、君は賤奴だ、惡漢だ。」

と堪らなくなつて呶鳴つてしまつた。

見物は片唾を呑んで鳴りを靜めた。

サミエルの眼は火のやうに輝いたオットーに据ゑられた。その虎の眼は何を彼に答へ返すのか——

然し彼の言葉は落ちついてゐた。

「よろしい。カイザースタール丘で返報するからさう心得て居れ!!」

一四、決　鬪!!!

謀し合せて置いた場所でジュリアスとサミエルとは落合つた。介添人として二人の學生が選まれて彼等も一しよになつた。

彼等の通例の會戰の場所は、ハイデルベルヒから二哩ばかりあるカイザースタール丘ときめられてあつた。

彼等は徒歩で丘の上に建てられてある旗亭に達した。木蔭に蹲(うづくま)つてゐるその建物こそ、彼等の劍の相交へられるところだつたのである。

彼等は草花の咲き亂れた庭に、溫い日光の射してゐる中を足早やに通つて戸口を入つた。

フランツはもう來てゐた。オットーもすぐにやつて來た。

部屋の眞ん中には、一定の距離が白墨で印づけられてゐた。鬪士の位置につくのを待ち兼ねてゐるやうに。

「もう始めてもいゝぢやないか。」

とフランツは催促した。

「只今――」
と部屋の隅の方で器械箱を準備してゐた學生が答へた。彼は外科醫生であつた。傷ついた劍士を介抱するためにやつて來たのである。
彼は準備が終ると部屋の一方に位置して叫ぶやうに云つた。
「よろしい。」
その時、召使が水とタオルを持つて來て醫療具の傍へ置いた。
オツトーはこれらの準備の整ふ間、何かもどかしさうに口の中で呟きながらあたりを眺めまはしてゐた。見物に來た學生の喧騒が、一層彼を苛ら立たせたらしかつた。
ジユリアスは落付いて見えた。
サミエルは窓の外に眼をやつて、微風にそよいでゐる薔薇の花を凝つと見つめてゐた。
「準備はよろしい。」
と醫科生はくり返して云つた。
ジユリアスはサミエルに近づき、オツトーはフランツと一しよになつた。
四人の介添人は、劍士の後方に、壁を背にして立つた。闘士は戰ひの用意をした。

サミエルは介添のものに云つた。
「この埃屑(ごみくず)をかたづけてくれ給へ。」
「だが、法則だから。」
彼はテーブルの上に載つてある古ぼけた本を差しながら答へた。
「何？　規則だ。――然しこんな場合に少しでも身を保護するやうなものを着ける必要はありやしない。」
然う云ひながら彼は上衣を脱いでしまつて、部屋の一方へ投り出した。
それから彼は劍を取つて、試すやうに床の上を一つ二つ突いて見、刀身を一と渡り見渡してから、定められた位置について身構へた。
オツトーも同時に位置についた。ジユリアスもフランツも腕も露はに劍を振つて立つてゐた。
サミエルの言つたことや、態度は、周圍に控へて見てゐる人々に非常の感動を惹起した。
「始めッ!!」
介添の一人が號令をかけた。
四本の劍は同時に、さつと切尖が相交つた。部屋中はぴたりと默つてしまつて、あらゆる眼が闘士

の上にそゝがれた。

闘士は身構へたまゝ、お互ひに睨み合つて、ぢつと呼吸をはかつてゐた。

ジュリアスとフランツとは、眞に似合つた闘士であつた。フランツはロロットに對するジュリアスの仕方に對して、燃ゆるやうな嫉妬に怒つてゐた。ジュリアスはそれを知つて、わざとのやうに落付いて見せた。一ト突き相手から來ればはたと受けとめ、こちらから行けば見事に受け止められた。彼等は巧みに呼吸をはかつて、敵の隙をねらひ合つてゐた。

サミエルはまだ敵の眼を睨んだまゝたゞの一と突きもしなかつた。彼は冷たいまでに沈着であつた。オツトーもさる者、態度が自在で、猛烈で、どこからどこまで隙といふものがなかつた。

相交へた劍先は、一寸退けば一寸進み、一寸進めば一寸退き、まるで結びつけられてしまつてゐるのではないかとさへも思はせた。が、一瞬!! 閃く電光のやうな早さで相亂れ、相搏つた。——が次の瞬間には、やはり舊に復してゐた。

サミエルは痛快さうに微笑んだ。そして隙を見て距離をあけると、オツトーが一歩うしろへ退つてそれに應へる暇に、さつと突いて行つたサミエルの劍先は、あやまたず敵の胸を突いた。

この手落は、然しオツトーを奮激せしめた。彼は猛烈な突きを以つて相手を突き倒さねば止まないやうな勢でサミエルに向つて來た。が、サミエルは巧みに外して、またも輕くはあるが見事な突きを與へた。

サミエルの顏は野性的の歡喜で輝き出した。天性危險に遭遇することを好み、生死の境を往來することに無上の興味を覺えてゐる彼にとつては、かうした場合が得も云はれずうれしさうであつた。彼の唇はかすかに笑みを含み、冷たい皮肉さうな、侮辱的な表情を頰のあたりに集め、眼だけはぎらぎらと虎の眼のそれのやうに輝いてゐるのであつた。

オツトーは第二の突きを與へられて、更に〳〵奮激の度を增した。突かれた胸の痛みにもひるまず、彼の元氣は倍加して來た。サミエルの劍先が、少し守勢に返つたと思ふ頃、彼の劍先は閃くやうに相手の胸に突擊して行つた。

周圍から喚聲が起つた。サミエルはてつきりその劍先に心臟を貫かれて斃れたと思はないわけには行かなかつた。が、サミエルはひらりと身をかはして見事に避けてゐた。わづかにシャツの一方に穴をあけられたまでゞあつた。

恰度その時、ジュリアスは、不幸にも相手の突きを受け外して、左の腕にかすり傷を受けてしまつた。

一五、天使の祈、妖女の守護

その時、介添人が二人の間に割つて入り、既に勝負のあつたものとして引分けようとした。介添人の考へでは、フランツの嫉妬はそれで十分報ゐられたものと思惟したのである。然しフランツは、嫉妬以外に、ツーゲンブントから命令されたことを忘れはしなかつた。

ジュリアスも勿論それを忘れなかつた。彼は介添人を押し退けて叫んだ。

「まだ勝負はつかない。吾々の孰れかゞ一方の足下に倒れ伏すまでは戰はねばならないのだ。單にかすり傷位で勝負のつくものなら劍を用ひる必要は最初から無いわけだ。」

そして彼はフランツに向つて再び身構へた。

「さあ、來い！」

と云つてフランツも應じた。

その時、オツトーとサミエルとは、どちらも凝つとして睨み合ひをつゞけてゐた。恐らくはこの邊で引き分け勝負になるであらうと誰も豫期しないものはなかつた。

だが、サミエルはさうはさせなかつた。彼は輕侮の調子で云ひ放つた。

「よし、ご覽なさい。」と介添人に向つて、「まだ〳〵勝負はつかない。だが、オツトー君の呼吸は亂れて來た。」

「なにッ!!」

とオツトーは憤怒の聲で答へた。サミエルのいやに冷やかな、侮辱の言葉がぐつと彼の胸にこたへたのだ。

「さうぢやないか。親愛なるオツトー、僕の云ふのは本當だ。君が、たゞ一言『なにッ』と云ふのでさへ、そんなに亂れた調子ぢやないか。」

オツトーはきつとして叫んだ。

「然らば來い。さア!!」

一方、其の時、ジュリアスは心の中で考へた。

「十一時だ。彼女は今教會にゐるであらう。そして僕のためにお祈りしてくれてゐるに違ひない。僕の生命の恙なからんことを祈つてくれてゐるに相違ない。」

そして彼は劍を振りかまへて敵に向つた。

オツトーはサミエルの翻弄の言葉をもう耳に入れなかつた。極度の憤怒で彼は向つて來た。自分の身を守るよりは、少し位傷ついてもいゝから、敵を打ち倒さなくては止まないといふやうな快心で突かゝつて來た。

サミエルはその猛擊を眞向に受けながら巧みに防ぎ止めつゞけた。そして敵の劍先の亂れが見えて來ると、今度は突として彼は戰術を變へた。劍を縱横無盡に振り舞はし、閃電の如く烈火の如く敵の眼前に迫つて行つた。オツトーはその劍尖の動き閃きの前に眼を眩はし、爲す術もなくだぢ〳〵となつた。

サミエルは叫んだ。

「どうだ。親愛なる紳士！　君の眼は如何したのだ。」

さう云つて彼は尙も無盡に攻め立てゝ行つた。そして口から出任せに相手を侮辱し、嘲り、同時に立ち竦んだやうになつてゐるオツトーの胸に一と突きを與へて、

「何んだ、君は地藏樣か？　動けなくなつてしまつたといふわけなのか？」

オツトーは齒ぎしりした。が、どうにもかうにも、もはや手の出しようが無いのであつた。猫に捕はれた鼠のやうに彼は散々に嬲られた。

フランツの猛烈な突きが、ジュリアスの右腕をまたしてもかすめた。

が、何とした不可思議な機會であつたらう。ジュリアスは自分でも分らない、ある動作の下に、フランツの劍が自分の右腕へ來て、彼の身體が前のめりになつた瞬間、彼の劍は深くフランツの胸を刺してゐたのであつた。フランツの胸からは、血がさつと流れ出た。

再び何といふ有り得べからざる運り合せであつたでらう。フランツの最後の突きが、自分へ胸の復讐として來たその時、彼の頸から吊つてあつた匂囊の中に入つてある薔薇に當つて止つたとは。

「もはや十分だらう、オツトー君。」

とサミエルは云つて身を退かうとした。介添人は明らかにサミエルが最後の止めを刺さないで勝負を悟らせようとしてゐることを察して、その時中間に割つて入らうと身構へた。

が、オツトウは諾かなかつた。

「まだか。」

と叫んでサミエルは敵の劍を受け止め、すかさず突込んで行つて、敵の顏に覗ひを定めて、やつと突いた。

オツトーはその瞬間に左眼を突き拔かれてゐた。一吋半位の深さであつた。彼は一聲恐怖の叫びを上げた。

フランツは右肺を突かれてゐた。だが醫者はまだ生命をつなぎとめる望みは十分にあると證言した。

サミエルは醫者がオツトーを介抱に來た時云つた。

「君、宣しく手當をしてやつて下さい。實は腦天を突かうと思つたのだが、わざと片眼を潰すだけに止めたのだから、その點を了解して治療を施して下さい。」

それから彼は、自分の上衣を着、ポケツトからハンケチを出すと、ジユリアスの腕を繃帶してやつて、彼を別の部室に連れて行つた。

警官がどや〳〵とやつて來た。規則によつて決鬪者を拘禁するのだ。戸口に立つて警官隊に應答したのはサミユルであつた。彼は、オツトーとフランツとが決鬪したので、二人共傷いて今醫者の手に

置かれてあることを告げた。

ジユリアスは別室に行つて、テーブルに向ひ、父への手紙に追伸をした。

親愛なる父上、

天使の祈りと妖女の保護は、かくて再び小生等の生命を救つてくれたのです。危險は終りました。

吾々は元氣です。

來る日曜日に、吾々は吾々の保護者と相見ることの喜悅に胸が躍つてゐます。

ジユリアス

手紙を投函すべく召使に渡して、部屋を出た時、二人の負傷者は擔架に乘せられて運び出されるところであつた。

「さあ、晝飯をやらう。」とサミエルはジユリアスの肩を叩きながら云つた。

一六、愛の道

とう〳〵日曜は來た。待ちに待つた日曜日はとう〳〵やつて來たのだ。七時になるかならないうちに、サミエルとジュリアスとはもう出發してゐた。約束のところへ、彼女等の許へ！

彼等は馬に跨り、獵銃を携へ、鞍には小さい鞄を結びつけてゐた。

トライシュターは、パイプを銜へ、紫色の煙を吐きながら、二人に隨いて歩いてゐた。彼は勝利以來ます〳〵元氣になつてゐた。オツトーとフランツの傷いた夕方、オツトーは約三週間、フランツは一ケ年間床についてゐなければならないことを報告に來たのも、彼が第一着であつた。

市外に來た時、トライシュターは別れを告げた。サミエルとジュリアスとは速足(はやあし)で駈け出した。

ジュリアスはクリスティヌの思ひで胸がつまるほどであつた。再びネッカアへの道をかうして駈けて行つてゐるといふこと、そのこと一つでさへ彼には奇蹟のやうに思はれるのであつた。況してクリスティヌは自分達を待つてゐてくれる!!

サミエルは何時もよりも、更に〳〵戯談家で、機智と皮肉との交つた言葉が如何してかうもつゞけざまに出て來るのかと思はれる位であつた。彼はジュリアスの、有頂天になつた、いろ〳〵の期待で燃

えるやうになつてゐる眼を見ると、やたらにからかふやうな、冷やかすやうな言葉を、びせかけた。が、不思議なことに、ジュリアスにはそれが決して氣持を惡くするためには何の役にも立たないのであつた。彼はさうした言葉をきく毎に、却つて元氣にさへなつて行つた。

「君は何か持つて來たかい。」

とサミエルはふと訊ねた。

「何か持つて來たかつて？　何を？」

「多分飾りか何か、クリスティヌに。」

「え？　君は彼女が、もし持つて行つたとしても受け取ると思つてゐるのかい。ロロットとどつちやにしちやいけないよ。」

「何もそんな意味で云つてゐるんぢやないよ。——では父親の方にでも、植物學上の得難い著書でも探して持つて來てやつたかい。」

「あッ、僕は氣がつかなかつた。何といふ馬鹿だつたらう。」

ジュリアスは云つて、突かれたもの〻やうにどぎまぎした。

「致方がないね。ぢや、勿論、あの可愛い子供、いつもクリスティヌの傍にゐて、そして吾々の傍を

はなれようとはしなかつたロザリオのことは忘れはしなかつたらうね。何か非常に子供の好くやうな玩具を――五つ六つの子供の好きさうな玩具はいくらも店に並んでゐるからね。吾々の幼い經驗――いや記憶からだつて、『よその叔父さん』に貰つた玩具などは非常にうれしいものだつたからね。それに何んだよ、ロザリオに與へることはとりも直さずクリステイヌに與へることにもなる。クリステイヌにばかり贈つてロザリオに與へないことは、却つて彼女にも與へない方がいゝ結果になる――」

「何故君はもつと早くさう云つてくれなかつたんだい。」

當惑した時のやうにさう云つて、ジュリアスはくるりと馬首をもと來た方へ振向けて、まさに柏車をあてようとした。

「止れ!!」

とサミエルは叫んだ。そして笑ひながら、

「今更ハイデルベルヒまで行く必要なんかありやしない。玩具も書籍もちやんとこゝにあるよ。」

「なに、有るッ。」

「うむ、あるよ。確かに、書籍も玩具も――この鞄の中に入つてゐるから君に上げるよ。」

「有り難い。」とジュリアスは馬をもとの方向に直しながら、「感謝します。」

「それはさうとして、ジュリアス君、僕は、君が現在の心持を進めて行くと、非常に憂鬱な感情の中に陥込んでしまふだらうと思ふんだ。一年たつても、恐らく君が最初に彼女を見た時と同じところに君は逡巡してゐるだらう。――だが、安心したまへ、僕は何も君と彼女を爭はうといふのでは勿論ないんだから。僕は彼のグレッチヘン、山羊飼娘に不思議に惹き付けられてゐることは爭へない。彼女は僕を苛々させる。ぢらして來る。僕は最後に彼女を得ることは誤らない。自惚ぢやないよ。――で、僕達が、果して誰が一日でも早く對象を征服するか。一つ賭を行らうぢやないか。如何だ。拍車を當てゝ馬を飛ばすんさ。そして勝つたものが卽ち彼女等を早く得たことの前兆とするんさ。」

「いや、それよりも俟は、僕の面前でクリステイヌのことについては何も云つて貰ひたくないといふことを君に乞はなくてはならない。」

「變なことを云ふね、一向差支へないぢやないか。ついでに僕はもう一つ云つて置くよ。君はクリステイヌを讃美嘆賞し、且つ狙ふのはいゝ、然しそのことは直ちにクリステイヌが君の細君となつて行くことの可能とは自ら別物と見なければならない。」

「どうして?」

とジュリアスは意外なことを聞くと云つた風に訊ね返した。

「如何して？　は、はゝ。君もお坊ちやんですね。素直に云へば、こゝに二つの理由がある。第一、男爵、フオン・ヘルムリンフイルド、地位あり、名望あり、力倆ある貴族が、何んで彼女輩の如き、一田舍娘を選擇するものか。それに君自身にしてもさうだ。男爵が君のために伯爵令嬢か公爵令嬢か、百萬長者の秘藏娘かを選擇するであらうやうに、君もまた一田舍娘を貰はふとは思つちやゐまい。それに君は彼女の夫としては少し年をとり過ぎてゐるよ。」

「だつて愛（ラブ）には年齢といふものは無いよ。」

「だが君、愛（ラブ）と結婚とは自らにして一つものではないよ。」

それからサミエルは、如何して愛と結婚とが一つのものでないかといふことを滔々として述べ立てた。彼に云はせると愛といふものは一つの情熱で、結婚といふものは、より實際的な、社會的な方便だといふにあつた。

ジュリアスはそれに對して愛卽結婚といふ理想的見地から反駁した。如何んなにしても彼にとつては、愛と結婚とをはなしては考へることが出來ないのであつた。

双方に理由はあつた。サミエルはジュリアスを理想家、詩人と皮肉り、ジュリアスはサミエルを俗物とけなした。

さうして果てしない議論を戰はしてゐるうちに、二人はいつかランデックの十字路のところへ來てゐた。

「おい、もう來たぜ。こゝが十字路だ。それに僕達は姓でなく實名だけ名乘つて置くことにしようぢやないか。」

「さうしよう。」とジュリアスは答へた。「それに何も業々しくする必要はないと思ふよ。たゞの學生でいゝぢやないか。ラブは名や何かゝら來るものでなくて人それ自身から來るのが本當なんだからね。」

「クリスティヌさへ君を愛してくれゝばそれでいゝといふわけだね。」

「冷やかすな！　僕は僕の愛してる女性の幸福のためには死も尙ほ辭さないつもりなんだ。君見たいに何でも頭から冷やかしてかゝるのはよくないよ。」

「僕はまた僕を憎む女性なんか殺しても足りないやうな心を持つてゐるんだ。何も冷やかして云ふんぢやないよ。」

だが、もう二人はそこまで話して來た時、牧師の山宅へ近づいてゐた。

クリスティヌとロザリオとは、菩提樹の下で待つてゐた。そして二人の姿を認めると、歡迎の合圖を示すのであつた。

一七、森の隱者

ジュリアスは馬に柏車をあてゝ飛んで行つた。クリステイヌを見たことの喜悅は、彼をして何といつて挨拶をしてよいのか、まごつかせてしまつた。あらかじめ考へて來た言葉などは何處へか姿をかくしてしまつて出て來ようともしなかつた。

「ありがたう。」

と彼は云つてしまつて、顏を眞赤に染めた。

「もう危險は過ぎまして？」

とクリステイヌは微笑みながら訊ねた。

「えゝ、過ぎました。あなたのお祈りが僕達を救つてくれたのです。神樣は僕達をお護り下さいました。」

ジュリアスは馬を下りた。そこへサミエルも馬を乘りつけて來て、クリステイヌに挨拶した。叮嚀に、然しどこか冷たく。

クリステイヌは慨番を呼んで、青年達の馬を取らせると、二人を導いて母家（おもや）の方へ行つた。

グレッチヘンもゐた。彼はきまり惡げに日曜着を着て、サミエルにはさも敵意のありさうな一瞥を投げ、ジュリアスに對しては悲しげな微笑みを見せた。

「シュライベル氏は何處にお出でになりますか？」

とサミエルはクリステイヌに訊ねた。

「お父さまはすぐお見えになりませう。」と彼女は答へた。「ですけれど、教會を出まして、何か大變なお話があるとかで村の方（かた）のところへお寄りしましたのですが……ちよつとわけがありまして……」

さう云つてクリステイヌはちらりとグレッチヘンを見た。グレッチヘンはその譯が分らないのか、驚いたやうな樣子をした。

間もなく牧師は部屋に入つて來た。さも舊知の遠來の客をでも歡待するかのやうに、にこ〳〵しながら。

もう晝飯が準備されて、客達を待つてゐたのであつた。牧師は先立つて食堂に案內した。グレッチヘンもテーブルについた。

サミエルは、今日初めて眺めるかのやうに、クリステイヌの純潔な、生々とした、才氣ありさうな顏を眺めた。そして自分達の危險と、漠然とした言葉で過日云ひ現して置いた決鬪一件を細々と話し

てきかせた。だゞロロットのこと、ハイデルベルヒの古城でのことは省略するより外は無かつた。クリステイヌは熱心に聞いてゐた。「空色の間」の場では笑ひ出し、カイザースタール丘の場では打ち顫へてゐた。

「おゝ、あなたは、」と彼女はジュリアスに云つた。「若しもその時オットー・ドルマーゲンさんを敵手に選んでゐたとしましたら……」

「え、え、勿論もう今頃はお陀佛でしたよ。」

と彼は笑ひながら答へた。

「決闘も。」と牧師はそこへ口を挾んだ。「今は大分紳士的になつてゐますが、もとはどうしてもつと〳〵野蠻的な、恐ろしいものでゐわしたよ。俺は牧師としてはそんなことを云へた義理ぢやありませんが、まあ、こゝでは一人の人間としてお話しますのですがね。」

「それぢや、あの……」とクリステイヌは、父の言葉に遮られて、何を訊ねようとしたのか、ちよつとまごついて、「あの、サミエルさんはあなたよりはずつとお強くてゐらつしやるのね、ジュリアス。」

「勿論ですとも。」

とジュリアスは答へた。

「だが、御安心なさい。僕とジュリアスのやうな刎頸の友の間には決闘なんて出來よう筈はありませんから。」

とサミエルは笑ひながら云つた。

「或はもしあると假定しても、それは恐らく今度のやうな生温いものではなく生死の爭ひでせうよ。いや〳〵恐らくどちらも息の根の止まないうちは勝負がついたとは云はれないほどの猛烈なものでせうよ。」

「君は運命を除外してはいけない。たとへどんなに強い相手でも、運次第といふことが悪いでもないからね、——だが、まあ、そんなことは如何でもいゝ。これは素敵な葡萄酒ですね。」

あゝ、然し二人の會話——それが何かの前兆でないといふことが如何して云へよう。クリステイヌは聞いて蒼くなつて打ち顫へた。サミエルには眼敏くもそれが認められた。

「だが全然可能性のない會話ですよ。もつと別な、何か面白いことを話さうぢやないか、ジュリアス。」

ジュリアスはサミエルの眼付で、何か彼の語らうとするところであるかを悟つた。彼は立ち上つて行つて鞄を探り、いろ〳〵の玩具と一冊の書籍とを持つて來た。そして玩具はロザリオ、書籍は牧師

へと。

ロザリオは跳び上つて嬉しがつた。顔は急に輝かしく光り、不可思議な器械でも眺めて驚いてゐるものゝやうに、自働からくり人形を見つめてゐた。子供にしか無いさうした極度の喜悅、それは神の如く貴く純なものでなくて何であらう。

だが、牧師の喜びもまた子供に等しいものであつた。さうだ、彼もまた大きな子供に違ひない。彼は立ち上つてジュリアスの傍へ走り寄り、そして幾度もくり返して禮を云つた。

ジュリアスは然し、これらの書物は皆、サミエル君の深い思慮からなされたものであるといふことを顔を赤らめながら說いた。

クリスティヌは、然しまともにサミエルに感謝の眼を向ける勇氣がなくて、ジュリアスに眼で禮を述べてゐた。

サミエルはたゞ笑つてゐた。

食事が終ると、例のやうに、コーヒーを飲みに庭に下りた。

グレッチヘンはクリスティヌの背後(うしろ)に椅子を持つて行つて坐つた。

「さて、グレッチヘン。」と牧師はコーヒーを搔きまぜながら山羊飼娘の方に向いて云ひ出した。「ちよ

つとお前に話がある。

「私に?」

グレッチヘンは、はつとしたやうに振り向いた。

「さう。眞面目なことなんだよ。笑つちやいけない。お前ももう子供ぢやない。グレッチヘン。すぐに十八になるといふことはお前も知つてゐるであらう。」

「それがどうなんですの?」

「どうもかうもないぢやないか。十八になれば、女にとつてはもう未來といふことを考へなければならない年頃だ。お前も一生山ん中で山羊と一しよに生きて行くつもりでもあるまいぢやないか。」

「では誰と一生生きて行つたらいゝと思召しになるの?」

「勿論、正直な若者! お前の夫としての……」

グレッチヘンは變にかぶりを振つてゐたが、

「では、あの何誰(どなた)が私のやうなものを妻にして下さらうといふのですか?」

と彼女は訊ね返した。

「そんなことを云ふものがありますか。」と牧師は少しきつとした。

グレッチヘンはその調子に感じて、
「では本氣で云つてらつしやいますのですか。」
「勿論、俺は眞面目に云つてゐるぢやないか。」
「そんなら、あの、あなたが眞面目にさう云つて下さるならば、私も眞面目にお答へいたしますわ。私はたとへどんなお方がお申込みして下すつても、私はきつぱりとお斷りいたしますわ。」
「それはまた、どうして？」
「どうしてゞすつて牧師。かうなのです。私のお母さまがクリスト教の信者になられました時、お母さまは私のことを聖母様に奉献なすつたのですわ。ですから……」
「それはお前考へ違ひをしてゐる。あれは俺の意志に對してお母さまがなされたので、決してお母さまがお前の一生をそれで縛らうとしたのではない。他に何らの理由は無いはづぢやないか。」
「他にもございますのですわ。」とグレッチヘンは答へた。「その理由と申しますのは、私は何誰にも、またどんなものにも私といふものを頼らせたくないのです。つまり他人といふものに自分を屬させたくないのです。私は保護の名の下に、自分を奪はれたくはないのです。——それに一度び結婚しますれば、あの可愛い山羊の群や、いろ〳〵の草花や樹木や森を見捨てねばなりません。そして村に來

て家といふものゝ中に住み、往來といふものを歩かねばなりません。冬が來た時にさへ部屋があればあとは私には家なんてものは必要ございませんのです。日曜日にだけかうして晴衣を着さへすれば、あとは何んにもいらないのです。おゝ、夏の夜、私のやうに野原で過ごしたことのないものに、どうしてあの美しい星や、曉の空がお分りになるでせう。庵室をしつらへて一生を野原で過ごす方もございますとやら——私もその森の隱者なんですわ。私の身體は靜寂境と聖母様に献げたものでございます。人間のものとなるために生きてゐる身體はもう持つてゐないのでございます。お母さまはあなたのお心に向つてお誓ひなされたのだと申されますが、私の考へではさうではございませんの。お母さまは、ほんとうに私をお知り下さいまして、そしてあゝ申されてあの世へ逝きなすつたのですわ——牧師、人間の愛といふものは、恥辱と殘忍なものでございます。私はそれを知つてゐるのでございます。」
グレッチヘンは嚴肅な調子で述べて來た。聞き終つた時、サミエルはクリステイヌから彼女の方へと、燃ゆるやうな凝視を移した。
彼は尙もまぢ〳〵とグレッチヘンを見つめながら云つた。
「馬鹿な——そんなら、さうした百姓男でなく、或る生れの良い青年が、彼自らあなたに申込んだと

したら、あなたは今のやうなことを再び仰有いますか？　たとへばですね。僕があなたに結婚して下さいと云つたとしたら……」

「あなたが……？」

と彼女は訊ね返した。

「さうです。僕がです。」とサミエルは答へた。「あなたは僕にその可能性が無いとお考へになることが出來ますか？」

此度こそ眞實を語つてやつたのだ。彼女は果して何と答へて來るだらうかといふやうにサミエルはグレッチヘンを見つめた。

「それが眞實のことなんでしたら……」と暫らく默つて躊躇してゐたグレッチヘンは、やがて答へた。「でも、やつぱり同じことですわ。私は村が嫌なやうに、町もまた嫌ひなのですもの……私はどんな方でも人間といふものが厭なのです。と申しますのは、何もあなたが私にさう申しますお心までとは申すのではありませんけど……」

「さうですか、では、そのお挨拶をしつかりと記憶してゐませう。」

と云つてサミエルは、威すやうな笑ひを發した。

牧師はまた先きのつゞきを云ひ出した。

「よく俺の云つたことを考へて置きなさい。グレッチヘン。あとでクリスティヌがよくお話しするだらうから——お前がお前を嫁にと望んでゐる正直な若者のことをよく知れば、お前はきつと今の言葉を取り消すに相違ないから……」

牧師はさう云つて默つた。が、すこしすると、グレッチヘンは何とも云はずにそこを立つて行つてしまつた。牧師は贈られた著書に見入りはじめた。ロザリオは前から玩具に夢中になつてゐる。

一八、地獄谷

「お父さま。」

クリスティヌは、暫らくしてから云ひ出した。グレッチヘンが行つてしまつたので、話題のなくなつた彼等は、牧師の心が書籍の方へ取られてしまつてゐるので、何となく手持無沙汰になつて來た。

「お父さま、これからエベルバックの廢墟や地獄谷の方へ行つて見ちやあ如何？　私こないださうお約束してありますのよ。」

「よからう。」

と牧師は云つて顔を上げた。何か深く書籍に書いてあることに感動したもの丶やうに、牧師の眼は考へ込んでゐた。

やがて彼等は出發した。ロザリオは玩具で遊びながら家に殘つてゐること丶なつた。村の若者の一人が遊びに來たので、快く彼も殘留を承諾したのであつた。

以前とは別な道を取つて彼等は地獄谷へと向つて歩いて行つた。その道は遠廻りであつた。が、彼等は敢てこちらを選んだのであつた。

牧師は得難い書籍を得た喜びと、その中に書いてゐる博い智識に殆んど魂を奪はれてゐる。彼は通りすがりに見るあらゆる草や樹木やについて、サミエルと論議しまた質問しはじめた。

とう〳〵ジュリアスとクリステイヌは「二人切り」になつたのである。

どんなに彼はかうした「好機會」を待ち望んでゐたことであつたらう。だが、とう〳〵その期待は滿されたのだ。然し彼はさうなつて見ると、またどぎまぎしたり、思ふやうに振舞へなかつたりすることを如何することも出來ないのであつた。

クリステイヌは明らかにジュリアスがさうした心にあることを看て取つた。そして自分もまた何故かそれに染感するのであつた。

けれども彼等は相並んで歩みを運んだ。默つて、恐れに似た心で、然し幸福に——さうだ。幸福に——默つてゐてもあたりでは小鳥が鳴いてゐた。太陽が照つてゐた。樹木が繁つてゐた。草が青々として微風にそよいでゐた。それらのあらゆるものは、彼等の語るべくして語り得ないでゐる言葉を語つてゐるのではないのであらうか？

かくて彼等は地獄谷に着いた。

サミエルは谷が見え出すや否や駈け近づいて行つて、深淵に臨んでゐる樹の根に攀ぢ上つた。

「さあ、今こそ底の底まで見究めてやるぞ。この前見ようとした時は、遺憾ながら暗闇の外見ることの出來なかつた。今こそ、その埋め合せに、隅から隅まで見てやる。——おい。ジュリアス、早く來ないか。」

ジュリアスはクリステイヌが恐ろしがつて止めるのにも拘らず、岩の端まで進んで行つた。

「おゝ、これは憎い奴を突き落してやるには持つて來いのところだよ。ちよつと突けば、どんな奴だつて堪つたもんぢやない。」

「お止しなさい。」

とクリステーヌはジュリアスの腕を捉へて引き戻さうとした。

サミエルは呵々と笑つて、

「まさか、ジュリアスを突落しやしませんから大丈夫ですよ。」

「でも、危なうございますから、ひとりで落ちないとも限りませんから、眩暈でもすると……」

「いや、實際お氣をつけなくてはいけませんぞ、御冗談はお止しなされた方が宜しうごわしよう。」

と牧師も云つた。そして彼は、不可思議な、歴史的な悲劇的な地獄谷の傳説があること、それから二三年前に一人の百姓が、自分から身を投げたのか、それともあやまつて落ちたのか、とにかく谷へ落ちた人があつた。死體なりとも探さうと思つて、人々は綱を下ろして探しに谷へ降りて行つた。ところが、その人も何時の間にか落命したと見えて歸つて來ない。谷の底か、或はどの邊かに毒瓦斯のやうなものがあつて、それが人の生命を取つたのであらうといふことを語つた。

「大きな、そして馬鹿に深いものだ。」

とサミエルは云つた。

「暗闇で見た時よりは何といふ壯觀だらう。おゝ、あそこに花が咲き群つてゐる。壯美には危險が埋伏してゐる。だから人を魅惑する。惹きつける。僕は夜見てこの谷を愛すべきものだと云つた。ところが太陽の下で見て、始めてこの谷が僕といふ人間と相似てゐるといふことを知つた。」

「おゝ、ほんとですか。」とクリヌテイヌは反射的に、その言葉に打たれたものゝやうに答へた。

「あなた、こんなところへ陷ち込んではいけませんよ。今から注告して置きます……」

と云ひながらサミエルは突端から身を退いた。

「もう何處かへ行きませうよ。」とクリステイヌは云つた。「あなたは私をお笑ひなさるんですもの——私、こゝにゐますと、何だか身内がぞつとして來ますの。恐ろしいやうな、何んだか變になつて參りますの。何か惡いことでも起つて來さうな——もうこんなとこに立つてゐるのは厭ですわ、あちらへ、あの廢墟の方へ參りませうよ。」

四人のものは、そのまゝ無言で歩みを返した。間もなく、曾て在つたエベルバツクの城塞のあとへ出た。

廢墟は曾て夜見たやうな陰慘な恐るべきところではなく、何となく日の光りに笑つてゐるやうなところであつた。

苔や灌木が樂しげに生え繁り、野生の種々の草花が咲き亂れてゐた。小鳥は林から林へ囀りながら渡り歩いてゐた。サミエルが馬を乘りかけて今にも危く谷底へ落ちようとした彼の突端の方にあたつて、ネツカーの流れが、きら〳〵と陽に輝きながら谷の彼方を流れてゐるのもはつきりと見えた。

サミエルは、崩れかゝた壁のところに立つて、牧師の口からエベルバツク伯爵の古い物語を聞いてゐた。

クリステイヌは、その時、ジュリアスの方を振向いて訊ねた。

「何を考へてゐらつしやるの？」

懸崖から身を退けて、今は安全な地に二人とも立つてゐるので、彼女の擧動は元氣がよかつた。

「僕が何を考へてゐるのかと云ふのですか。」とジュリアスは答へた。「あなたは先程、あの谷の上に立つてゐる時云ひましたね、不幸がこゝに潜んでゐると云つたやうな意味のことを——僕は今、この廢墟の上に立つて考へてゐるのです、「幸福がこゝにある。」と。ねえ、クリステイヌ、この城の壯麗だつたこと、美しかつたことを誰あつて否定出來るでせうか。そして過去何百年かの前、こゝには人間が住んでゐたのです。青い空が彼等の頭上にありました。溫かい陽が廻つてゐました。そして一人の若い美しい妻が……無邪氣な純潔な美しい妻が……おゝ、クリステイヌ！　あなたは聞いてゐて下さるのですか。」

何故か知らクリステイヌは深い感動を禁ずることが出來ないのであつた。彼女は涙を流してゐた。曾て未だ感じたことのない快い涙、——幸福な思ひが湧いて來たのであつた。

「お聞き下さい。」とジュリアスはつゞけて云つた。「僕は、僕の生命をあなたに負ふてゐるのです。決して空虛なお世辭ではありません。丁度あの決鬪の時、敵の劍はもう僕の胸を刺さうとしてゐました。僕はもういけないなと思つた位だつたのです。僕は瞬間的にいや本能的にあなたの名をお呼びしたのです。ところが如何でせう、劍先はそれでたゞ皮膚を擦つたに止つたのです。」

「それはあの、何時頃でしたの？」

「十一時！」

「おゝ、丁度その時、私はお祈りしてゐましたわ。」

彼女は驚きの情を以て、卒直に云つた。

「僕はそれを知つてゐるのです。」とジュリアスは更に、「然しながらそればかりではないのです。第二の危險がまだ殘されてゐたのです。敵の肺を僕の劍が突いた刹那！　烈しく來た敵の最後の切尖は僕の胸へ來たが、危くそれも免れることが出來たのです、と云ふのは、あの薔薇の花に切尖が止つてゐたのです。」

「おゝ、本當!!　神樣にお禮を申さねばなりません。」

とクリステイヌは叫んだ。

「さうです。そして。」とジュリアスは更に云つた。「あれ以來、あゝした不思議以來、僕は更にもつと〳〵あなたを必要な人間だといふことを知つたのです。もしもあなたがさうであつてくれゝば……」

クリステイヌは微かに顫へて、一語も發することが出來なかつた。

「たゞ一言——」とジュリアスはつゞけて云つた。燃ゆるやうな心を制することが出來なくて、彼女の方にかゞみ込みながら、「言葉で無くてもいゝ、たゞ一つのしるしでも——私達は決して相離しては考へることの出來ない存在だといふことを、あなたと私と、そしてあなたのお父さんは、決して……」

「だがサミエルは除いて……」

皮肉な笑聲が背後でした。

それはサミエルであつた。ジュリアスははつとして言ひ止めた。

クリスアイヌは眞赤になつて俯いてしまつた。ジュリアスは振返つて、何らか自分達の樂しい夢を遮られた返報をしてやらなければと考へてゐるうちに、牧師が來てしまつた。彼は一語も口にすることが出來なかつた。

サミエルはジュリアスの耳元に囁いた。

「君はもう少しで彼女の父に聞かれてしまふところだつたぜ。」

彼等は山宅の方へ歸らうとして立ち上つた。

四人は並んで歩いた。ジュリアスはもうクリステイヌと「二人切り」にならうとはしなかつた。彼は考へて見ると、先きに自分が云ひ出したことに對して、クリステイヌの答を聞くことを寧ろ恐れた。

突然、四人の足音に驚かされたのか、四五頭の山羊が草叢から飛び出して逃げて行つた。

「あ、これはグレツチヘンの山羊ですね。」

とクリステイヌは云つた。

實際グレツチヘンが、すぐ近くの小丘の頂上に坐つてゐるのが見え出した。

牧師はクリステイヌを呼んで、何か一言二言囁いた。クリステイヌは身振で答へて、小丘の上によぢ上り、グレツチヘンの方へ歩みを運んだ。

サミエルとジュリアスとは、彼女を助けて道を登らうと云つたが、クリステイヌはそれを斥けて、

「いえ、いえ、それには及びませんの。ちよつとあの人と二人切りのところでお話がありますのですから。」

彼女は身輕に岩を踏んで、すぐにグレツチヘンの傍に近づいた。

グレツチヘンは悲しげな顏付をして、眼には涙さへためてゐた。

「どうしたの？」
とクリステイヌは訊ねた。
「お嬢さま、ねえ。」とグレッチヘンは聲を塞らせて、「あなた、あの牝鹿を御存じでゐらつしやいませう、森で私が見付けた、お母さんの無い、私が子供のやうにして育てゝやつてゐた、あれがどこへか行つてしまひましたの……歸つて參りませんの……」
「まあ、然し心配しない方がいゝわ。きつと歸つて來ることよ。」とクリステイヌはやさしく慰めて、
「グレッチヘン、あの、明日の朝ね、六時から七時の間にね、私あなたとお話したいことがございますのよ。」
「私もお話がございますわ。」とグレッチヘンは答へた。「あの、一昨日から今日にかけて、草や樹はいろ〳〵のことを私に話してきかせましたのよ。あなた様のことに就いて……」
「さう、ぢや、丁度よかつたのね。」
「では、もしお宜しかつたら、あの谷のところへ來て下さいまし。」
「いえ、お城址のところにしませうよ。」
「では、あそこでお待ちしてますわ。」

「ぢや、明日ね、間違ひなく。」
クリステイヌはグレッチヘンと別れて歩みを返さうとして振向くと、サミエルの姿がすぐ近くにあるのを見て驚いた。彼は二跳び位で彼女の傍に近づき。
「さあ、お降りなさい。腕をお貸しゝませう。」
彼女は氣壓されて、何とも答へることが出來なかつた。

一九、草木は何を語つたか

次の朝、五時半が打つか打たないのに、サミエルはもうすつかり狩獵に行く支度を整へ、獵銃を肩にしてジュリアスの部屋へやつて來た。
「やあ、君は無窮の朝寢坊だね。」と彼は笑ひながら、「獵には行かんつもりなのかい？」
「君は行くの？」
「勿論さ。そのために銃を擔いで來たんぢやないか。ありとあらゆる獲物を、唯の一つでも遁がさないために。——おい、君はまた眠つてしまうね。行かないのかね。もし行くんなら待つてゝやるから支度をし給へ。」

「いや。」とジュリアスは答へた。「僕は今朝は行かないことにしようよ。」
「どうして？」
「親父に手紙を書かなけりやならないんだ。」
「またか！　よくそんなに書くことがあるね。」
「うむ、少しばかり要件があるんだ。」
「さうか、せい〳〵書きたまへ、では僕は行つて來るよ。」
「澤山打つて來るやうに……」
「失敬――」
サミエルが去るとジュリアスも床から起き上つた。
だが、サミエルがそんなに早起きしたにも拘らず、クリスティヌはもつと早く起きてゐたのだ。青年が朝露に濡れた草を履んで山に向つて行つた頃には、彼女はもう一人の村の若者と一しよにエベルバツクの廢墟でグレツチヘンと遇つてゐたのだ。
クリスティヌは父からの言ひ付けで、昨日のつゞきの話を持ち出した。正直な一人の若者が、彼女を妻にと望んでゐるといふこと、その若い百姓男はランデツク中での働き者で、名はゴツト●ローブ、

そして彼女を心から愛してゐて、どうにかして妻に貰ひ受けることは出來まいかといふことを願つてゐるといふこと――そして當のゴツト●ローブといふのはこの人だといつて彼女は一人の頑丈な若者をグレツチヘンに紹介した。
グレツチヘンはそれを聞いて、やはり昨日と同じやうに拒絶した。
「ぢや、あなたはほんとにそれでいゝの？」とクリスティヌは云つた。「哀れなゴツト●ローブはどんなに悲しむでせう。」
「あなたはどうしても拒絶するんだね。私を侮辱するつもりなんだね。」
とゴツト●ローブも云つた。
「いえ、私、あなたを侮辱なんかしやしないわ。」とグレツチヘンはゴツト●ローブに向つて云つた。「それどころですか、私、あなたにすまないと思つてゐるのですのに……あなたは、こんな不束な財産も何も持つてゐない山羊飼娘なんか貰はうとなさるのがいけないのですわ。あなたにはもつと適當した村の娘さんが何人でもあります。私は身分の賤しいジプシイ娘です。家もなければ何もない。だが、私には私だけの考へがあるのです。根の無い樹には花も實もありません。どうか私をこのまゝここにゐさせて下さいまし。」

「それはさうでせうけど、ねえグレッチヘン。」とクリテスイヌは云つた。「あなたの今のお心持はそれでいゝかも分りませんけれど、あとでそれを悔むやうなことは無くつて？」

「いえ、お嬢さま。あなたのおつしやることは分らないことはございませんわ。ですが、私は生れつき人と違つてゐるのでございます。かうして森の中に生き、そして死んで行くのが、私の持つて生れた運命なのです。」

「いや、グレッチヘン。そんな七むづかしいこと云はねえで、いつそのこと、俺のことが憎らしいんだと一口に云つてしまつたら如何なんだい。俺のことなんか厭でたまらねえんだと……」とゴット。ローブはもう堪らなさうに云ひ出した。

「お嬢さま、行きませう。こんなところに一刻も居るのは身の恥ですから。」

ゴット・ローブはぐるりと背を向けて歩き出さうとした。

「そんなことするもんぢやありませんわ。ゴットローブ。」とグレッチヘンはひき止めた。「あなたは私を誤解してらつしやいますわ。よくお聞き下さい。たとへ私があなたの妻となつて、同じ村に歸り屋根の下で生活するものと假定しましても、とても〳〵私にはそんなこと堪へられないのです。あなたの云ふことを聞くわけにはまゐりませんし、また、妻としての義務を盡すわけにも參らない私なの

です。あなたは正直な、立派な働き手でございます。そのあなたを苦しめ、惱ます役にしか私は立たないのです。その邊をよくお考へ下さらなくてはいけませんわ。ねえ、そしてこれから兄妹として私を考へて下さいませ。」

ゴット・ローブは何か云はうとしたが、思ふやうに言葉になつて出て來ないのか如何か、グレッチヘンの差し出す手を押しのけて、そのまゝよろめくやうに去つてしまつた。

ゴット・ローブが去つたあと、クリステイヌはもう一度同じことをグレッチヘンに頼むやうな調子で云つて見たが、グレッチヘンの答はやはり同じことであつた。

「こんどはあなた様のことに就いてのお話ですわ。」とグレッチヘンは云ひ出した。

クリステイヌは笑ひながら

「あの牝鹿は歸つて來まして？」

「いゝえ、お嬢さま——歸つて參りませんの。」彼女は悲しげに答へた。「私、昨夜一晩中あれを呼びつゞけてゐましたの——でも駄目でしたわ。あれが逃げましたのは、今度がはじめてゞはございませんの、ですけれど、いつもひとりで歸つて來ましたの。こんなに長く歸つて來ないやうなことはありませんでしたわ。」

「ぢや、きつと今に歸るでせう。」
「さあ、でも私、何となく心配で〳〵ならないの。これ切り歸つて來ないやうな氣がして……山羊なんかと違つて牝鹿は生れつき野生的で。そして人の顏色なんかよく讀みますわ。それになか〳〵氣儘ですの、私見たやうに。あれは私によく似てゐますわ、さう云へば……私どんなにあれが好きでせうどんなに——」
グレッチヘンは急に跳び上つて顚へ出した。
「まあ、どうしたの？」
とクリステイヌは驚いて叫んだ。
「聞きませんでして？」
「何を？」
「鐵砲の音！」
「いゝえ。」
「たしかに鐵砲が——私のこの胸が打れたやうに、おゝ、きつと牝鹿が打たれたに相違ないわ。」
「まあ、どうかしたのぢやない？　グレッチヘン。靜かにしてなくちやいけませんわ。そして私のこ

とに就いてのお話といふのを承りませうよ。」
グレッチヘンはそれを聞いて、どうやら胸のさわぎを取りしづめたやうであつた。彼女は草の上に坐つた。そしてなつかしげに、やさしい眼付に返つて、クリステイヌを眺めはじめた。
「え、え、さあ始めませう。」と彼女は云つた。「私、毎日草花とあなた樣のことについてお話してゐましたの。」
「お話し下さいな。」クリステイヌも坐つて、「どんなことを草花は聞かせしましたの？」
「かうなんですの。」とグレッチヘンは顏を輝かしながら、「草花は何といふ奇妙なものなんでせう。そして何といふ不思議なことを私達人間に語つて聞かせるのでせう。草花の言葉と申しますのは、そりや古い〳〵言葉で、ずつと昔、東洋から來たのださうですわ、そりや單純で、そして意味深長なのです。私のお母さまから私はそれを讀み聞くことを敎りましたの。お母さまは私の祖母さまから……あなた、お信じなすつて？　信じなけりやいけませんわ。あなたは。あのジュリアスさんを愛しなすつてらつしやると云ふことを花は申しましたの。」
「いえ、それは間違つてゐてよ。」
とクリステイヌはすぐに打ち消した。

「お信じにならないの？」とグレッチヘンはつゞけて、「それは眞實なのですもの――そしてジュリアスさんはあなたを愛してらつしやるつて。」

「まあ、それは本當？」とクリステイヌは答へて、「私、信じたいわ、何んなら相談して見ませうか。」

「御冗談ぢやありませんのよ。何もそんなことなさる必要はありませんわ。」

さう云つて彼女は足元の花束を指差した。

が、クリステイヌは、更に、

「こないだあなたは、あの學生さん達が私に不幸なことを持ち來たしたとか申しましたわね、あれはどんな意味だつたの？」

「これからお話しようと思つてゐるのもそのことなのですわ。」

「それで……」

「御覽なさいな。」とグレッチヘンは足元の草花の一束を示しながら、「私は今朝ほど、これだけ花を集めましたの、もう一度こないだお話したことについて聞いて見ようと思ひまして。すると、今朝もまた、こないだ二度も三度も話して聞かせてくれたと同じことを話してくれましたの。」

「それは如何いふことなの？」

「あなた御自身でお聽き下さい。」

さう云つて立ち上り、彼女は花束を苔の生えた石の上にばらまき、ある不思議な手附でそこへ一つ〳〵へ一つといふやうに配置した。それから彼女は花の上に凝つと眼を据ゑ、無我の境に入つた。暫らくさうしてゐたと思ふと、嚴とした調子の言葉が彼女の唇から洩れはじめた。

「花は彼女の語ることを了解し能ふ人にあらゆる神秘を語る。人が文字によつて思想を交換するが如くに――神の文字は自然なり、神の御旨（みむね）は植物に書さる。然しながら、之を讀むことを知らざるべからず、わが母は之を妾に教へたり。」

彼女は更に嚴として、

「植物は思はぬ瞬間にその神秘を語る。今やその瞬間なり、哀れなるかの娘、彼女は既に彼を愛してあり。」

「然し。」とクリステイヌは口を挾んだ。「それは間違つてゐますわ。」

グレッチヘンはそんなことには關はずにつゞけた。

「そして彼、ジュリアス、彼は如何に彼女を愛し居るや――クリステイヌ嬢を――」

「そんなことをどの花が云ふの？」とクリステイヌは花をのぞき込んだ。「その紅紫の花なの！」

グレッチヘンは、然しつゞけて、
「彼等は若かし、然して相愛し居れり、彼等は善し、然しながら幸福にてはあるまじ。そこに驚くべきことの發生を見るならん。」
「まあ、どんなことが？」
クリステイヌは不安さうに訊ねた。
「彼等は恐らく容易く、結び付けらるゝならん。然しながら直ちに分離せらるゝならん。その分離は死にあらず。相愛の仲にての永年の別離なり。」
そこまで行つてグレッチヘンは俄かに止めた。花の上に蔭影が射して來たからである。
クリステイヌとグレッチヘンは、ぎよつとして振向いた。
そこには狩獵姿のサミエルが立つてゐた。
サミエルはクリステイヌを見つめながら、驚いたやうな顔をして立つてゐた。
「お許し下さい。お妨げして……」と彼はやがて云つた。「僕、道に迷つてしまつたんです。幸ひグレッチヘンの小舍が見付かつたものですから、道を教へて貰はうと思つてやつて來たんです。――まあ、何をしてゐるんですか？　僕は今森ん中で一つ獲物を撃ちとめて來たところなのです。」

グレッチヘンは肩をふるはせた。
サミエルはつゞけて、
「撃つたはいゝが、何んでも地獄谷の邊で姿を見失つてしまつたんですよ。グレッチヘン、あなた一つ見付てくれませんか、きつと谷の近所で死んでゐるに違ひありませんから。」
「牝鹿？」
とグレッチヘンは顫へる聲で訊ねた。
「白い、灰色の斑點のある――」
「ね、私さう云つたでせう。」
とグレッチヘンはクリステイヌに云つて、飛ぶやうに駈け出して行つた。
サミエルは驚いてその後姿を見てゐたが、ひとり口の中で呟いた。
「クリステイヌと『二人切り』になることが思つたよりは早く運んだ。」

二〇、傷いた牝鹿

グレッチヘンが駈け出すと、クリステイヌもそのあとを追はうとした。

「……あなた、ちよつとお話がありますから——」
と云つてサミエルは彼女を引き止めた。
「私に——？」
「えゝ、さうです。あなたに——」とサミエルは繰り返して、「卒直にお聞きしますから、悪く思はないで下さい。ねち〳〵として遠廻しのことの嫌ひな僕のことですから。——實は昨日からお聞きしようと〳〵と思つてゐたことなのですが、あなたが僕を嫌ひ憎んでゐることは本當なのですか。」
クリステイヌは眞赤になつた。
「どうぞ躊躇しないでお答へ下さい。」
と彼はつゞけた。
「僕の感情を害するかと思つて、心にもないことは云つて貰ひたくないのです。本當のことを云つて下さい。あなたのお心の眞實を——」
クリステイヌは恐る〳〵慄へる聲で答へた。
「あなたは私の家のお客様でございます。そのあなたに對して私が何も厭だとか嫌ひだとかいふ感情を持つわけがございませんぢやありませんか。そればかりではございません、私は何誰様に對しても

そんな感情は持ちたくないと考へてゐるのですもの——」
サミエルの鋭い、突き透すやうな眼光は、彼女がおづ〳〵と伏眼になつてものを云つてゐる間、ちつとも彼女の顔から去らなかつた。
彼は云つた。
「僕は只今のあなたのお言葉を聞いてはゐませんでした。たゞお顔を伺つてゐました。その方が、どれ丈けあなたの眞實が分るか知れないのです。——ほんとにあなたが僕を憎み嫌つてゐないものとしても、少くとも好きでも無いでせうね。どうか、僕の感情や機嫌などに遠慮しないで下さい。さうされると却つてよけいに僕は氣持の悪くなる性なんですから——」
「……」
「そればかりでなく、もしあなたが僕を嫌つて下さるなら、寧ろ死ぬほど嫌ひ憎んで頂きたい。あなたは僕のやうな人間にとつては、あまりに美しく、あまりに可愛いのです。あまりに刺戟的なのです。たゞ默つて放棄しては置けないのです。あなたは御自身では何とでも云へるでせうが、私から云はすれば、その美と無邪氣と純なお心で僕に挑戦して來てゐるのです。さうされて默つてゐられる僕でせうか。僕は潔くその挑戦狀を受け納れなければならないのです。」

「まあ、どうしてそんなことを仰有るのでせうか……」
「あなたのすべてが僕をしてさう云はせるのです。いや、あなたが云つてゐるも同然なのです。特にあの地獄谷のところであなたのおつしやつたこと――そればかりではない。あなたはお心の中で、ジュリアスと僕と、どちらかを選ばうとなすつたことはなかつたか。それを拒むことが出來ますか。あなたは僕と僕の友人との間にあなた御自身を置いてしまつたのです。あなたは僕のものになるか、彼のものになるか、どちらかのものにならなくてはならない。運命です。勿論惡い廻り合せです。さうだ。僕は或は惡魔かも知れない。あなたは天使です。古い傳説の戯曲も、惡魔と天使とから成り立つてゐるやうに、吾々は好い取組なのです。――あなたはジュリアスを愛してゐるかも知れない。そして僕を憎んでゐるでせう。然しそれでいゝのです。然も僕はそれ以外のものを望まないのかも分らないのです。ねえ、さうでせう。あなたは僕を憎み、ジュリアスを愛してゐるでせう。」
クリステイヌは答へなかつた。だが、突立つたまゝ、默々として、自分自身を呪ふかのやうに――
サミエルはつゞけた。
「さうだ。僕はジュリアスに先廻りしてあなたに對する愛を表明するかも知れない。あなた方はお互ひに愛を誓ひましたか、恐らく未だでせう。彼れジュリアスはまだ大びらに自分の心を打ち明けることは出來ないでゐるでせう。勿論、彼は善良な正直な青年です。だが決斷力に乏しい。――クリステイヌ、僕はこゝで彼の先を越して告白します。お聞き下さい。――あなたは僕を憎んでゐる。だが僕はあなたを愛してゐる。死ぬほど愛してゐる!!」
「それはあんまりですわ。」
とクリステイヌは堪へられぬやうに身悶へして答へた。
サミエルはクリステイヌの怒りを注意しようともしなかつた。云ふだけのことを云つてしまふと、グレッチヘンがばらまいたまゝにして飛んで行つたいろ〳〵の草花を眺めはじめた。
「あの時、僕が來た時、あなた方は何をなすつてゐらしたの?」
と云つて彼は獨り呑み込みに、
「あゝ、つまり何んですか。これらの草花で占ひをなすつてゐらしたんですね。占ひの結果を僕がつて見ませうか。僕の今あなたに云つたことの答として、もしあなたが僕を滿足せしめなかつた場合には、花はきつとあなたの不幸を豫言したでせう。その反對に僕を滿足せしむるやうな返答をしたには、花はきつとあなたの未來を幸福なものと豫言したでせう。」
クリステイヌは肩をゆすぶつた。

「お〻――」と彼女は云ひ出した。「もしさう豫言しましたとしたなら、私はそれを信じません。私はさうお答へすることを恐れてゐるのですもの、あなたの期待なすつてゐるやうにお答へすることを――」

「あなたはまだ僕のことをよく知らないんでせう。僕はあなたが、あゝ云つたならきつと僕を本當に考へて下さることゝ思つてゐました。それに、それに、如何でせう。その反對に――」

「私、あなたのことは分りませんわ。」

「然しすぐに了解するでせう。恐らくはすぐに、吾々が死の淵に臨んでから、或はそれ以前に、或は死の國へ行つてから……」

クリステイヌは怒りと恐怖とに打ちふるへた。彼女は叫んだ。

「あゝ、あなたは、あなたはわざとグレッチヘンをあちらへ追ひやつてしまつて、そして私一人殘して、そして私を侮辱し、脅迫しようとなすつてらつしやるのでせう。私はあなたの手中のものですもの、こゝでは、今の場合は――あなたには、鐵砲もあります、力强い腕もあります。だが、私は恐れません。何を恐れるものですか。あなたは私の道を妨げることは出來ないのです。私はこれからすぐに行つて何もかも、あなたのなさらうとしたことをすつかりお父さまに話します。そしてあなたを私の

家から追ひ拂つて上げます。それからあなたのお友達にも云ひつけて、何もかも……」

彼女は云ひ終らないうちに起ち上つて、飛ぶやうに彼の傍をはなれようとした。サミエルはそれを引き止めるかはりに單純に云つた。

「さうしなさい。」

クリステイヌは立ち上つた。そして驚いて、意外の面持(おもも)でサミエルを眺めた。

「宜しいですとも、云ひつけようと如何しようと、あなたのいゝやうになさい。」

と彼はつゞけて云つた。

「あなたは僕の云ふことが少しも分つてゐないのですね。分らない人なら分らなくてもいゝのです。子供、子供!!」

と彼は變な調子で云つて、

「だが、いつかあなたはこの僕の言つたことをそれと了解する折りがあるでせう。あたたが、もしどうしてもお父さまかジュリアスにこのことを云ふといふなら僕は止めはしません、けれどもそのあとで、どんなことになつても僕はもう知りままんよ。あなたは自分で自分をそんなところに陷入れたのですから。」

「どうしてなの？」
と彼女は素直に訊ねた。
「よくお考へ下さい。こないだの、ジュリアスと僕との會話にあつたぢやありませんか。『その決闘は恐らく双方の死でも勝負はつくまい。』つて……」
クリステイヌは眼を顔一ぱいにしてサミエルを見つめた。
「私、誰にも云ひはしません。」とやがて彼女は答へた。「お父さまにもジュリアスにも決して云ひはしません。私一人の胸におさめて置きますわ。——あゝ、あなたはどうしてかうも私の上に變に力強い或物を持つてゐるのでせう。私はあの日、初めて私の宅へお出で下すつた次の朝、あなたを一眼見て感じてしまいましたの——打ち勝ち難い敵意を——何となしに悪い心を持つた方のやうに——然しそれは決して憎悪ではありません。」
ちらとサミエルの眼は怒りに光つた。けれども次の瞬間にはもう平常のやうに還つてゐた。
「よく云つて下さいました。」と彼は落付いた口調で云つた。「僕をしてすべてのことをたゞ二た言のうちに約めて云はして下さい。第一に、あなたは、ジュリアスへの胸と心を僕に持つてゐて欲しかつた。然しそれは今更出來ないことだ。——第二に、あなたは僕を嫌ひ、僕はあなたを愛してゐる。そ

して僕はあなたを僕のものにするだらう。それは當然……あッ、然しグレッチヘンが歸つて來てしまつた。」
實際、グレッチヘンは靜かに、傷いた牡鹿を抱いて歸つて來た。そして注意深く岩の上に腰を下ろし、膝の上に乗せた獸の上に涙ぐましい眼をそゝいでゐた。
サミエルは近づいて行つて、牡鹿を見ながら云つた。
「なアんのこつた。足一本折つたゞけだつたか。」
グレッチヘンは愛する獸を敵から保護するもの丶やうに抱きしめて、サミエルに怒責の眼を浴びせかけた。
「あなたは悪魔ですわ。」
と彼女は云つた。
「あなたは天使です。」とサミエルは答へ返した。「あなたも僕を憎んでゐる。ところが僕はあなたのことも愛してゐる。お丶、同時に二人の愛する人を持つことの、僕の誇りが分りますか。曾て僕は大學で、二人の敵と同時に決闘したことがあつたのです。そして僕は擦過傷一つ受けないで、二人の敵を打ち負かしたのです。——では、左様なら……僕の仇敵!!」

彼は鐵砲を肩にして山宅の方へ行つてしまつた。

「ねえ、お嬢さま。私さう云つたでせう。」とグレッチヘンは後姿を見守りながら云つた。「あの方は私達にとつて運命的の方だつて……」

二、敵對のはじめ

ジュリアスは手紙を書いてしまふと、着物を着換へて庭に出て行つた。

彼はそこで牧師と出遇つた。ジュリアスはつか〳〵と近づいて行つて手を握り、朝の挨拶をした。

「あなたは狩獵(かり)には行きなさらなかつたのでしたか、お友達と――？」

「えゝ。」と彼は答へた。「僕はちよつと手紙を書かなけりやならなかつたもんですから。」

それから附け加へて、

「僕の生涯にとつて非常に重大なことに關して。」

彼はさう云ひながら、ポケットから手紙を出して見せた。

「僕は父に質問したのです。そしてその答をもう待ち遠しく思つてゐる位なのです。一刻も早く出したいのですが、如何したらいゝか、僕には樣子が分らないのです。僕が自分で行つて來れば勿論それ

に越した事はないのですが、それも出來ませんし、誰かこの村で使ひをして呉れるやうな者はないでせうか。フランクフルトへ行つて貰へばいゝのです。そして返事を持つて來てくれゝば……草鞋賃は幾何でも出しますが……」

「そりや何でもごわせんよ。」と牧師は答へた。「郵便配達の倅(せがれ)が居りますよ。あれなら何でもしてくれます。道もよく知つてゐて、もう直き親爺の跡目つぎをするわけになつてゐるんだが……あれにお賴みなさい。なに、少しもやれば喜んで行つて呉れますよ。」

「おゝ、さうですか、それは幸ひでした。では早速賴みませう。」

ジュリアスは實際よろこんだ。

牧師はジュリアスの手から手紙を受け取り、下僕を呼んで、村まで一と走りさせようとして、

「……だが 村までは五分間もあつたら行けるんですから、あなた御自身で行つてお賴みしては如何ですかな。下僕を附けて案内させますから、その方がすべて確かに運ぶでせうよ。」

云ひつゝ器械的に牧師は手紙の宛名に眼をそゝいだ。

「え、ヘルムリンフイルド男爵――」と彼は深い驚愕の聲で云つて、ジュリアスの方を振向き、

「これはあなたのお父さんのお名前ですか？」

「さうです。」

とジュリアスは無雜作に答へた。

「あなたは男爵フオン・ヘルムリフインルド氏の御子息!!あゝ、俺のやうな一田舍牧師が、外國へまでも名の聞こえてゐる、あの有名なお方の子息さんをこの見すぼらしい家に招待して居ようとは――あゝ、さうでしたか。俺はあなた樣を御招待してゐることを誇りとしなければなりません。どうして今まであなたはお名前を告げて下さらなかつたのでごわすか。」

「如何してつて理由もありませんでしたが、自然とかうなつてしまつてゐたんです。サミエルも僕も――業々しくすることを望まないものですから――たゞ學生として……」

「それはさうと、男爵のお名前を耳にしますと、俺にも思ひ出すことがごわすよ。あなた樣とお知己になつたことが、どんなに俺をうれしがらせてゐるか。何んでごわすよ。あなたのお父さんのことに就きましては、いつも親しくしてゐますオツトフライド牧師とお話してゐますんですよ。オツトフライド牧師はあなたのお父さんの教へ子でしてね。」

その會話は、サミエルが歸つて來たのでそのまゝ一時打ち切らねばならなかつた。

「如何だつた。うまく獲物があつたかね。」

とジュリアスはたづねた。

「いや、一向ものにならなかつた。」と云つて彼は笑ひながら、「だがね、一つ獸巢を發見して來たよ。あいつを一つ物にしてやらなくちあ――」

クリステイヌもサミエルと前後して歸つて來てゐた。

前日の夕方、ジュリアスとサミエルとは朝食後にお暇するといふことを告げて置いたのであつた。彼等はその朝食のテーブルについた。牧師はジュリアスから知つた彼の父親のことで、更にジュリアスを叮嚀に振舞つた。

朝食がすむと、牧師は懇篤な調子でジュリアスに話しかけた。

「あなた、なんでごわすな昨夜の、御豫定を變更してもう一日御滯在なすつては如何でごわせうな。そのお手紙の御返事が來るまで……」

ジュリアスは默つてゐた。が、サミエルにはその顏付が何を語つてゐるか、略ぼ見當がついてゐた。

「僕だけはどうしてもお暇することにしなけりやならんのです。」と彼は云つた。

「かうして御厄介になつたり、獵に出たりして遊んでゐるのは、この上もない愉快なことなんですけれども、學校の方もあるし、それに他に約束して來たこともありますから――」

「如何しようかな、僕は？」
とジュリアスは呟いた。
「君は君のいゝやうにしたまへ。だが、君も約束は忘れないだらうね。」
クリステイヌは刻から默つて人々の云ふことを聞いてゐたが、そこへ口を挿んで云つた。
「あのどんなお約束があるのか分りませんが、そのお約束が是非今日か明日でなければならないと云ふんでなかつたら、もう一日やそこいら宜しいぢやございませんか。」
「さうですとも——急な御用でないんなら。」
と牧師も附け加へた。
「あゝ、來るべきものはもう來た。——敵對の最初——」とサミエルは輕く笑ひながら呻くやうに云つた。それはクリステイヌにのみ聞こえるやうに、また彼女にのみ了解されることを豫期して。
「本當に——」
とクリステイヌは受けて云つた。自分のしてゐること、ジュリアスを引きとめ、サミエルを歸さうとしてゐることが、心ならずもさうなつてしまひ、そしてそれをそれとも知らずに云つてゐる自分の言葉や行爲の何んであるかを判然と知ると、彼女は恐ろしいことを今自分がしてゐるのだといふ意識の

前に身慄ひを禁じ得なかつた。
「用といふのは別のことでもありませんが。」とサミエルは牧師に答へるやうな調子で云ひ出した。だが、そこで言葉を切つて、ジュリアスに向ひ、「とにかく土曜か日曜にはツーゲブントの大會があるもあるだらうから、僕は敢て無理に歸つた方がいゝとは云はないがね。」
「そもさうだね。」
ジュリアスは考へながらテーブルに俯いてゐた。
「え、大會がごわすのですか。」
と牧師は意外なことを聞くものだといつたやうな調子で口を挾んだ。
「それもさうだね。」
とジュリアスはやがて頭を上げて、如何しようかとまだ迷ひながら云つた。
サミエルは皆の顏を一とわたり見渡した。
「ですけれども、その大會とかも。」とクリステイヌは少し慄へ聲で、もうかうなつては勢に任せるより外はないと云つたやうに、「まだ今日、明日と迫つてゐるわけでも無いんでせう。」
「うむ、さう、さう。」

と牧師が賛意を表した。
「とにかくその大會に間にあひさへすればいゝんでせう。サミエルさんだけに歸つて頂くのも何んだかをかしいにはをかしいが――でも――それに何んですわ、あなたが昨日エベルバックのお城址で私におたづね下すつたこと、もし、もう一日でもお滯在下されば、あれにお答へしますわ。」
「あゝ、さうでした。僕は滯在します。」
とジュリアスは遂に明言した。
「大出來！ではさうして頂きませうわい。」
と牧師も顏をくづした。
「さう來るだらうと見當はついてゐたんだよ。」とサミエルは皮肉さうに、「で、君は何日歸るね。」
「明日――多分、でなければ、明後日になるかも知れない。親父から手紙の返事が來てからにする。返事は何日着きませうね。シライベルさん。」
「さあ、明日は勿論――」と答へて、牧師はサミエルに向ひ、
「あなたは、では如何あつてもお歸りでごわすか。」
「えゝ、僕はお暇します。」とサミエルは答へた。「僕は一旦かうと決したら飽くまでも遂行する性質

ですから。」
クリステイヌは、その突き刺されるやうな言葉の持つ意味の前に慄へないではゐられなかつた、然し彼女はすぐに救はれた。馬が來た。彼女は云つた。
「あ、馬が參りましたわ。」
ジュリアスとサミエルの乘馬は、すつかり支度されて門のところまで牽き出された。
「あのね、ジュリアスさんのお馬は要らないことになつたの。」
とクリステイヌは下僕に云つた。
サミエルは暇を告げて、ひらりと馬に跨つた。
「では。」牧師は云つた。「またの日曜には是非いらして下さい。待つてをりますぞ。」
「有り難う、お邪魔に上ります。」
サミエルは答へてから、ジュリアスに向つて、
「ジュリアス、ぢや明日歸つて來いよ。大會を忘れちやいかんよ。君も愛國の士なら――」
クリステイヌと牧師に挨拶すると、サミエルは拍車をあてゝ駈け出した。そして飛ぶやうに、やがて見えなくなつてしまつた。

ジュリアスの手紙は使ひのものに渡された。

「明日の午前中返事を持つて來てくれゝば、これだけお禮する。」とジュリアスは指で金高を示して、

「さあ、前金として、これをやる。」

使者は眼を丸くして突立つてゐたが、やがてにこ〳〵しながら出發した。

二二、ツーゲンブント

火曜日の夕方になつても、ジュリアスはまだハイデルベルヒへは歸らなかつた。サミエルは獨り微笑んでゐた。それと豫期してゐたことが的中したのだ。

水曜日は過ぎ、木曜日もとう〳〵暮れてしまつた。それでもジュリアスは歸つて來なかつた。サミエルは仕事に沒頭してゐたので、別に注意もしないでゐた。

だが、金曜日になると、ちよつと氣になり出した。彼はペンを取つて書いた。

――親愛なるジュリアス

君は何を何時まで愚圖々々してゐるのだ。明日を忘れたんぢやあるまいね、まさか。義務と愛!!

それが、どちらを先きにしなければならないかといふことは君の判斷に任するが……　サミエル

「これで歸らなかつたら如何かしてゐるぞ。」と彼は呟いた。

土曜日一ぱい彼は待つても〳〵ジュリアスが歸つて來ないものとは豫期することも出來なかつた。

ツーゲンブントの大會は夜半に迫つてゐるのではないか。

日中、彼は傷いて寢床に横つてゐるオットーとフランツのことを見に行つた。醫者は豫め心得てゐるので、勿論、二人の負傷者はもう四五日は起きることを許されなかつた。

夕方になつて、彼は癖になつてしまつてゐる散歩に出て行つた。ランデック街道へ――若しかすると、ジュリアスの歸途に出遇ひでもするかと思つて。

だが、岐路になつてゐるあたりまで、歩いて行つても、ジュリアスは影さへも見せなかつた。

彼は宿へ歸つた。

「ジュリアスは歸つてゐるか。」

と彼はたづねて見た。

「いゝえ、まだお見えになりませんでございます。」

と宿のものは答へた。

「さては奴さん、ひとりでうまくやつてゐるといふわけかな。」

と彼は呟いた。そして、

「よし!! そんならそれでよし。聖書にも『愛は死の如く強し』とある。僕の方にも覺悟はあるぞ。」

九時が過ぎ、十時が過ぎ、いつか十時半は過ぎたが、ジュリアスの姿は見えなかつた。

十一時になるとサミエルは望みを棄てゝしまつて、獨りで出發する準備をゝはじめた。

帽子を取り、部屋を出ようとすると、廊下をこちらへ近づいて來る性急な足音を耳にした。殆んど同時に扉は叩かれた。

「あゝ歸つたか、丁度よい。」

扉はあいた。

然し、それはジュリアスではなかつた。下僕が現れた。

「なんだ。」

とサミエルは鋭くたづねた。

「あの、レブジックから來なすつた學生さんが、あなた樣にお會ひしたいと申されますが。」

「いかん。時間が無い。」とサミエルは叫んだ。「明日來いつて云へ。」

「あの、さうは出來ないんだからと申されてゐますので、旅の方で、是非今日お目にかゝらねばならないことがございますとかで……」

旅の人と聞いて、サミエルの顏は變つた。

「さうか、ではよし。」

と彼は云つた。

召使が出て行くと、すぐに、その學生が部屋に入つて來て、扉をぴしりと締め切つた。

彼はサミエルの手を握り、それから一種妙な身振でサミエルに近づき、胸衣をあけてメダルを示した。

サミエルはうなづいた。

「で、御用は?」

彼は簡單にたづねた。

「黨の命令です。今夜の集會は取り止めです。」

「本當に?。」とサミエルは念を押した。「如何した理由で?」

「理由は存じませんが、延期です。また改めて召集するさうです。」

「では何日、その通告は?」

「明日の正午。」
「然しそんなわけはない。――と思ふがね。夕方僕は散歩の途中、例の場所の方へ行く人を見かけたんだ。帽子を深く被つて。――僕の觀察にして間違ひなくんば、彼はきつと黨の幹部に違ひない。あれは如何したといふんだらう。さうとすれば……？」
「僕はそんなことは知りません。たゞ僕は、あなたにさうお傳へに來たのですから。これでお暇します。」
「だが、僕はとにかく一應行つて見ることにしよう。」
とサミエルは云つた。
「いや、それはさうなさらん方が宜しいです。」と學生は答へた。「僕は忠告します。警戒が嚴しいですから、もしかして捕へられて二十年も牢獄に打込まれますと、切角のあなたの生涯がめつちやくになつてしまひますよ。」
サミエルは呵々と笑つた。
「いや、御苦勞でした。兄弟。」
で、彼は扉口まで旅人を送つて行つた。

部屋へ歸つて時計を見ると、十一時半であつた。
「さあ、かうしちや居られん。」
と彼は獨語した。そして帽子を彼り、握り太のステツキを携へ、二挺のピストルをポケツトに突込んで、部屋を出て行つた。
最初に彼は前の通り埠頭への道をとつた。だが、途中でネツカー河の堤に登り、それから古城址の裏の方へ廻る道を行つた。
四五百歩、危げな暗い道を辿つて行つてから、彼は立ち停つた。そしてあたりに誰か居はしまいかと疑ふものゝやうに闇の中を注意深く覗つて見た。誰も居ないことが確になると、彼は苔に蔽はれた高い、崩れかゝつた外壁を攀ぢ上つた。
外壁の上にしやがんで、彼はこの前、假面の人々と對談したところがどの邊になるかを心の中で量つて見た。
「あゝたしか彼處だな。」
と彼は呟いて、外壁の内側に下り、藪のやうなところを分けて、内壁に到ると、生えまつはつてる蔓にすがつて難なく内壁も飛び越し、それから崩れた壁や巨大な石材などの上を越し、穴倉のやうに

なつてゐる坑道を降りて見ると、果して以前の假面の人のゐたところへ出ることが出來た。

だが、彼が豫期して來たツーゲンブントの幹部の姿は何處にも見出すことは出來なかつた。永遠の墳墓のやうに靜まり返つてゐる。不思議な穴倉は、太古以來見棄てられて永劫に人の足跡を絶つたところのやうに淋しかつた。

「こんな筈はない。」

と思ひながら、サミエルはあたりを探し廻つた。暗夜の中に、夜鳥の叫びを人の聲かと怪しんでは立ち止り、自分と自分の足音に驚ろかされてはあたりを窺ひながら。

然しながら廢墟は死んだものゝやうにしづまり返つて、求むるものゝ影さへなかつた。

彼は思ひあきらめたものゝやうに、苔の生えた柱石の蔭に佇んだ。

さうしてものゝ三十分間も探して、思ひあきらめて歸つでしまはふかとまでしたりしながら歩き廻つてゐると、ふと彼はちら〳〵とゆらめく火の光りを認めた。

彼は躍り立つやうにしてその方へ近づいて行つた。暗夜に馴れた彼の眼は、敏速にも砲眼のかげに隱くれて、何をか話してゐるらしい三人の假面の人を認めた。

彼は近く寄つて行つて物蔭に立止り、そして呼吸を抑へながらじつと聞耳を聳てた。が、何も聞こ

えなかつた。窺つてゐると、彼等の身振はたしかに話し合つてゐるに相違ないのではあるが。

サミエルは尙も近よつて耳をたてたが、やはり何も聞くことは出來なかつた。

突然、彼は決心した。

「僕です。」と彼は大膽にも歩み近つきながら、大聲で名のつた。「サミエル・ジエルブです。」

そして彼はつか〳〵と三人の前へ進み出た。

驚き立ち上つた三人の假面人は、手に々々ピストルを取り出して、サミエルの面前につきつけた。

殆んど打たれたかと思つたサミエルは、然し叫ぶやうに極く低い嚴とした聲で云つた。

「音を立てるな、警戒が嚴しいのを知らないのですか。——そしてそれがあなた方、吾々の親友のなすべきことなのですか。僕はサミエル・ジエルブです。あなた方の味方です。だが、さうするならして御覽なさい。あなた方は僕を殺す前に、もう三人とも息の根が止つてしまつて居ますぞ。」

向けられてゐたピストルの筒口は下へ、そして引込められてしまつた。

「では僕だといふことがお分りになつたのですね。」

さう云つてサミエルも、擬してゐたピストルをポケツトへ突込んでしまつて、三人の近くへすり寄つた。

「如何して君はこゝへやつて來たのだ。」と一人の假面が云ひ出した。それはこの前、自分にくれぐ
も宜しく頼むと云つた幹部の一人の聲であることが彼にはすぐに分つた。「君は通知は受けなかつた
のかね。低聲で答へてくれたまへ。」
「承知しました。だが、御安心下さい。僕のあとには誰も隨いてゐはしませんから。それに僕がこゝ
へやつて來たことは誰も知りませんから。——通告はたしかに受け取りました。然し、大會はなくと
も、何等かの秘密會議はたしかにあることゝ僕は推察したのです。だから敢て危險を犯してやつて來
たわけなのです。その僕の推察は誤らず、あなた方とお遇ひすることが出來たわけなのです。」
「どうして君は。では、最高幹部の會議に自分から出かけて來たのですか。」
「僕は、然し何もあなた方の會議について何やかや差し出がましいことを云ひに來たのでは無いので
す。たゞ、單に僕一個の些細な援助のために來たゞけなのです？」
「それはまた如何して？」
「かうして來たことが、吾黨のために、或は規約を亂したことになるかも知れません、然しながら僕
としてはさうせずにはゐられない熱情があつたのです。」
「それが君のこゝへ來た原因なのですか。」

「勿論です。それを外にして何處に原因がありませう。あなた方は、もうとうに僕のすべてが分つて
ゐる筈ではありませんか。」
三人はそこまでたづねて行つてから、傍へ顔を集めて何かを相談してゐた。やがて、幹部の一人が
云つた。
「サミエル・ジエルブ。君は大膽なる吾々の朋友だ。僕達は君のことを依頼してゐる。君の智識と勇魂
とをよく知つてゐる。實は先日の決闘事件について、今日何か君に報いたいと思つてゐたのだ。種々
の事情で延期することになつてはゐたが、丁度いゝ期會に君は來合せた。單に言葉の上で報いるばか
りでなく、吾々は事實の上に於て、吾々の君に對する依頼を表明したいと思ふ。で、今、吾々の協議
の上、君を吾々の第二級幹部として黨のために盡力して貰ふことにする。」
「難有う。」とサミエルは答へた。「僕は誓つてあなた方の信頼に報います。」
「で、聞きたまへ。」と假面の人は話し出した。「形勢が今、非常に吾々に不利になつてしまつて來たの
だ。オツトーとフランツは吾々の相言葉をすつかり其筋のものにばらしてしまつたのだ。そのために
吾々はとても落付いて事を圖つてゐられない。加之、吾々の重要な地位を占めてゐた二三のものも、
吾々と不和になつてしまつてゐる。かうしてゐる内も、何時吾々は襲はれるか知れないのだ。」

「あゝ、で、大會も延期になつたのですね。」

サミエルは言葉を挾んだ。

「いや、もつと理由がある。」と幹部の一人が答へた。「吾々の當面の大敵、ナポレオンは今大なる勝利と赫々たる名聲の頂上にゐる。皇帝も誰も、全獨逸が擧つても如何にもならない。たゞ期會の廻つて來るのを待つより外に手段も方法も盡き果てゝゐるのだ。」

「御尤もです。然しその機會は何時來るでせう。來るまで吾々は何もせずに袖手傍觀しなければならないのですか。それは僕にはとても堪へられないことです。それまで、僕は何をしてゐればいゝでせうか。」

「爲すべきことは澤山にあります。」と幹部は云つた。「ツーゲンブントはあくまでも基礎を固くして萬一の場合、いやその機會のために備へなければならぬ。それに、既早この古城址は吾々の畫策地として不適當になつてしまつてゐる。何處か他にいゝ場所を選定しなければならない。君は何處か適當の場所に心當りはないかね。」

「さあ、と申されましても、心當りはありません。」

とサミエルは困つたやうに答へた。

「君はよく附近の地理も知つてゐる。或はさうした場所が見付かるかも知れないから、よく心掛けて置いてくれ、それが出來たら君は吾黨のために第一の援助を與へてくれることになるのだ。」

サミエルは考へてゐたが、

「心掛けて置きませう。多分見付けることが出來るでせう。然し見付かつたとしたらどうしてあなた方にそれをお知らせすることが出來るでせうか。」

「毎月十五日には、君のところへ旅人が訪ねて行くだらう。彼は吾々と君とを連絡する唯一の機關だ見付かつた時は旅人にさう云つてくれ給へ、旅人に會見の場所を君に通知さするから。」

「では、僕の方で見付けることが出來ないうち、あなた方の方で見付けた場合にも、勿論その旅人によつて通告して下さいませうね。」

「勿論です。」

サミエルは幹部の一人の合圖によつて彼等に挨拶し、そしてそこを離れた。

來た時よりは、容易く古城址を出る道が分つた。月が何時の間にか東の空に昇つてゐるのであつた。

彼は揚々とした氣持で宿へ歸つて來た。そして椅子に凭れると、ジユリアスはまだ歸つてゐないこ

とに氣付いた

「奴さん、まだ歸らんのか。」と彼は呟いた。「畜生!! 何をしてゐやがるんだ。然もこの一週間――まさにクリステイヌを占領してしまつてゐるわけでもあるまいな。僕のものと信じてゐる間に、奴さんに裏をかゝれてゐるわけではあるまいか。――然し明日は日曜だ。早速馬を飛ばして行つて、うんと取つ詰めてやらなけりやならんぞ。」

二三、牧師の家

翌くる朝、サミエルは、この前と同じ時刻に牧師の家の門を叩いた。

門は閉つてゐた。ベルを引くと、いつもの厩番が出て來て、彼の馬を受取り、それから入口の方へ導いて行つてくれた。

家には人の氣配がなかつた。

テーブルに向つて腰を下ろして待つてゐたが、誰も來る樣子がなかつた。

彼は疑ひはじめた。

と、扉が開いた。サミエルは立ち上つた。そして現れた人を見ると、彼は餘りの意外さに眼を見張

つた。それは男爵、オフン・ヘルムリンフイルド氏であつたから。

ジユリアスの父、男爵は嚴めしい、犯し難い風貌の、五十を幾つか越した、丈高い人であつた。灰白色の髪、廣い智慧的の額、深く凹んだ鋭い眼光、引き結んだ唇、それらを包んで、苦み走つた靜かな表情が人を壓するやうでもあり、また親しみも充分に持つてゐた。

「おゝ、あなたはこんなところで俺に遇はふとは思はなかつたでせう。」

と男爵はサミエルに話しかけた。

「實際のところ、些つとも思ひがけませんでした。」

とサミエルは答へた。

「お坐んなさい。――親切なシユライベル牧師は、君が今日來るといふことを俺に話されたので、君が留守のところへ來るのも何んだと思つたから、俺がお待ちしてゐたのですよ。」

「お許し下さい。僕にはちと腑に落ちないことがあるのですが。」

とサミエルは云つた。

「御尤です。只今順序を立てゝお話しませう。如何です、朝食のテーブルにお坐り下さらんがね」

「さうですか。では……」

とサミエルは答へて起ち上つた。

二人は別室に行つて、テーブルについた。お互ひに向ひ合つて。——最初、間の悪い沈默が二人の間に落ちて來た。が男爵はすぐにそれを破つた。

「さあ、何から話しはじめたらいゝのでせうか。あなたも御存じでせうね、多分——ジュリアスが前週の月曜日に俺のところへ手紙を寄來したことは——不安と愛とに滿ちた手紙でしたが……」

「えゝ、存じて居ります。お手紙を差し上げたといふことだけは。」

「その手紙でジュリアスは云つて來たのです、どうして最初にクリステイヌを見たか。そしてその時から如何云ふ心持に自分が成つてしまつたか。彼女に對する愛、彼の生活、そして夢想——彼は彼女の無邪氣さ、情深かさを語り、彼女の父のことを語り、そして自分がどんなに彼等から待遇されたゐるかを語つて來たのです。——さて、それがジュリアスとして俺に書いてよこした大意なのです。ところで俺としては、彼の愛を許し、結婚を承諾することが出來たでせうか。餘り唐突の出來事ですものね——あなたは如何思ひますか?」

「實際……」とサミエルはうなづいた。

「勿論、ジュリアスは、俺の拒絶を考慮に入れて置くことは忘れませんでした。」と男爵はつゞけた。

「彼女の生れ、社會上の地位の懸隔——だが然し、ジュリアスはさうしたことを考へないではないが自分としては愛が何よりも第一だ、愛のないところに社會も何もないといふやうな口吻で書いて來たのです。」

「はア、ジュリアスとしてはさもあることでせう。」

「使丁は俺の返事を待つてゐました。」と男爵はつゞけて、「次の日の正午までにランデツクに到着するやうにと堅くいひつかつて來たのだからと云つて。——だが、俺は何の返書も今は無いと斷つたのです。それで、明日の夕方歸着する位までの時間を待つてくれるわけには行かないかと訊ねたのです。ところが、使丁は拒絶するのです。ジュリアスから金を貰ふ約束があると云つて、で、俺は、その倍額を提供しましたよ。そしてその間に、もとの俺の生徒の、オツトフライド牧師を訪ねて行つたのですよ。」

「そこで俺は、シュライベル牧師を知つてゐるか如何かとたづねて見ました。ところが、彼等は親友の間柄だつたのです。俺はそこでシュライベル氏の人となりを聞き、クリステイヌのことを聞くことが出來たわけなのです。」

「俺はもう夜のことでしたが。」と男爵は續けて話して行つた。「すぐに驛馬車に乘つてこちらへ出か

けて來たわけなのです。そして火曜日の朝早く着くことが出來ました。俺はランデックの村中、殆んど一軒々々寄つてシュライベル牧師のことについて、また彼の娘のことについて尋ね歩いたのですよ。ところが、その答は、オットフライド牧師の言葉とそつくりそのまゝぢやありませんか。」

「わしはとう〳〵決心して門を叩いたのです。そして今俺達のゐるこの部屋で、ジュリアスと話してゐる牧師とクリスティヌとを初めて見たのでした。俺の姿を見ると、ジュリアスは叫んで飛びついて來ましたよ。」

「お父さん」つてね。

「男爵、フォン・ヘルムリンフイルド、」と云つて牧師は立ち上つて慇懃に挨拶をくれるのです。そこで俺は、

「俺がフォン・ヘルムリンフイルドです、今回はあなたの娘御、クリスティヌ嬢を伴の嫁に貰ひ受けたいと思ひましてかうして參上しましたわけなのです。」と劈頭からやつたわけなのです。いや、牧師は驚いて殆んどその事を信じないものゝやうに見えましたよ。クリスティヌはといふと、顔を眞赤に染めて、泣きながら、涙を拭はふともせずに、途方にくれてゐるらしい牧師の腕の中に顔を埋めてしまひました。」

そこへサミエルは口を出した。

「勿論、お聞きするまでもなく　それは感傷的な、可憐な情景だつたに相違ありません。然し僕は、いや僕としては、さうしたもう終つてしまつた光景に長く止ることは心苦しいのです。」

彼は最初男爵を見た時から、心中では少なからず驚きもし、意外にも思ひ、事の如何になつて行つてゐるかも殆んど推了してしまつてゐたのであつた。が、クリスティヌがさうして涙にむせんだ顔をあり〳〵と描き出されることは堪へ難いことであつたのだ。

男爵はつゞけた。

「いや、全くです。だが、俺の話もこれでお終ひですから。」と云つて、飲み且つ食ひながら、「わしはその日一日、幸福な一對のものと日を送りました。哀れなる彼等よ、ほんとに二人は幸福だつたのです。晴れやかに、にこ〳〵して彼等は、庭を歩き廻りました。」

「如何いふ理由で俺が彼等の結婚を許諾したばかりでなく、進んでからも敏速にまとめ上げてしまつたのかとあなたは質問なさるのでせう。クリスティヌは貧乏です。然しジュリアスは彼女の分まで富んでゐます。俺の兄弟の財産をまで相續することになつてゐるジュリアスは、實際思つてゐるよりはもつと物持ちになれるわけですから。」

一俺は一度びフランクフオルトへ歸つて、そしてオツトフライド牧師を賴んで再びこちらへやつて來たのです。彼等の式を擧げてやるために。――昨日の朝、彼等はランデツクの教會で結婚の式を擧げました。そんなわけで、君のお手紙に對して答へることの出來なかつたジユリアスを許してあげて下さい。」

「式後一時間、二人は一ケ年間の豫定で旅行に出かけて行きました。彼等はギリシヤから、もつと東の方へも行き、それからイタリヤの方へ廻つて歸國するつもりで出發しました。」

「シユライベル氏はさう突然に娘御と別れることを欲しませんで、あのロザリオといふ子を連れてヴインナまで二人を送り傍々一しよに出發いたしましたよ。さあこれで俺の話は終りました。あなたは私のしたことについて何か云ふことがありますか。」

「有ります。」とサミエルは毅然としてテーブルから起ち上つた。「あなたはたしかに智識的に僕の裏を掻いてくれましたね。策戰は成功です。見事です。僕はすつかり機會を奪はれてしまひました。だがそこに殘されてゐるものがある。それは復讐!!」

彼はあはたゝしくベルを鳴らして召使を呼んだ。

「馬に鞍を置け!」

男爵はほゝ笑んで、

「彼等のあとを追ひかけるのですか。」

「いや。」とサミエルは答へた。「僕には僕一流の方法があるのです。あらゆることは待つものに來る、ジユリアス君と、クリステイヌは今は僕に克つてゐる。けれども時は運つて來るだらう。君はもう仕を終つたのだ。僕はこれから始めるのだ。」

「いや、まだ仕終つてはゐない。」と男爵は引き取つた。「彼等が旅してゐる一ケ年の間に、俺はジユリアスの夢想を實現してやるつもりなのだ。それが無かつたならあなたは今日、あなたに宛てたたゞ一通の置手紙と召使との外何物をも此の家に見出すことは出來なかつたかも知れないのだつた。俺はフランクフルトから來ることになつてゐる大工のことを待つてゐるのだ。大工が來次第、吾々は材料の買ひ出しに行く。そしてエベルバツクの古城趾に、再建築を施すのです。ジユリアスは、廢墟として見棄てた古城址を、歸つて來た時には美しい戀の花園として見ることが出來るのです。それが彼の夢想なのです。俺はその夢想の實現に努めるつもりなのです。彼の幸福、それは、ではあなたに對する唯一の武器といふものだ。」

「意味するところのものは、僕あることが彼の不幸の原因だと云ふのでせう。」とサミエルは靜かに答

へて云つた。

「だが、僕はあなたがたとへどんな極端なことを云はれようが、爲されようが、あなたをやはり慈父として僕は尊敬してゐる。まさかジュリアスと僕との仲を割きはしないでせう。彼は僕を賞讃し、僕は彼を愛してゐる。さうだ。それがすべてだ。いくらあなたがジュリアスの上に勢力をお持ちになつてゐるとしましても、彼の性質をまで今更變へるといふことは出來ないでせう。況して僕の性質までも——あなたはジュリアスに力づけ、彼を勵ますことは出來るかも知れない。城を再築することは、彼の性格を再築することでは無い。彼は死ぬまで、自分の指南車を必要とする人間だ。クリステイヌ——あゝ、彼女が彼の示導となる資格があるだらうか。一ケ年が終つたなら彼は僕を思ひ出すであらう。必要とするであらう。彼のあとを追ふ!! それが僕のすることか。それは反對に彼自身が僕を見失つてしまふたゞ一つの手段に過ぎない。」

「お聞きなさい、サミエル。」と男爵は口を挾んだ。「俺はすべてのことについて一か二かと定めてしまはなければ承知の出來ない人間だ。敵對を好む性質がある人間だ。あなたがクリステイヌに云つたこと、即ちクリステイヌがジュリアスに話すことが出來なくて、父親にのみ話したあのあなたの恐るべき言葉に對しても、俺はクリステイヌに代つてあなたに對しますぞ。」

「宜しうございます。」とサミエルは答へた。「さうなすつて下されば、僕は却つていゝのです。」

「いや、サミエル、さういふことを云ふものではない。」と男爵はさへぎつた。「それは自分で自分を欺いてゐると云ふものだ。あなたは思慮がある。一つざつくばらんに俺の胸の中を打ち明けようからよく聞いてくれ。俺はあなたを惡く考へ違ひしてゐた。君の手紙を見る毎に、俺は泣かされる。君は野心家で高慢なところがあるから俺にさう思はせたゞけなんだ。さう、俺はジュリアスの氣を惡くしないで、君の望みに添ふだけの財産は十分持つてゐる。君も知つてゐる俺の長兄は、ニューヨークで現在巨萬の富を擁してゐながら相續者が無い。俺は長兄に向つてたゞ一言さう云へばいゝのだ。長兄は俺の申出を受けるに相違ない。——サミエル、どうかお願ひだから、君のその、クリステイヌに對する、いやジュリアスに對するいろ〳〵の望みを抛棄してくれないか。そしてその代り、君は幾干を要すれば自分を支へて行けるか、本當のことを打ち明けてくれないかね。」

「馬鈴薯一片!!」

とサミエルは昂然として答へた。

「だが、あなたはシュライベル氏のテーブルで朝飯を御馳走してくれましたから、僕はもう滿腹です これ以上何を欲するサミエルでせうか。」

窓の外に馬の氣配がした。厩番がサミエルの乘馬を支度して來たのだ。

「左様なら、あなた。」

とサミエルは起ち上つて云つた。

「左様なら。僕は黄金の中に埋もれて死ぬよりも、曠野に飢ゑてゐた方がいゝ人間なのです。」

「もう一言!! サミエル。」と男爵は遮つて云つた。「君の惡い望みの果は、君自身が刈ることになるぞ君のクリステイヌに對する愛は、クリステイヌをして君を憎ましめ、その憎みは却つて彼等二人の幸福の原因となつてゐるのだ。」

「さうです、あなたの觀察は當つてゐるかも知れません。あゝ、僕が彼等の成功の原因!! そんならあなたは、僕に感謝を捧げなくてはならない。いや、『左様なら』は取り消します。一ケ年後、或はそれ以前に、では再びお目にかゝりませう。」

サミエルは挨拶を殘して馬に飛び乘り、昂然として去つて行つた。

男爵の頭はひとりでに胸に落ちて來た。

「あゝ、神を無にした爭ひ。」と男爵は呟いた。「彼は世界の戰爭を思ひ、俺は平和にと心掛けてゐるだが、神よ、吾々は共に罰を蒙らねばならないものではあるまいか。」

二四、驚異!!

一ケ年と一月は經過して、千八百十一年六月十六日の朝、十時半を少し過ぎた頃のことであつた。一臺の驛傳馬車が、曾てジュリアスとサミエルとが、嵐の夜道でグレツチヘンに出遇つた、あの道をランデツクの村の方へと軌つてゐた。

四人の人がその馬車の中に乘つてゐた。否、五人——まだ生れて二ケ月しか過たない、乳母の腕に抱かれてすや〳〵と眠つてゐる赤坊を數へれば、五人であつた。その乳母といふのは、健康さうな百姓風なギリシヤ婦人であつた。

他の三人の旅人、それは青服を着た若い美しい女と、若い男と、もう一人は下女らしい娘とであつた。

讀者の既に想像したであらうやうに、若い女と云つたのはクリステイヌで、若い男といふのはジュリアス、そして赤坊は勿論彼等の子供であつた。

クリステイヌが青服を着てゐるのは、既に十ケ月ばかり前にあつた、父親シュライベル牧師の死去によつてゞあつた。牧師は旅の途中、滯在中のある村の死者を弔ひに行つて、自分も共にこの世を去

らねばならない運命に遭遇したのであつた。

クリスティヌは泣く〳〵父の野邊送りを旅中にすました。彼女はもはや父親無しでも淋しくはなかつた。ジュリアスが彼女のすべてゞあつたから。父親が先立つて行つてゐた妻や子供にあの世で遇ふことは、彼女を悲しみから慰めるには充分であつた。

ロザリオは父の死後、男爵のはからひによつて、間もなくオツトフライド牧師に任ぜられることになつた。

それらの悲しみは、クリスティヌの幸福な日の曙を過る一片の雲霧のやうなものであつた。父の死は彼女をして急に大人びさせた。返らぬ過去の思出や悲しみの中に生きる代りに、彼女は新らしく母として、妻として生きて行つた。

そればかりでなく、身寄りのものゝ誰も無いといふ意識は、より強く深くジュリアスを愛させ、子供を可愛がらせた。

彼等は尤も樂しい甘い數ケ月間をギリシヤで送つた。東方の微風、青々とした空、それは涙ぐましいまでに彼等の心に感動を呼び起し、更に深く愛の結合を強めないではゐなかつた。

さうした樂しい月日も、子供のために止むなく見棄てねばならなかつた。然し二人は決してそれを

拒みはしなかつた。熱い風の吹いて來ないうちに、子供はそこを去つた方が、健康上に非常にいゝと醫者は云ふのであつた。彼等は直ぐに行李をまとめて歸國の途についた。

フランクフオルトへ歸る前、彼等は道順でもあるからといふので、一度びランデツクの思出の地を踏まふと決心した。

彼等は道を急いだ。

十三ケ月間の愛の生活は、ジュリアスをしてクリスティヌに對する思ひを些しも變へはしなかつた彼はいつも全心を傾けてクリスティヌの面倒を見、そして彼女の笑顔を待つてゐた。良人、然し彼にとつては良人は直ちに戀人でなければならぬ。彼等は樂しかつた數々の思出や未來の夢想を暫らくでも失ふことを恐れるものゝやうに話し合つては笑ひ興じてゐるのであつた。

馬車の大きな搖れに驚いてか、急に子供は眼をさました。ジュリアスは立つて乳母の腕から子供を取り、そしてクリスティヌの唇に子供の顔を近づけた。

「如何だ。お父さんはちつとも嫉妬家ぢやないからね。」と彼は云つた。「お前にお父さんの母さんをキスさせて上げるよ。ね、お前は二ヶ月前からお父さんの競爭者となつてしまつたのだね、その前まではお父さんは一人で母さんを愛してゐた。ところが今日はお前といふものがある。母さんは二人から

愛されて大變ですね、坊や。」
と云ひながら彼はクリステイヌがまだ接吻しない前に自分で接吻してしまつて、自分から笑ひ出した
「もうエベルバツクの廢墟は直ぐですわね。」
とクリステイヌはたづねて、夫の笑顏に答へた。
「うむ、もうそこだよ。」
とジユリアスは云つた。
間もなく馬車は地獄谷を傍らに見て急に曲つた。その時、ジユリアスは驚きとも何ともつかない叫びを上げた。
「何ですの？」
とクリステイヌは不審さうに訊ねた。
「あれをご覽!!あれを——」と彼は指差して、「まさか僕の間違ひぢやあるまい。あそこがエベルバツクの廢墟に相違なかつた筈だが……」
「え、あそこに相違ございませんわ。」
「お前は覺えてゐるだらうね、僕がいつかあの廢墟についてお前に云つたことを——？」

「え、覺えてますわ、お城を再築なさらうといふ——」
「夢ではなく、本當に城は再建されてゐる。」
「まあ、何といふ不思議なことでせう。」
とクリステイヌは眼を見張つた。
實際見る影もなく荒れ廢れ、崩れ落ちてゐた古城は、すつかり面目を改めて再築され巍然として空に聳え、嚴として斷崖に臨んでゐるのであつた。
道からはその半面しか望み見ることは出來なかつた。周圍の樹木がすつかり葉をつけて城の半面はその中に埋もれてしまつてゐるのであつた。
「誰がかうして僕達の夢を實現したのだらう。城は誰の所有なのであらう。」
とジユリアスは獨語のやうに云つた。
「聞いて見ませうよ。」
とクリステイヌも應じた。
並木道が整然として館邸の玄關口を見透すところに馬車は來てゐた。ジユリアスは馭者に命じて馬車を止めた。馭者は門に近づいてベルを鳴らした。

門の兩側にはルネッサンス式の小屋がついてゐて、ベルに應じて一人の男がその小屋から現れ、門を開いた。

「この館邸は何誰のですか？」

とジュリアスは訊ねて見た。

「フォンエベルバック様のでございます。」

と男は答へた。

ジュリアスは更に、

「その方はこゝにお出でになりますか？」

「いゝえ、外國旅行中でございます。」

と門番は答へた。

「館邸を拜見出來ますか。」

「お聞きして參りませう。」

門番は引退つた。

ジュリアスは門番の後姿を見送りながら、突として地から湧き出したやうに建て直されたこの館邸

に對して嫉妬の情を禁じ得なかつた。自分の夢想の實現されたことの喜び、然しそれは却つて他の誰かによつて夢想を奪はれてしまつたものと見ることも出來ないではなかつた。手入の行き屆いた、並木道の、青草の疊を敷きつめたやうな兩側や、その奥にかすかにゆかしく見えてゐる木目の新らしい建物——そして小鳥は枝に歌ひ、微風は葉といふ葉を殘らず訪れては過ぎて行く。ジュリアスは眼をあちらこちらへやつて、考へに耽りながら立つてゐた。

そこへ門番は歸つて來て云つた。

「どうぞお入り下さい。」

ジュリアスは妻の腕を自分の腕の中に取つて門を入つた。乳母はそのあとから子供を抱いてつゞいた。

玄關を上り、廊下を過ぎ、扉を幾つか明けては閉め、中庭を通り、そして彼等は建築家の腕と、設計者の頭腦とが相會して、いかによく調和された美麗な壯重な建物が出來上つたかを見て驚きを禁じ得なかつた。

彼等は更に幾つかの部屋々々を見、廊下に出で、階段を上り、そして飾りつけの出來上つたばかりの廣間や客間を見た。さうして見てあるきながらも、ジュリアスはかうした館邸に住む人の幸福を羨